ほうまさゆうこうこうりゅう
方正友好交流の会　会報７号

星火方正

～燎原の火は方正から～

方正の日中友好園林に立つ藤原長作さんの記念碑

藤原長作さんは方正県で藤原式水稲栽培技術を指導。その後中国全土に米作りを広め、「中国に対する賠償に代わる大事業を成した」（故・岡崎嘉平太氏）。「東北三省の人間は誰もが藤原さんの名前を知っている。おいしい白米が毎日食べられるのは本当に藤原さんのお陰だ」（黒竜江省政府外事弁公室副主任・王英春氏）といわれるほどの人である。

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒竜江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と友好の動き、インターナショナルな友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第７号）　～燎原の火は方正から～

目　次

私にとっての「方正」	渡辺 一枝	1
羽田澄子さんの記録映画『 嗚呼　満蒙開拓団』と日本政府の方正支援について	大類 善啓	3
ロケ随行記	奥村 正雄	8
『嗚呼　満蒙開拓団』ロケ・スナップ写真	自由工房	10
大好評のハルピン公演―神田さち子さんのひとり芝居―	石 金楷	12
日の丸は踏まれて　慰安婦は私の家から出て行った	飯牟礼 一臣	16
方正に集結した開拓団	高橋 健男	22
「友好の原点を歩く旅」訪中スナップ	編集部	26
知られざる日中関係	岩嵜 弘三	28
「友好の原点を歩く旅」に参加して	石橋 実	31
確認できた侵略の事実	鵜澤 弘	32
「友好の原点を歩く旅」―検証と謝罪と誓いと―	藤井 正義	35
旧満州を訪ねて　小関 光二　平和を願って	小関 征子	38
方正地区日本人公墓――友好の原点を歩く旅で考える	西 忠雄	40
私と方正	橋本 清一	42
日中友好の旅に思う	野田 尚道	44
方正を訪ねて	矢島 由利	45
前事不忘　後事之師	徳毛 貴文	47
方正日本人公墓への思い　木村直美　溥傑さんの瓢箪池	大類 善啓	52
「友好の原点を歩く旅」　＜備忘録的旅行記＞	藤井 正義	53
「友好の原点を歩く」訪中団、方正県と友好交流	石 金楷	62
周恩来に見る国際主義的精神　（日中友好 99 人委員会会報掲載記事）	大類 善啓	64
『満州開拓団・義勇隊関係史』編纂状況	高橋 健男	65
方正県等からの「中国帰国者」子どもたちへの日本語支援	山田 陽子	69
方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの	編集部	76
『満州―開拓民悲史』等書籍紹介　報告　編集後記	編集部	77

私にとっての「方正」

渡辺 一枝

「方正」という地名を初めて聞いたのは、いつどこでだったろう。哈尔滨の外僑養老院を訪ねた時だったろうか、あるいは哈尔滨から佳木斯に足を延ばした時か、それとも訪日中の“中国残留孤児”の面会に代々木のオリンピックセンターに行った時だったろうか。１９４５年１月に哈尔滨で生れ、翌年９月に母に背負われて引き揚げてきた私だが、母の語った“満州”の思い出話に、方正の名は出なかった。幼い頃の私は母の思い出話の“ハルピン”に異国情緒溢れる情景を想い浮かべ、スンガリーが流れ、キタイスカヤ、モデルンなどと片仮名で表示される地名のある地で生まれたことを、誇らしく感じていた。けれども小学校に入り、そして中学生になる頃には、そんな出自を疎ましく思うようになった。そんな私が「ハルピンに行こう」と思いたったのは、母の死後のことだ。初めてのハルピン行で中国の人たちの話す言葉を耳にしてからは、私はもうそこを「ハルピン」とは言えず、中国の人たちに倣って「哈尔滨（ハルビン）」と呼ぶ。それから後、幾度も哈尔滨に通い、また、哈尔滨を基点にして、中国の東北地方各地を訪ねた。残留邦人を尋ねての旅だった。方正という地名を聞いたのは、そんな旅を重ねるようになった日々でのことだ。そして、方正を訪ねたのだった。

春まだ浅く、道の端に並ぶドロノキはようやく芽吹いた頃だった。乾いた土の道には轍が、くっきりと刻まれていた。舞い上がる土埃で、後方の景色は見えなかった。前方に人だかりがして、私の乗った車もその手前で停車した。少し前に事故が起きたらしく、その処理に警察がやって来たところだった。パトカーが停まり、野次馬が集まっているのだった。乗用車と荷車が接触したらしく、荷車が路肩から下の畑地へ、転がり落ちていた。どうやら怪我人は出なかったらしい。

前に進めないまま、私は車から下りた。そして畑に傾いて倒れている荷車にカメラを向けた。すると途端に警察官が飛んできて、私からカメラを取り上げようとした。警察官の行為の意味が判らぬまま、私はその手をほどこうと必死だった。通訳のＴさんも驚いて、警官に懸命に抗議した。事故を見に来ていた野次馬たちも私たちに加勢して、その警官に抗議の声をあげてくれた。落ちた荷車の方に居て事後処理にあたっていた上司らしい警官が騒ぎに気づいて、やって来た。Ｔさんや人々の話を聞いていた彼は私に部下の非礼を詫び、通行止めされていた私たちの車を通してくれた。それが方正の人々と私の、初めての出会いだった。

方正の招待所で“残留婦人”のＯさんとＳさんから話しを聞いているときだった。突然ドアが開いて入ってきた人がいた。東北弁の訛りで「やぁ、日本語が聞こえたもんで懐かしくなって」と、その人は言った。びっくりしている私に「藤原長作といいます」と名乗られ、問わず語りに藤原さんは、私に御自身を語られた。

Ｏさんとさんの経てきたそれぞれの日々にも、また、藤原さんの歩いてこられた道に

も深く胸を抉られた私だったが、翌日、更にまた心揺さぶられる人に会った。松田ちゑさんだ。方正県の職員の方に案内されて訪ねた先が、松田さんの家だった。

その日私は、松田さんから話を聞かせて貰い、また通訳の T さんを介して県職員の方の話を聞き、そして日本人公墓に連れて行って頂いた。「方正地区日本人公墓」と刻まれた石碑が建ち、その後方には、自然に生えていたものだろうか、それとも公墓建立の折に植えたものだろうか、松の木が枝を伸ばしていた。松の枝に、風が渡っていた。

今の私はその時の自分の不明を恥じるが、その頃の私は、“残留邦人”の存在を知ってはいても、それぞれの人たちが歩まざるを得なかった苦難の道も、この方正に流れた日々の歴史も、何も知らなかった。ただ、ただ、“母の語らなかった満州”を知りたくて旅を重ねていたのだった。

O さん、S さんの話は各地で聞かせて貰った他の残留邦人の方たちの話をも併せて、私の国「日本」を、あるいは「国家」を考える上で大きな意味を持つようになった。私にとって方正への訪問は、それとは別の意味で大きな意味を持つ。藤原長作さん、松田ちゑさんに出会えた地であるからということは、言うまでもない。お二人の生き方から私は、多くを学んだ。が、方正が私にとって大切な地であるのは、そうしたことからだけではない。

方正への入り口で、名を知らぬ人々が素性の知れぬ私のために官憲に対して声を上げてくれたことは、それまで中国の人たちに対して抱いていた私の考えを変えた。それまでの私は、権力者の前では人々は卑屈に黙りこむしかないのだろうと思いこんでいた。だがそうではなく、道理のないことに対しては自分に関わりがない時であっても、はっきりと声をあげるのだと知った。

方正を二度目に訪ねたのは、天安門事件の直前のことだ。その時の O さんは、北京大学に在学中の息子さんの身を、とても案じていた。私は天安門広場で見てきた光景を、O さんに伝えた。そこには幾つもの人の輪が出来ていて、それぞれの輪では学生や労働者だろうか、誰かが中心となって、荒ぶらないがしっかりと通る声で、周囲の人々に何か語りかけていた。そしてその人を囲む人垣の中からまた、何か言う人が居て、そんな討論の輪が幾つもあったことを伝えた。私はそうした光景から、中国の人々の持つ変革への熱望とエネルギーを感じていた。

方正から北京に戻り、二日後に北京を発って帰国した。天安門事件が起きたのは、その翌日のことだった。

方正は今も私に、「国家」というものを、またそこに生きる人たちの生き様を、そしてまた国を違えた友好はそれぞれの地に生きる人と人の結びつきによってこそ築かれるということを、考えさせてくれる。日本、そして中国を思う時、方正は私に大きな意味を持つ。

＜わたなべいちえ、作家。著者『ハルビン回帰行』（朝日新聞社）には「残留婦人」との交流が詳しく描かれている。他に『チベット馬で行く』（文春文庫）『わたしのチベット紀行』（集英社文庫）など。長年チベットの自然や人々の暮らしを撮り続け、写真展も開く＞

羽田澄子さんの映画『嗚呼　満蒙開拓団』と日本政府の方正支援について

大類 善啓

当会の会報で方正日本人公墓の存在を知った記録映画監督の羽田澄子さんは、「残留孤児」の取材、方正への２度のロケと、精力的に取材を行っていたが、このほど『嗚呼　満蒙開拓団』（２時間の記録映画）を完成させた。その初公開が、第２１回東京国際女性映画祭の初日、１０月１９日（日）午後１２時からあった。

反響が大きかった『嗚呼　満蒙開拓団』

映画祭事務局には事前に評判を聞きつけた人たちの電話も多く、前売り券は完売だったとのこと。事前に切符を手に入れた人たちはなんとか入場できたが、当日券を手に入れようと会場前には長い列ができていた。が、残念ながら入場できない人がかなり出たということだった。それほど多くの人たちに注目された映画だった。

映画が始まる前に、外国から参加された映画監督も壇上に上がって紹介され、羽田さんもご挨拶された。その後、方正友好交流の会から羽田さんに花束を贈った。また 1945 年、佳木斯（ジャムス）で日本人避難民の保護に当たったという「松江部隊」の実態の解明に力を傾注している佳木斯医科大学出身の医師・池田精考先生も羽田さんに花束を贈られた。

映画には最初の方で、会報『星光方正』の１号と２号の表紙がスクリーンに紹介され、ロケに訪れた方正県、日本人公墓、また残留婦人や孤児だった人たちや養父母たちが登場した。我々の会のささやかな活動が、このような記録映画に結実したことを思うと、とても感慨深い。

映画の後は、「満州とは・・・」というシンポジウムが開催された。パネリストは、ジャーナリストで元日銀副総裁の藤原作弥さん、岩波映画ホールの支配人で、この映画祭のジェネラルプロデューサーである高野悦子さん、それに羽田さんである。３人とも旧満州出身の方々だ。そのパネルディスカッションで、羽田さんは、「私はなんとか無事に大連から引き揚げてきたが、あの広大な満州から、本当にすべての日本人が引き揚げて来られたのだろうか。その疑問がずっとあったが、帰国後日常の生活に追われて、忘れていた。しかし残留婦人や孤児たちが出てきて、やっぱり日本に帰れなかった人たちが大勢いたのだと思った」と語り、それ以来、残留孤児裁判などを取材し、方正日本人公墓を知るようになった経緯を語られた。

高野さんは、自分が制作しなければいけない映画を羽田さんが、代わりに創っていただいたようなもの。来年の６月に岩波ホールで一般公開するようにしたと語られた。（正式に６月１３日～７月末までの上映が決まった）藤原さんからは思いがけず、「方正友好交流の会の活動も素晴らしい」という言葉が出てきたのには驚いたが、これも嬉しいことだった。

来年６月の一般公開では、多くの人たちに見てもらい、日中の現代史を深く認識してもらいたいと、当会も全力を挙げて支援していきたいと思う。

日本政府の方正支援

さて、今年の１月、宮本雄二中国大使が、中国駐在の日本大使として初めて方正日本人公墓を参拝されたことを前号の６号で詳しく報じたが、この１０月１４日、ハルビン市内のホテルで、日本政府の草の根無償資金協力の署名式が行われ、日本側からは宮本雄二大使が出席された。中国側からは杜家毫・常務副省長らが出席。署名された黒竜江省における新規の案件５件のうち、４件が方正県に対するものだった。日本政府の対中援助において、方正県に対する重視の姿勢が明確に示されたのだ。その内容は次のようである。

１、方正県方正鎮八名村の飲料水改良計画―上水道の老朽化した配管の交換などを行う８５０万円の資金援助。

２、方正県徳善郷双鳳村の飲料水改良計画―上水道の老朽化した水道管の交換など行う９９１万円の資金援助。

３、方正県伊漢通郷の衛生院の建設計画―周辺地域にほかの医療施設がないため、医療施設の建物を建築するという９８３万円の援助。

４、ハルビン市双城市団結郷の小学校建設計画（これも資金を提供する先は方正県人民政府）―周辺の３つの学校を合併する形で中日友好学校を建設する。現状では教室に電気が通っていないため、天気が悪いと教室内で本が読めない状況がある。９９９万円の資金援助。

５、大興安嶺地区呼瑪県の学校建設計画など。

かつて当会の前身である「ハルビン市方正地区支援交流の会」で、ささやかなＯＤＡ予算での支援などを行ってきたが、宮本雄二大使の努力もあり、ここへ来て日本政府も本格的に方正への支援を行うようになってきたことは喜ばしい限りだと思う。

北京放送局の付顕（フ エイ）さんと出会う

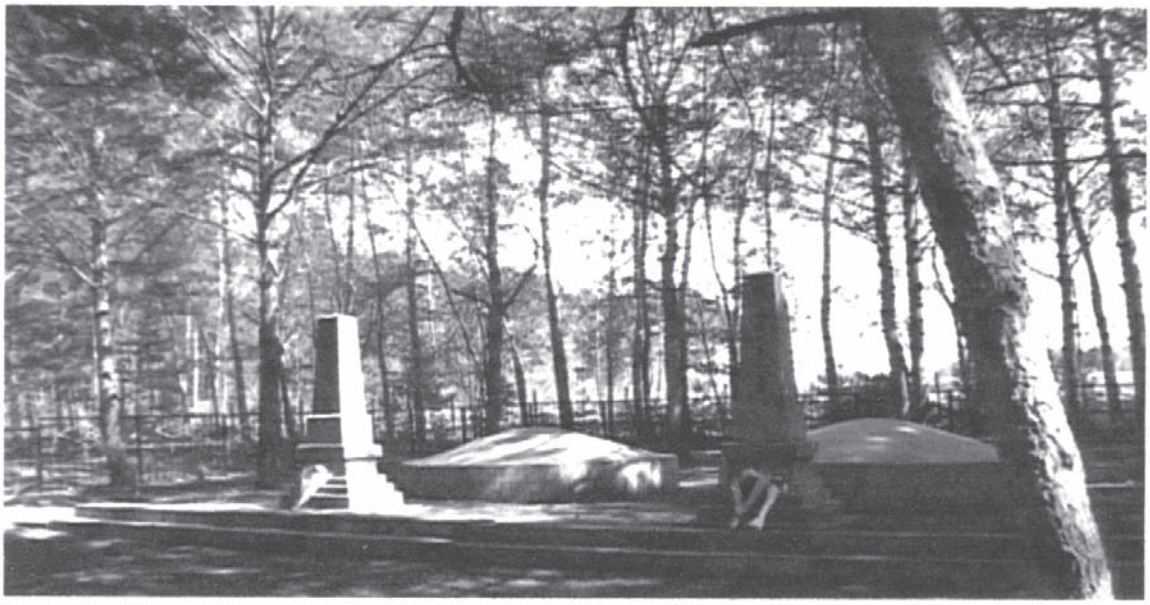
もう一つ、これはやや個人的なことに属することかもしれないが嬉しいニュースがあった。05 年の８月の夏に、中国国際放送局いわゆる北京放送が、方正日本人公墓を取り上げた特別番組『ポプラが語る日中の物語―中国の大地にある日本人墓苑』を制作し放送した。その際、北京放送のスタッフが偶然、当会の存在を知り、私のところに電話をかけてきて北京から取材を受けたことがあった。その時のインタビュアーである付顕さんとの出会いである。（この番組については『星火方正』２号に詳しく紹介した）

付顕さんは現在、北京放送日本支局長として東京に駐在している。その付顕さんが１１月１４日、国際善隣協会で、「今どきの中国の若者意識・・・７０年代以降はどう違う」という講演をするというメールが善隣協会から入ったので、これは行かねばならぬ、と出かけてお会いすることができた。付さんは「あの番組から、もう３年も経つんですね」という。お互い月日の経つ速さを思った。その時、初めて付さんから、あの番組がその年、2005 年度の「中国新聞賞」という中国トップクラスの報道大賞を受賞したのだと教えてくれた。それによると、中国新聞賞は、中華全国新聞工作者協会という中国のジャーナリストたちの協会が主催し、1991 年から設けられ、毎年優れた新聞のシリーズ記事やテレビやラジオ番組などに与えられる賞だという。付顕さんの東京駐在はあと１年もないという。大いに見聞を広め、日本の良さ、問題点などを率直に紹介してほしいと思う。

＜おおるいよしひろ、本会事務局長＞

＊映画祭に配布されたチラシと次頁はプログラムの関連記事

嗚呼 満蒙開拓団



2008年／120分／カラー／ 製作･配給　自由工房

この映画について

羽田 澄子

私は、旧満州の一部と見られていた関東州の大連に生まれ、小学校も女学校も旅順。そして戦後、引揚げてきました。しかし、同じ満州でも最南端の都会で暮らしていた私は、戦後、北満で起きていたことを知りませんでした。

知ることになったのは「中国残留日本人孤児」の来日調査がはじまり、さらに2002年に中国「残留孤児」国家賠償請求訴訟がはじまったことがきっかけでした。裁判がどうなるかと見守っている間に、中国東北地区の方正（ほうまさ）県にある、「方正地区日本人公墓」のことを偶然知ることになりました。

方正地区には、ソ連軍の満州侵攻、日本の敗戦によって、満州の奥地から多くの開拓民が避難してきて、ここで数千人もの人々が亡くなっているのです。

「この人たちの遺骨をお墓に」、と願ったある残留婦人の思いを受け止めたのは、中国の周恩来総理でした。周恩来の指示によって、中国方正県政府が建設したのが、「方正地区日本人公墓」なのです。

「お国のため」と送り込まれた満州移民は、敗戦によって廃棄されたも同然となりました。その体験者の多くはすでに亡くなっていますが、いろいろな方々にインタビュー。日本の近現代史を振り返り、日中友好が大切であることを訴えます。

◆製作：工藤充／演出・ナレーション：羽田澄子／撮影：相馬健司／整音：滝澤修／ピアノ：高橋アキ（サティ・ピアノ音楽全集より）／吹替ナレーター：喜多道枝
◆協力スタッフ　演出：佐藤斗久枝・石井かほり／撮影：西尾清／コーディネーター：奥村正雄／中国語翻訳：仲偉江／中国語通訳：佐渡京子
◆協力　ハルピン市方正県人民政府・方正県人民政府外事僑務弁公室主任　王偉新・ハルピン市日本中国残留孤児養父母懇親会　秘書長　石金楷・黒龍江民族旅行社・方正友好交流の会・長野県泰阜村・大類善啓　香山磐根・大竹洋子　国友俊太郎
◆資料提供　愛知県立農業大学校・新華社・毎日新聞社・寺村謙一・藤田繁

嗚呼 満蒙開拓団

A Story of Manchurian Settler Communities

★日本／2008年／DVD／カラー／ドキュメンタリー／120分
★提供／自由工房
★スタッフ
監督／羽田澄子
製作／工藤充
撮影／相馬健司
録音／瀧澤修
協力スタッフ／演出：佐藤斗久枝、石井かほり
撮影：西尾清

★Japan / 2008 / DVD / Color / Documentary / 120min.
★Contributed by Jiyukobo
★STAFF
Director / Sumiko Haneda
Producer / Mitsuru Kudo
Cinematography / Kenji Soma
Sound / Osamu Takizawa
With the cooperation of directions: Tokue Sato, Kaori Ishii, cinematography: Kiyoshi Nishio

私は満州の一部と見られていた関東州の大連に生まれ、小学校も女学校も旅順。そして戦後、引き揚げてきました。しかし、同じ満州でも最南端の都会に暮らしていた私は、戦後、北満で起きていたことを知りませんでした。知ることになったのは、「中国残留日本人孤児」の来日調査がはじまり、さらに2002年に中国「残留孤児」国家賠償請求訴訟がはじまったことがきっかけでした。裁判がどうなるかと見守っている間に、中国東北地区の方正（ほうまさ）県にある「方正地区日本人公墓」のことを偶然知ることになりました。

方正地区にはソ連軍の満州進駐、日本の敗戦によって、満州の奥地から多くの開拓民が避難してきて、ここで数千人もの人が亡くなっているのです。「この人たちの遺骨をお墓に」と願ったある残留婦人の思いを受け止めたのは、中国の周恩来総理でした。周恩来の指示によって、中国方正県政府が建設したのが、「方正地区日本人公墓」なのです。

「お国のため」と送り込まれた満州移民は敗戦によって、廃棄されたも同然となりました。その体験者の多くはすでに亡くなっていますが、いろんな方にインタビュー。日本の近現代史を考え、日中関係を考えます。

（羽田澄子）

I was born in Dalien, in Guandong Province, considered part of Manchuria, and went to elementary and girls' high school nearby in Lushun. Following the end of World War II, I was returned to Japan. Having lived in a city in the southernmost part of Manchuria, however, I had no idea of what had happened in the north until the 'war orphans', Japanese children left to be raised by Chinese parents, began coming to Japan in search of their families in the 1980s, and a suit for reparations from the Japanese government was filed in 2002. While I watched the progress of the court case, I happened to learn of the existence of the 'Fangzheng Japanese Graveyard' in the province of Fangzheng, in Northeast China.

Fleeing invasion by the Soviet Red Army and Japan's defeat, many Japanese settlers came from deeper in Manchuria to Fangzheng Province, and several thousand died there. It was Zhou Enlai, future Premier of the People's Republic of China, who bowed to the wishes of women left behind for a cemetery, and at his instruction that the government of Fangzheng established it.

Those who had been sent 'for the nation' to settle in Manchuria were treated as scrap after the defeat. Most who went through these experiences have now passed on, but I was able to interview several. To consider recent Japanese history is to consider Japanese-Chinese relations.

(Sumiko Haneda)

★羽田澄子

1926年、旧満州生まれ。自由学園を卒業後、岩波映画製作所に入社し、「村の婦人学級」（57）にはじまって90本を超すドキュメンタリーを手がけた。「薄墨の桜」（77）から自主製作に取り組むようになり、「早池峰の賦」（82）、「AKIKO―あるダンサーの肖像」（85）、「痴呆性老人の世界」（86）、「安心して老いるために」（90）、「歌舞伎役者 片岡仁左衛門」6部作（92～94）、「住民が選択した町の福祉」3部作（97～05）、「平塚らいてうの生涯」（01）、「山中常盤」（04）、「終りよければすべてよし」（06）など、一作ごとに話題を集める日本の女性監督のパイオニアである。

★Sumiko Haneda

Born in Manchuria in 1926, she joined Iwanami Film Productions after graduating from Jiyu Gakuen. *Women's College in the Village* (57) was the first of more than 90 documentaries she has made. Beginning independent production in 1977 with *Cherry Tree with Gray Blossoms*, she has in each of her films taken on a different social problem, and with such works as *Ode to Mt. Hayachine* (82), *AKIKO–A Portrait of a Dancer* (85), *How to Care for the Senile* (86), *Getting Old with a Sense of Security* (90), *Kabuki Actor Nizaemon Kataoka* (6 parts, 92-94), *A Town's Welfare Programs That Residents Chose* (3 parts, 97-05), *The Life of Raicho* (01), *Into the Picture Scroll–The Tale of Yamanaka Tokiwa* (04), and *All's well that Ends Well* (06), she is a pioneer among Japan's women directors.

シンポジウム：満州とは

Symposium: Manchuria

「嗚呼 満蒙開拓団」

パネリスト：藤原作弥、羽田澄子、 髙野悦子
司会：小藤田千栄子

Panelists: Sakuya Fujiwara, Sumiko Haneda
Etsuko Takano
Moderator: Chieko Kotoda

藤原作弥：作家、ジャーナリスト、元日銀副総裁。1944年から満州・興安街（現中国・内モンゴル自治区）に住む。抑留生活を経て46年11月、帰国。82年からの執筆活動で多数の著作があるが、とくに、山口淑子との共著でミュージカル「李香蘭」の原作となった『李香蘭・私の半生』がよく知られている。

Sakuya Fujiwara: Writer, journalist, former Deputy Governor, Bank of Japan. In 1944 he went to Xinganjie (Wangyehmiao), Manchuria, now Ulanhot, in the Mongol Autonomous Region. After spending time in an internment camp, he came back to Japan in November of 1946. Since 1982 he has published many works, but is best known as co-author, with Yoshiko (Shirley) Yamaguchi, of her life story, *Ri-Kouran: Half a Life*, which formed the basis of the musical *Ri-Kouran*.

90本以上の記録映画をつくり、日本の社会に問題を投げかけつづけている羽田澄子さんが、ついに生まれ故郷の満州を取り上げた。私たちが待ち望んでいた作品であり、その新作の上映を受けてのシンポジウムである。

髙野悦子さんも満州の大連、瀋陽、ハルビンをふるさととしている。この二人の女性に共通するのは、おおらかさと聡明さである。植民地である満州で成長した、その子ども時代の生活が、中国人を犠牲にした上でのものであったことをその時は解っていなかったけれど、長じて人間の苦しみや社会の矛盾をしっかりと把え、戦争と平和の本質を見抜くことができたのは、やはり満州で生まれ育ったことと無縁ではない。

もう一人のパネリスト、藤原作弥さんは同じ満州でもソ連との国境近く、現在の内モンゴル自治区に住み、迫り来るソ連軍から逃れて南下した安東で、1年半の難民生活を過ごした。当時8歳で、一歩遅れれば残留孤児になっていたかもしれない藤原さんは、戦争がもたらす悲劇を後世に伝える責務があると考え、ジャーナリストとして、作家として、今もその努力をつづけておられる。

「満州とは」というタイトルは仮につけたものである。三人三様の満州体験を語っていただく中で、きっと現在の日本の姿が現れ、そこから明日を見つめなおす力が生まれてくる、そう信じている。

（大竹洋子）

Sumiko Haneda, who has made more than 90 documentaries focusing on social issues within Japan, now takes up the subject of Manchuria, her birthplace. Our symposium comes on the heels of the screening of this long-awaited film.

Etsuko Takano also called the Manchurian cities of Dalien, Shenyang, and Harbin home. What these two women share is a wisdom and broad-mindedness. While they did not, growing up in the Japanese colony of Manchuria, realize as children that their lifestyles were based on victimization of the Chinese, the fact that they were born in Manchuria is not without connection to their long sensitivity to human suffering and social contradiction, and their insight into the bases of war and peace.

The third panelist, Sakuya Fujiwara, also lived in Manchuria, near the border with the Soviet Union in what is now the Inner Mongol Autonomous Region. Fleeing south from the advancing Soviet army, he spent 18 months in an internment camp at Andong. Eight at the time, he came very close to being one of the 'war orphans', the Japanese children left behind in China, and as a journalist and writer continues to feel it is his responsibility to transmit the tragedies born of war to future generations.

'Manchuria' is the working title of this symposium. As these three people speak of their experiences there, it is our belief that from these discussions will emerge the form of present-day Japan, and the power with which to look again at its future.

(Yoko Otake)

記録映画『嗚呼　満蒙開拓団』（羽田澄子監督）の撮影現場から

奥村 正雄

ハルピンから方正へ高速道路で１８５キロ、３時間近いマイクロバスでの移動。この間、トイレ事情はどうなのか、羽田さんは方正ロケを決断する前、「私は生まれつき腸が弱くて…」と言って、この不安で方正行きを迷ったようだった。が、訪中を決断し、いま見渡す限りとうもろこし畑のつづく広野を疾走するバスが、途中、ガソリンスタンドでトイレ休憩しても、彼女はその不安がウソだったように、バスから降りて一息入れている同行者にインタビューし、カメラを向けさせ続けた。

２００７年８月２２日から２６日まで４泊５日。一行１２人のうち、羽田さんと助監督Ｓさん、カメラのＫさん、それに以前羽田さんの事務所にいて、いまは北京の日本大使館で通訳をしているＰさんが助っ人としてハルピンで合流していた。

Ψ　鎮魂のシャボン玉

日本人公墓の周辺は背の高い赤松が多く、すでに秋の気配が濃くなった墓地の虚空にサワサワと松籟が聞こえ続けた。それを鎮魂曲とするように、一組の教員夫婦が日本から携えて吹くシャボン玉が林間にゆらいで消えていった。６２年前、各地の開拓団からここ方正へたどり着くまでに、多くの老幼婦女子が事切れた。シャボン玉を飛ばし続ける夫妻には、教室での光景と６２年前、荒野で消えていった子供たちが重なっているようだった。

宿泊する宿に戻ると、ロビーに残留孤児を育ててくれた３組の養父母が待っていた。部屋で話を聞く。９２歳の魯万富さんは少し耳が遠くなっているが、身内に付き添われて、インタビューに大きな声で答えてくれた。魯さんが育てた孤児が愛知県にいることを知り、１年後の今年、５月７日から１１日までの２度目のロケにその養女の夫が同行、久しぶりの再会シーンがカメラに収められたが、最近、９３歳で他界されたことを、私は先日完成し、第２１回東京国際女性映画祭で公開されたフィルムの、無言の白い文字で知った。この魯さんは今年の１月、北京から日本の大使夫妻がハルピン、方正を訪ねたときに、方正で大使に招かれ、孤児を育ててくれた養父母の代表として慰労されたのだった。

Ψ　砲台山に分け入る

日本人公墓は砲台山の麓にある。資料館の赤い屋根が、周りの緑一色の中で、遠くからでもそれとわかるが、４５年前、おびただしい白骨を見つけた松田ちゑさんの申請で、最初に木の墓標が建てられたのは、今の公墓からもう少し砲台山に分け入った場所だ。昨年、撮影班はこの公墓の原点を撮ろうと方正県政府外事僑務弁公室の李副主任の先導で山あいに分け入った。だが行けども行けども、それらしい場所にたどり着けない。

『標高が少しも上がらない感じだね』

などと言いながら李さんの後に従う。路傍の片隅に薄い石板の墓碑が建てられ、周りの藪のところどころに紅い布切れがぶら下がっている。昔、身内を土葬した場所に、最近、少し小金ができた近親者が新しく墓標を立てて供養した跡のようだ。

結局、この時は引き返すほかなかった。

Ψ　田の中を走る８２歳

２年目の今年は、背景の季節感を変えるためもあって訪中を５月上旬とした。１５名の墓参団のうち撮影スタッフは５名。２台のカメラで立体的な画面を作るための増員だった。もう一つ昨年と変わったのは、魯万富さんの養女の夫・丸沢恒好さん（７４歳）が開拓団関係者として加わったことだ。

墓参団の８名と、撮影班の６名とに分かれ、私は撮影班に入る。２台のマイクロバスで丸沢さんが母親と暮らした村へ行った。２台の車にそれぞれ携帯電話と無線機を持ったスタッフが乗り込み、撮影場所が別々でも緊密な連絡を取りあう。村に着く。丸沢さんの親戚の村人のあとを追って、田んぼの片隅に少し盛り上がった土饅頭のお墓に向かう。幸い好天続きで農道の乾いた土が盛り上がったところを足先で選びながら歩を運ぶが、いったん一雨くればたちまち歩けなくなる農道だ。急ぎ足でお墓へ向かう列を撮るため、カメラマンが田んぼの中を走って先へ回る。羽田監督もそれを追う。８２歳とはとても思えない足捌きだ。

土饅頭のお墓に果物やお菓子が供えられる。紙銭が燃やされ、龍賓酒（焼酎の類の地酒）をかけて手を合わせる。それを２台のカメラが違う角度からとらえる。

部落へ戻って丸沢さんが親戚の人たちと別れの挨拶をする。「泊っていけないのか」「こんど何時くるんだい？」丸沢さんの手を農婦が泣きながらつかんで放さない。

Ψ　公墓の原点へ

１日早くハルピンに戻った墓参団は帰国前日、７３１部隊跡の見学や松花江岸、帝政ロシヤ時代に作られたキタイスカヤ通りの遊覧，買物などの日程。同じ頃、撮影班は公墓の撮り足りなかった風景を撮っていた。撮影班だけが向かい合う林の中の公墓は、秋風に鳴る樹々の葉ずれの音が、いっそう荒涼とした感じに変わっていた。次いで新しい情報をもとに、最初に白骨が見つかり、木の墓標が建てられた、いわば公墓の『原点』を撮ることになった。木の墓標が建てられてまもなく、そこにダムが作られることになって墓標は現在地へ移動することになった、そしてその機会にハルピンから現在の花崗岩の墓碑が松花江を船で運ばれて、今の場所に建てられたのだった。その原点への道は、当時の事情を知る人の案内で、車で簡単に行くことができた。昨年、あてどもなく山あいの道を歩いて探したのが嘘のようだった。ダムは自然湖のように素朴で、６０年前、飢えと寒さと疫病で息絶えた故人たちにとっては、静かな安息の場所にも見えた。

（おくむらまさお、本会参与）

羽田澄子監督のロケ風景

日中友好園林で方正公墓を撮る羽田澄子さん

公墓を遠くから撮影するカメラ位置を指示する羽田さん

伊漢通の開拓団跡で。当時の住宅には今中国人が住む

田んぼの中にある亡き養母の土饅頭（墓）で　＜写真提供：㈱自由工房＞

大好評のハルピン公演

神田さち子さんのひとり芝居『帰ってきたおばあさん』

石 金楷

２００８年１０月２６日、日本の「神田さち子中国の旅」一行１５人がハルピンを訪れ、残留孤児の養父母および今も中国に残る残留孤児のために慰問公演を行い、また黒竜江省竜江劇場でも一般公演を行い、広く各界から好評を博した。

一行は１６日午後ハルピンに到着。ハルピン市日本残留孤児養父母連絡会秘書長、残留孤児代表、連絡会ボランティアが空港に出迎え、歓迎横断幕の前で記念撮影を行なった。翌２７日午前９時、一行は養父母連絡会を訪問、双方プレゼントを交換、連絡会は神田さち子さんに感謝状を贈呈、日本の友人からはカンパが渡された。慰問公演は正午、万達ホリデー・ホテルの会議室で行なわれた。演しものはひとり芝居『帰ってきたおばあさん』。

＊　感動した書家「海上昇明月…」と揮毫

ひとり芝居で６５歳の神田さち子さんは豊かな表情と入神の演技で、一人の残留婦人とその娘が中国でなめた艱難辛苦の人生を演じた。観客は主人公の苦痛を思って苦痛を感じ、主人公の嘆息を受けて嘆息し、たまらずに泣いた。同行の日本人記者と取材に来た中国の記者は感動の場面をカメラに収めた。芝居を見た養父母の実子竜雅君さんは黒竜江省の有名な書家だが、その場で『海上昇明月　天涯共此時』と書き満場の喝采を浴びた。

養父母たちが孤児を育てた経過を聞いた神田さち子さんは、養父母と孤児たちに酒を注ぎ、ともに人類の永遠を祈った。宴会の最後は全員手をつなぎ『北国の春』を歌って終わった。翌日の『生活報』、『晨報』は早速、この一件を報じた。

一般市民向けの公演はこの日の夜６時半から行われ、大きな成功を収めた。養父母連絡会の顧問であり、黒竜江省社会科学院東北アジヤ研究所所長代理笪志剛先生は芝居を見終わったあと「日本のひとり芝居『帰ってきたおばあさん』を見て」と題して次のように紹介した。

「１０月２７日、筆者夫妻は日本の著名なひとり芝居芸術家神田さち子さん演ずる『帰ってきたおばあさん』を見た。芝居はハルピン市南崗区阿什河街１１８号にある黒竜江省竜江劇場で行なわれた。黒竜江省内の文化界、芸能界の面々、工業大学、黒竜江大学日本語科の学生と先生たちが鑑賞した。省文化庁副庁長、竜江劇場の院長、著名な竜江劇の舞台芸術家・白淑賢などもかけつけた。『帰ってきたおばあさん』は舞踏、演技、セリフで構成され、タイトルは戦争中および戦後、中国人に助けられて生き抜いた主人公鈴木春代と娘初子の波乱に満ちた人生体験を表現していて、日本の軍国主義が行なった侵略戦争に対す

る批判と告発に満ちている。そして中国人民と養父母が恨みを徳に換えた心の広さを謳歌したものだ。「私の命は中国の土地にある。それこそ私の中日友好そのものです」これがこの劇のテーマであり、日本に帰った日本の老人が、もう一度中国に帰ってくるという主人公の胸の内を見事に舞台の上で表現した。

筆者はこのようなひとり芝居を初めて観た。そしてこんなに強烈に魂をゆすぶられたのは初めてである。神田さち子さんはごく簡単な舞台装置で転換の多い役柄を豊かな表情で演じた。開拓団員として中国に来た鈴木勝造夫婦がソ満国境地帯に住み、４人の子を産み幸せに暮らしていた。が、敗戦の混乱の中で必死の逃避行を余儀なくされる。空からは飛行機に、地上では追撃に逃げ惑う中、春代は土地の悪者に強姦される。勝造は屈辱に耐えられず春代を捨て、単身帰国する。春代は生きるため中国人に救いを求め、やがて王才人と結婚。春代は看護婦の経験を生かして村で助産の仕事に明け暮れる。文革中は「日本鬼子」と罵られ、苦しい毎日を生きた後、中日国交回復の日が来てようやく日本に帰国した。が、故郷・鹿児島櫻島での歓迎会で勝造の手紙を見る。そして彼女はプライドを持った一人の中国人として、もう一度、中国に帰る。この場面で会場はシーンとして声もなく、多くの観客が涙を流した。

神田さち子さんは背が高くはない。が、ひとりの母親の大きさを演じた。彼女は若くはない。が、彼女は日本女性の優しさと美しさを演じた。彼女はがっしりした体ではない。が、その痩せた体で侵略戦争に対する批判と中日友好に対する切実な期待を演じた。

＊　ボード『子宮』で沸かす

筆者はとりわけ神田さち子さんがこのひとり芝居を通して、あの戦争に対する認識に感服した。普通の被害者意識と同時に日本の加害者意識、戦争に対する深刻な反省と謝罪をも演じた。芝居は日本語がわからない観衆をも動かした。彼女は主人公が村人に中国語を習うくだりで大きなボール紙に書いた「肝臓」「心臓病」「腎臓」を観客に読ませた。とりわけ最前列に坐っていた白庁長に「子宮」の発音を読ませたときには、そのユーモアに会場を覆っていた重苦しい雰囲気が一瞬になごんだ。

聞くところによると神田さんは日本でもう１６６回の公演をやっているそうだが、海外ではハルピンが初めてだという。芝居が終わると黒竜江省文化庁が彼女に大きな花束を贈り、白庁長は舞台で彼女と抱き合った。

１０月２８日、神田さん一行は方正県中日友好園林を訪ねて参拝。翌２９日は長春市の日中友好楼を訪ねて養父母を慰問。３０日、ハルピンへ戻り養父母連絡会秘書長の案内で東北アジヤ研究所を訪問して歓談。３１日、帰国の途に着いた。　　（奥村正雄訳）

＜せききんかい、ハルピン市日本残留孤児養父母連絡会秘書長。彼の兄は留孤児である。母親が養母として兄を育てた。＞

神田さち子さんのハルピン公演

熱演する神田さち子さん

さち子さんの両側は、かつて残留孤児だった二人。だが、
未だ日本政府から認められず、今も帰国できないでいる。

さち子さんを囲む中国の養父母たち

さち子さんは養父母連絡会の石さんから感謝状を贈られた。さち子さんの左隣は、元ＮＨＫアナウンサーの酒井宏さん。　　＜写真提供：神田さち子さん＞

日の丸は踏まれて

慰安婦は私の家から出て行った

飯牟礼 一臣

先日、大類善啓さんから 『星火方正』 第６号が送られてきた。「方生」？ 「ほうせい」なのか「ほうまさ」なのか、正しい読み方すら知らなかった私に何か満州の想い出を書いてみないかとのお誘いであった。一体どんな本なのだろうかと、ページをめくって驚いた。一読三嘆擱く能わず。想いのたけを込めた文章に圧倒された。日本人公墓の存在も初めて知った。私は開拓団員ではない。投稿する資格の無い人間だと思ったが、開拓団の悲惨な状況はこの目で見てきた。つたない文章だが、私が小学生の時に体験した一部をしたためてみることにした。お読み頂ければ幸いである。

機関銃を突きつけられて

その時、私は小学校の４年生だった。昭和２０年８月１５日、私の住んでいた奉天（瀋陽）を含めて旧満州は、どこも抜けるような晴天であったという。戦争終結のラジオ放送は、奉天から少し離れた疎開先で聞いた。

放送終了と同時に、街中に現地の人々が溢れた。爆竹の音が鳴り響き、日の丸は目の前で踏みにじられ、あっという間に「青天白日旗」が掲げられた。恐らくその数、万を超えるものであったろう。小学生の私はただ呆然として街を埋め尽くした旗の波を見ているだけだった。これだけの旗を一日で作ることは不可能である。日本が負けることを事前に知って準備していたことを物語る。

この日を境に、学校で習った「日・満・漢・鮮・蒙」が仲良くして行こうという「五族協和」と「王道楽土」の夢は儚くも崩壊。満州人と日本人の地位は逆転した。

役所も警察からも日本人は放逐され、部長から末端に至るまで全員が満州人となった。奉天省公署の課長をしていた父も職を失った。収入を求めて多くの日本人が俄か商人なったが、武士の商法でうまくいった人は少ない。父は荷車を曳いて野菜を売り歩いた。帰り道、マンドリン銃を肩にしたソ連兵に捕まり、その日の売り上金すべてを巻き上げられた。

キンツバの屈辱

１０歳の私はチリ紙とローソクを背負って一軒一軒訪ねては売り歩いた。出てきた女の子が同級生で気恥ずかしい思いをしたこともあった。ローソク売りの後は、街角でキンツバを売った。昔の駅の弁当売りのように肩から吊るした台の上にキンツバを並べて、道行

く人に声をかける。

ある日のことだった。数人の労働者風の中国人がキンツバを手にした。買って貰えると思った私は感謝を込めて「「謝々」と頭を下げた。黄色い歯をむき出しにして口に入れた男はニタリと笑った。「オイシクナイネ」。食べかけのキンツバを台の上に放り投げると、金も払わずに去って行った。まわりの中国人がドッと笑った。子どもの私は抗議するすべもなく、じっと涙をこらえて歯型の残ったキンツバを見ているだけだった。

爾来、７３歳の今日に至るまで、私はキンツバを口にしたことがない。少年時代に受けた屈辱感に苛まれるからである。

奉天には色々な軍隊がやって来た。ソ連軍、蒋介石の国府軍、共産軍の八路軍（パーロ）の三つが入り乱れ、我々には一体どれが本当の支配者なのか判らなかった。ソ連軍は真っ赤な軍票を発行、経済を混乱させた。軍票よりも戦争に負けた日本の紙幣のほうがはるかに価値があった。囚人兵が主力と噂されたソ連兵は粗暴極まりない男たちだった。ダッダッダとマンドリン銃で人を脅しては腕時計を強奪、腕一杯に巻きつけては喜んでいた。竜頭の巻き方を知らない。時計が止まるとまた奪う。目覚まし時計を奪ったソ連兵が、歩いているうちに突然尻ポケットで鳴り出したベルに仰天、慌てて放り投げて逃げたこともあった。

「マダム・ダワイ」と女性を襲う。私の家にも夜中にソ連兵が押し入り、母は裸足で窓から飛び降り、隣家の庭の中に隠れた。子どもの私が最初に覚えたロシア語が「マダムダワイ」と「アジンドア」だった。

荷車に積まれた凍死体

夏が過ぎ、秋風が吹き、やがて厳しい冬がやって来た。北満から命からがら逃げてきた開拓団の人々が次々と奉天まで逃げて来た。着るものは真っ黒に汚れ、ボロボロになっていた。ある集団は逃げる途中、下着に至るまで身ぐるみ剥がされ、じゃが芋を入れるマータイ（麻袋）に頭と腕を通す穴をあけて被っていた。この異様な集団を見た時、子ども心に開拓団の悲惨な運命を知ったのである。

開拓団避難民のために、私たちの通っていた小学校も収容所として接収された。しかし学校の窓ガラスは全部持ち去られ、冬の雪をしのぐのはムシロしかなかった。やっと奉天まで辿り着いても、食べる物は満足になく、着る物もない。チフスに罹り、厳しい寒さの中で次々と凍死していった。コチコチに凍った死体が毎日、丸太のように荷馬車にうず高く積まれ、郊外の荒地に運ばれて行った。日によって死体を積んだ荷馬車が３台も４台も続くことがあった。

私たちはこの死体運搬の荷馬車を、いつしか　「お召し列車」　と呼ぶようになった。真冬は凍土となる。凍てついた土はツルハシでも掘り返すことが出来ない。大人たちの話では穴に埋められず、野積みとなった死体は野犬が喰いちぎって行ったという。人間の尊

厳すらない無惨な情景である。

何ヵ月も風呂に入っていない避難民の人たちは、頭も体もシラミだらけだった。人が死ぬとシラミは冷えた死体から逃げ出し、新しい血と体温を求めて生きている人の体に移動する。シラミの大群がアンペラの上を移動する時、サワサワサワと音がする。シラミの這うその不気味な音で、人の死んだことがわかる。真夜中、暗がりの中でその音を聞くと身の毛のよだつ思いがしたと体験者は語った。

慰安婦は私の家から出て行った

避難民収容所にはお金を持った中国人が　「コドモ売リナサイ」と何人も来るようになった。「自分はいつか死ぬ。せめてこの子だけでも生きていて欲しい」とわが子を手放す親もいた。

あれは確か雪の降り積もる真冬のことであった。母から「しばらく外で遊んでいらっしゃい」と言われた。この寒い日にと不審に思ったが、外に出てソリで遊んだ。

それから二、三日たって、母が近所の奥さんたちに「お風呂から上がって着物を着たら、それはそれは美しい方でした。玄関からお送りする時、私は思わず涙がこぼれました」と言うのを聞いた。それが何を意味するのか、１０歳の子どもには分からなかった。

真っ黒に汚れたシラミだらけの体を洗い、美しく化粧をほどこし、母の着物を身にまとった開拓団の女性が、屈辱に歯を食いしばり、生き延びるためにソ連軍の「慰安婦」となって行ったことが理解できたのは、大人になってからであった。

私たち日本人は敗戦翌年の夏、リュックサック一つに衣類を詰めてコロ島から船に乗った。現金は一人千円。残りの家財は全て満州に置いて来た。母は疫痢に罹り死ぬ寸前だった。父は「水葬」を覚悟したが奇跡的に回復。郷里・鹿児島に辿り着いた。しかし実家は最後の空襲で焼け落ち、跡形もなかった。両親は呆然と立ち尽くしていた。焼夷弾でやられた祖父からの手紙は敗戦直前のドサクサにまぎれ、満州にまでは届かなかったのだ。

無辜の民の悲劇を小説と舞台に

やっと祖父の疎開先がわかり、親子孫三代、無事に再会を果たすことが出来た。当時はどこもそうだったが、食料難でカボチャの茎やサツマ芋のツルまで食べた。インフレでたちまち金もなくなり、貧乏のどん底に陥った私は靴を買う金もなく、小学校には裸足で通った。

朝鮮戦争を奇禍として日本の景気は回復、大学に進むことが出来た。高校生の頃、当時「パンパン」と言われていた女性のことを批判したことがあった。その時、母から「生きるためにそうせざるを得ない人もいるのです」とたしなめられた。私はハッとした。突然、奉天で我が家から母の着物を着て出て行った開拓団避難民のことが頭をよぎった。「そうか、そうだったのか」

大学２年になった時、小学校４年、１０歳の時にこの目で見て来た日本人開拓団の悲劇を小説にした。屈辱に耐えかね青酸カリを呑んで自殺する慰安婦とその夫、孤児として残される６歳の少女を主人公にした。雑誌「文学界」や「毎日新聞」などでも好意的に紹介され、卒業式の日、４年間で発表された小説ではただ一つ大学の記念文学賞を受賞した。

以後、文筆生活とは全く縁のないビジネスマン生活を送っていたが、敗戦から５０年目の１９９５年、昭和１０年生まれの私は戦後５０年と６０歳の還暦が同じとなった。この記念すべき節目に何か残して置きたいと、創立したばかりの自分の劇団のために大学時代に書いた小説を演劇にした。小説では戦後の満州で終わっていたが、舞台では孤児となった６歳の少女が自分を満州人に渡した父を日本で探し求める戦後５０年にわたる数奇で過酷な運命を書き加えた。

劇団には「満州」という国の存在すら知らない小中学生から戦後を生き抜いた８８歳まで４０人の団員がいる。子どもたちのために満州建国と開拓団の歴史を教えた。上演の日、慰安婦役となった女性も、孤児になる役の小学生も、舞台の上で本当に涙を流しながら演じてくれた。観客も泣いた。歴史を教える学校の先生からも「満州の悲劇を初めて知った」とのお手紙を頂いた。

この作品は文化庁後援のアマチュア演劇祭で　「最優秀グランプリ」と　「最優秀脚本賞」を受賞した。劇団ではこれまで喜劇、ミュージカル、環境問題をテーマにした劇など３７回の公演を行っているが、この満州の悲劇を描いた劇は地元の我孫子だけでなく、東京、横浜などで１７回上演した。重い劇だが、開拓団員のほぼ三分の一が望郷の念むなしく異国の地で果てて行った悲しみを少しでも多くの人に知って貰いたいと願っている。戦争の犠牲になるのは銃を持たない無辜の民であることも。

既に亡くなった両親は時に満州の想い出を語ることはあったが、私の家から出て行った女性のことは終生語ることはなかった。芝居も観客の入りは心配してくれたが、一度も息子の演ずる舞台を観ることはなかった。生身で演じられる舞台を観ることに耐えられなかったのだろうと思う。両親は引き揚げてから死ぬまで、満州を訪問することはなかった。

私もまだ、一度も満州に　“帰った”　ことがない。

＜いいむれかずおみ、会社経営などを行った後、92 年地元の我孫子市で市民劇団「あびこ舞台」を立ち上げ、小学生から 88 歳までの市民が出演し、旧満州の悲劇を伝える演劇活動を展開している＞

＊次頁、見開きにその時の記事などを参考資料として掲載した

柏市民新聞 2008年8月8日（金）付

あびこ舞台が「声なき氷像」

戦争の悲劇を劇化　10日アミュゼ柏

市民団員が「声なき氷像」を熱演

「戦争により一番被害を受けるのは民なのです」―。市民劇団「あびこ舞台」（飯牟礼一臣代表）は10日、旧満州にいた日本人開拓団の悲劇を描いた「声なき氷像」をアミュゼ柏で公演する。終戦記念の特別公演で、飯牟礼代表は「公演を通し戦争の悲惨さを考えるきっかけになれば」と話している。

敗戦により、ソ連軍と現地人から攻撃を受け、命からがら旧満州から逃げてきた日本人開拓団。

祖国への帰国を願いながらも、飢えと極寒により次々と死んでいった。

舞台は、その日本人開拓団にいた6歳の少女を主人公に、戦争に翻弄された彼女の悲惨な運命を描いている。母親はソ連軍の慰安婦として徴用され、父親と非難民収容所に辿り着いたものの餓死寸前となり「生きていて欲しい」と中国人に身売りされた少女。その後、孤児となった少女は60年の歳月をかけて父親を捜し続ける悲しい物語だ。

飯牟礼代表が、幼少期の実体験をもとに描いた小説「アンペラの上の氷像たち」を舞台化。これまで17回上演し、文化庁後援の手賀沼演劇祭で「最優秀グランプリ」を受賞。文芸社ビジュアルアート「星の戯曲賞」では全国の中からベスト3に選ばれた。

出演者も小学生から88歳までと幅広く、プロの演出家の指導を受け、迫真の演技で聴衆の涙を誘う。スタッフ含め40人体制で臨む。

入場料2千円（前売り1500円）。午後2時、5時の2回上演。前売り券は、かしわインフォメーションセンターで販売している。

小学生から高齢者まで40人が力演

朝日新聞2008年8月14日（木）付、東京本社版千葉地区に掲載

「満州」と向き合い続ける

明日へ 63年目に聞く ①

残留孤児支援する元開拓総局官吏

大迫 勝弘さん 88歳

取材者 永井啓子 41歳

習志野市の大迫勝弘さん(88)は月2回ほど、千葉市の県中国帰国者自立研修センターに出向く。中国残留孤児の帰国後の生活を支援する同センターで20年近く、相談などに携わってきた。

「新聞で孤児問題を知り、何か手助けをしたいと、県庁へ行った。もし私が満州（中国東北部）で、開拓団にかかわる仕事をしていなければ、無関心だったでしょう」

8月初め、センターを訪ねると、大迫さんは、こう言って少し遠い目をした。

□ □

鹿児島出身の大迫さんは1939年、「満州国官吏採用試験」に合格し、中国大陸に渡った。19歳だった。日露戦争で果敢な働きをした斥候隊を描いた山中峯太郎の冒険小説「敵中横断三百里」を読み、大陸にあこがれた。

「満州国」の首都、新京（現・長春）の開拓総局で、日本からの移民を入植地に振り分ける仕事をした。夜は外国語学校で中国語を学んだ。

43年には4カ月間、関東軍の部隊に教育招集され、旧ソ連の通信を傍受する任務に就いた。日本軍の敗北が次々と伝わる。上官に報告すると「貴様の耳はどこについている」と殴られた。この年の2月、日本軍はガダルカナル島から撤退、5月にはアッツ島守備隊が全滅。戦局は悪化の一途をたどっていた。

45年8月。旧ソ連軍が侵攻すると、軍上層部のトラックが、家財を満載して大通りを走り去った。大迫さんは新京駅から、屋根のない石炭車で安東（現・丹東）へ向かった。雨が降り続き、一緒に乗った女性が連れていた赤ん坊は途中で息絶えた。

やがて大迫さんは、抗日戦から国民党軍との内戦に突入した八路軍（中国共産党軍）に加わった。協力すれば日本に早く帰れると誘われた。

後方部隊で物資の調達などにあたった。日本人の逃亡を助けたと疑われて拷問を受け、右手の中指を折られた。今も指は変形したままだ。

中国人の友人から、このままでは銃殺されると知らされ、47年秋、大迫さんは脱走した。逃げる途中、川に転落。近くの村人に捕らえられ、暴行を受けた。

ここまで生き延びたのに。何とか日本に帰りたい――。その願いは、予期せぬ巡り合わせで、かなえられた。

村長の息子が、かつて鹿児島に留学し、大迫さんの姉夫婦の世話になったことが分かった。傷が治るまで介抱された。大連にたどりつき、47年末、引き揚げ船に乗った。

佐世保で船から下りた際、中国語をしゃべったため、スパイ容疑をかけられ、連合国軍総司令部（GHQ）の取り調べを受けた。誤解が解けて釈放され、福岡にあったGHQの民間検閲局で働いた。個人の郵便物を読み、占領政策への批判や共産主義的な考えが書いてあれば英語に翻訳する。「生活のために、本心ではやりたくなかった。当たり障りのない文章を創作して報告した」

その後上京し、ハーモニカの腕を買われて楽団に所属。50歳から18年間は、横浜中華学院で現代国語を教えた。

□ □

今月10日、大迫さんは、柏市内でアマチュア劇団の舞台に立った。

敗戦で取り残された開拓団を描いた作品。大迫さんはハーモニカを吹き、人々を励ます老団員役。チフスにかかり死ぬ間際、「おおっ、タンポポがある。柿の木も」。もうろうとしながら、日本の故郷の風景を恋しがる。

「私は恵まれた方だった。もっと大変な思いをした人が大勢いる」「満州の人たちに苦労をかけてしまった。当時は国益のためと信じていた。新聞もそうあおっていた。今考えると二度としてはいけないこと」

六十数年たった今なお、「満州」と向き合い続ける大迫さん。戦争にほんろうされながら、国を超えた人と人との縁によって運命をひらき、生き抜いた、その気骨を感じた。

◇

戦後63年の夏。戦争の記憶が遠ざかる今、あの時代を生きた人々を訪ね、明日への伝言を聞きました。

上 旧満州の日本人開拓団の悲劇を伝える劇に、大迫勝弘さんは3年前から出演している＝9日、柏市内のリハーサル会場

下 中国の地図を指し示し、旧満州での体験を語る大迫さん＝千葉市の県中国帰国者自立研修センター

満州国　1932年、満州事変で中国東北部を占領した日本が、清朝最後の皇帝だった溥儀を執政（後に皇帝）として「建国」した。実態は、関東軍と日本人官僚が実権を握る「傀儡（かいらい）国家」だった。45年、日本の敗戦で崩壊した。「満蒙は日本の生命線」とする国策により、日本の農村部などから、開拓団や青少年義勇軍が送り込まれた。敗戦時、開拓団を含む在留邦人は約155万人で、引き揚げの際、20万人以上が死亡したとされる。大戦末期の旧ソ連軍の侵攻と関東軍の撤兵で、開拓団の女性や子どもたちが置き去りにされ、多くの中国残留孤児が生まれた。

方正に集結した開拓団
—長野・小県郷開拓団と大羅勒窖九州村開拓団の記録—

高　橋　健　男

2008 年度「方正友好交流の会」総会にて年度の活動のひとつとして「敗戦時、各地のさまざまな開拓団から方正へ逃れた人たちの状況を、可能なところまで整理する」ことが示された。

私は総会の 1 ヵ月後に『満州開拓民悲史』（批評社）を公刊したが、その中で「方正へハルビンへ」「方正にたどりついた開拓団」「土塊の中の白骨と中国唯一の『日本人公墓』」の章立てをし、方正に集結・越冬したいくつかの開拓団のことと中日友好園林のことを詳述した。

方正に集結した開拓団については奥村正雄さんが『天を恨み地を呪いました』で主だった 18 開拓団について数値と共に記す。また、全国拓友協議会の『満洲開拓史』は方正地区流入難民 24 開拓団 3,965 名の数値を表組みで示す。さらに方正街飛行場に集結した総人数を三江省 33 団、8,640 名とも文章中で示す。

各種記録から方正に集結した開拓団のすべてを明らかにすることは簡単なことではない。しかし、ものの取り掛かりとしては三江省各県にあった開拓団の動向をまず調べてみることであろう。

ここでは偶然に発見あるいは知り得た二開拓団の記録を紹介したい。

1　長野県送出第11次小県郷開拓団

第 11 次李花小県郷（ちいさがたごう）開拓団は長野県上田地方出身者で編成された開拓団である。終戦時は 93 戸、385 名の開拓団であった。昭和 16 年 4 月先遣隊入植、その後本隊が入植したが、補充団員の送出は困難を極め、縁故者、他郡また他開拓団や義勇隊からの移行者を募ったが、最終的には当初計画の 3 分の 1 にも及ばなかった開拓団である。

入植地は旧浜江省延寿県李花屯、浜綏線珠河駅から北北東約 50 キロに延寿街があるが、そこからさらに北東 40 キロの奥地で、方正県境まで約 20 キロであった。

『満洲開拓史』によればこの地には中和鎮信濃村、李花小県（第二小県を含む）、宝興長野の開拓団が入植していたという。そして李花小県開拓団の終戦後の動きについて次のように記録する（下線は筆者）。

> 20 年 8 月 29 日、約 250 名が出発し、中和鎮に着いて武装解除を受けた後、ソ連軍の指揮で 9 月 1 日方正に向かい、9 月 3 日方正着。12 月 31 日まで滞在した。7 歳以下の子供、50 歳以上の老人はほとんど死亡した。
>
> 21 年 1 月 1 日方正発、2 日嘉信村着、同地にて越冬。
>
> 8 月延寿、珠河経由同月 31 日ハルビンに着いたが、一行は僅かに 47 名であっ

た。この間に死亡 198 名、行方不明 6 名を出している。なお、趙炮屯部落全員 59 名は、20 年 8 月 29 日自決している。

これによれば小県郷開拓団は方正で越冬して昭和 21 年春を迎えたわけではないことがわかる。方正ではこのように、一時滞在しあるいは通過した開拓団がまだまだたくさんあることが推測される。

小県郷開拓団家族（子供）であった倉島康さん（現在新潟市在住）が、方正に関連して避難等の詳細を手紙で知らせてくれた。避難行は山中の逃避行中ソ連兵の暴力・掠奪に遭ったり、暴徒の襲撃を受けて 80 名あまりの集団自決者を出したりで悲劇の連続だったが、昭和 20 年初冬に方正に到着し、関東軍旧官舎の収容所に収容されたという。そこでの様子を倉島さんは次のように書いて寄せる。

> 方正ではあちこちの引揚難民で 6 千名くらい収容と聞いていました。初めは兵隊さんたちのために貯えてあった大豆や麦などを主食としていたのですが、そのうち牛馬の飼料だった高粱になり、食糧事情は極端に悪化、栄養失調から流行性感冒や腸チフスが大流行し、バタバタと倒れていく人で毎日亡くなる人が数十人となり、凍土と化す前に大きな穴を掘り、墓標としていたものを最後には焚き木となるような悲しい現実にみな泣きました。
>
> 死の葬列が当たり前の毎日の光景に何も感じないような虚無的な刻が流れて、互いに「明日はわが身」と心震わせることも。4 千名に近い難民があの方正の地で果てたのでした。

昭和 21 年元旦に方正の収容所を出た小県郷開拓団避難民は、「道端に倒れ命は果てる人、足を引きずり倒れてしまう人に優しい手をさしのべることもままならず、自分だけが頼りの、まるで死の行軍にも似た」行軍を再度経験した。そんな中、「途中の朝鮮人部落の人たちがお米のおにぎりを分けてくださったり暖かいスープを恵んでくださったりで、今の朝鮮との問題からは想像もつかないほどの温情は、今も決して忘れておりません」ということもあった。

たどり着いた地で大人はクーリーとして働いて過ごし、珠河の駅に出、ハルビンの駅までたどりついたとき「懐かしくもあり、いよいよ内地に近づいてきたという喜びで一杯」となったそうだ。ハルビンでは東本願寺別院で過ごし、引揚げは昭和 21 年 10 月末だった。

『満洲開拓史』では小県郷開拓団の被害について「団長 21.5.4 延寿県死亡」と記載し、「在籍者 365 名（うち 51 名応召）、死亡者 170 名、未帰還者 48 名、帰還者 147 名」と記録している。

李花小県開拓団慰霊碑が上田市別所温泉安楽寺境内にある。安楽寺は山裾に建つ。その本堂裏の一番奥まった少しの高台に国宝・八角三重塔があるが、慰霊碑はそこに上る階段脇に立つ。日本敗戦後の開拓団について慰霊碑には次のようにある。

（前略）昭和 20 年 8 月 15 日敗戦。異国に於いてたのむ人と物を同時に失った在満邦人の悲惨はその極に達し、行く宛てもなく大陸をさまよい、酷寒と飢え、病魔に斃れし者、又一部落全員自決により命を断ちし者、或は戦争に駆りたてられ其のまま帰らざる者、其の数 200 名余、辛うじて帰国した者 150 名。（後略）

2 九州各県送出第8次大羅勒蜜九州村開拓団

大羅勒蜜（タラロミ）九州村開拓団は先発隊が昭和 14 年 3 月に渡満、本隊の入植が 15 年 4 月、補充員を翌年に迎えている。編成は九州各県からの混成団で、長崎、熊本からは少数、ほかに北海道、福島から若干名が加わった。入植地は旧三江省方正県大羅勒蜜で、珠河駅北方約 72 キロの地点であった。

新潟県庁に「開拓団実態調査表」調整簿の保管があり、大羅勒蜜九州村開拓団のものは他県から送付された文書類の綴りの中にあった。付近開拓団として第 9 次伊漢通開拓団（鹿児島・沖縄混成）と第 13 次大羅勒蜜竜郷開拓団（鹿児島県）の記載があり、竜郷村開拓団は九州村開拓団の本部ならびに団内の日の出部落を貸与し、同居していた開拓団であったとの説明がある。九州村開拓団は本部を含め 11 部落構成で、戸数 113 戸、人員 422 名であった。

終戦時における移動状況が次のように詳しく記載されている（下線は筆者）。

昭和 20 年 8 月 13 日、本開拓団員は避難命令に依り本部に集合の上、全員小羅勒蜜に向かう。

8 月 16 日朝、壮健なる男子約 30 名は徒歩にて小大羅勒蜜出発、ドモリ部落（満人部落）を通過し、17 日スソノ部落到着。同地にて一泊。歩兵 356 軍の者と合流。18 日、方正に到着。19 日、伊漢通に至り婦女子と合流。

8 月 16 日、小大羅勒蜜より老幼婦女子約 530 名（第 13 次竜郷開拓団を含む）は船を利用し、松花江より伊漢通に向かう。19 日、伊漢通に上陸。

伊漢通にて男子組と合流（人員約 560 名）し、伊漢通開拓団本部に向かう。20 日、同地にて宿営、軍人と共に武装解除を受く。この間に於いては損害なし。

8 月 23 日、方正飛行場に集結。

8 月 25 日、方正飛行場にて団員の男子約 250 名は家族と分離せしめられ、軍司令部跡（134 師団）に連行せしめられ、労役に使用せしめらる。

其の他の者は長野開拓団に向かう途中、約 40 名が別行動となり臨江に行く。婦女子組は 26 日、延寿県開拓団に至る（途中数名死亡）。

28 日、老人男子 20 余名ソ軍に拉致され、司令部跡に行き、前記男子組と合流して労役に服す。

9 月 14 日、長野開拓団残留の婦女子は再び方正に向かい、同地にて興農合作社に宿泊（3 名死亡）。

引揚げまでの行動はまだまだ続くが、方正の地に関係しないのでその後の記述は省略する。小集団で散り散りになって越冬したらしく、たとえば昭和21年9月26日、引揚げへの行動として「何某ほか78名は大羅勒蜜より方正に至り、竜郷村開拓団員2名加わり、80名となり、9月30日、延寿県部落に一泊。昭和21年10月、珠河駅より汽車にてハルビンに至る」と説明する。

<「開拓団実態調査表」とは>

「開拓団実態調査表」とは、戦後引揚げた各開拓団関係者が規定の用紙で各県に提出した当該開拓団の概略を報告した文書である。戦後、国や各県民生部援護課が満州開拓団および青年義勇隊の団または隊ごとの基礎資料を作成して以後の調査の根拠資料とするため、別に報告させた「開拓団名簿」等から幹部等の好資料保有者と思われる者を招致または訪問調査して作成、あるいは提出させたものである。

作成・提出は昭和25、26年ころと推定される。新潟県の場合、提出文書綴りが県援護恩給室に保管されており、各「実態調査表」に提出・受付年月日が記載されている文書が少ないが、いくつかの文書には日付がある。中には昭和32年に提出されたものもあるが、昭和20年代後半にまとめ作業が行われたと推定できる。

戦後の復員および引揚業務や援護事務が正確に行われるためには当然、援護対象者の名簿や各種状況の掌握が必要である。軍人・軍属については生存者、死没者、兵役免除者、退役将校等の履歴書類が作成された。「復員・引揚者連名簿」は、陸軍外地、陸軍内地、海軍そして一般邦人別に作成された。満州開拓団関係では、それぞれの開拓団について氏名、年齢、居住地、引揚・死亡年月日、死亡者についてはその死亡場所、同事由等が記された名簿が作成された。青年義勇隊についても同様であった。

「開拓団実態調査表」はこれらの作業の一環として作成され、以下の項目について記録されている。この項目は事前に印刷されたもので、用紙は二枚組みである。項目を順に列挙すると次のとおりである。

開拓団の次別正式名称／入植年月日／団の送出または構成都道府県名／団の所在地／付近にある開拓団の名称および場所／終戦直前（移動開始前）の在籍者数および内訳／団の構成および終戦時の人員／団の役員／開戦時の状況／終戦後の移動状況／既引揚者数／未引揚者数／当時の状況に詳しい人の氏名および住所

この文書は各県各開拓団について作成され、今現在は各県庁援護恩給室に保管されているか文書館等に移管されて保管されていると思われる。

方正に集結した開拓団の内実を詳しく掌握するためには各県に保管されている「開拓団実態調査表」が入手できれば完全に近いものになると思われる。ただ、それは言うに易しく行うに難しで、まずは公刊されている書籍やそこに記載されている各種記録などを確認していくことになろう。

<たかはしたけお、本会会員>

藤原長作さんの記念碑。藤原さんの遺骨がここに分骨されて
葬られている。記念碑の天辺は稲穂のデザインになっている。

方正公墓の墓石をハルピンから方正県に運搬して陸揚げした船着場

撫順戦犯管理所の一隅を見る

収容されていた頃の愛親覚羅溥傑さんの写真　＜撮影：大類＞

知られざる日中関係

岩嵜 弘三

（社）日中科学技術文化センターと方正友好交流の会による時宜を得た企画のお蔭で、中国黒龍江省のハルピン東方約１８０Kmにあり、道路標識まで日本ソックリの高速道路で結ばれた方正県にある「日本人公墓」を、７月に訪れた。「百万戸計画」の国策で満州に移住された開拓民は敗戦で悲惨な境遇に追いやられたことは、よく知られている。その内、約五千人が、零下４０度、飢え、栄養失調、発疹チフスなどで、方正で亡くなられた。それから数年たち、累々たる白骨の山を見た残留婦人が埋葬したいとの願いを政府に出した。

まだ日本の侵略への恨みが消えていない１９６３年ではあったが、当時の周恩来首相の理解により、この公墓が建立された。この一角には、生き残った孤児が建立した「中国養父母の墓」と、高粱が主食であった寒冷の地に、人は無理と言ったにも関わらず、寒冷地に向いた稲を作り出し、黒龍江省を米作中国一にしたとして中国では非常に尊敬されている藤原長作氏の墓もあった。その後に乗車したハルピンから瀋陽（旧奉天）までの新幹線の車窓からも、どこまでも続く稲作が見えた。

各種の毒ガスや細菌戦の研究や実戦での使用を行った７３１部隊の施設跡を、ハルピン郊外で見学した。実験機材と丸太と称された実験用人間を３０００人連れ込むために、鉄道線路まで引き込んだ広大な用地において、大きな組織で広く系統的に研究が行われていた状況が写真や資料で説明されていた。中国の数十ヶ所で実際に爆弾を投下して効果を確認したにも関わらず、米軍に資料を引き渡すことを条件に極東裁判で訴追しない約束があったので、米軍は朝鮮戦争で実験を行った。その投下され回収された爆弾が展示されていた。

ハルビン市内は、滞在３日目に、オリンピックの聖火リレーが走るので、繁華街は花や旗で華やかに飾られ、人々も豊かで幸せな表情で生き生きとして、発展中の中国を羨ましく思わせた。ハルビンから瀋陽（旧奉天）までは、日本の新幹線と外観や車内がほぼ同じのフランス Alston 社製の車両で移動したが、車内に表示される速度は、最高１８８kmであった。

瀋陽からバスで撫順戦犯管理所を訪問した。終戦後、多くの旧日本兵はシベリアへ移送されたが、中国で犯罪を犯した将官３５名を含む９８２名が中国側に引き渡され、撫順戦犯管理所に収容された。焼き払った家屋４．４万戸、略奪した食糧３７０万トン、殺害した人員８５．７万人など、平和な時には考えられない規模であった。しかし、中国側は、日本人であるからと主食を高粱でなく貴重な米で提供し、医療、娯楽など充実した内容で厚遇した。刑の軽い人から帰国を認め、１９５４年には全ての戦犯に特赦を宣言して１人の刑死者も出さずに全員帰国させた。旧満州国の溥儀皇帝も同じ建物の中に収容され、彼の弟である溥傑が設計したという瓢箪池や橋のある小庭園も当時の状況のままに保存されている。ここに収容された日本人は、思いも掛けない厚遇に感謝し、自分の過去を反省し

て、帰国後「中国帰還者連絡会」を組織して「平和と日中友好に貢献する」をモットーとして、日中友好促進の事業を展開してきた。家族を伴って再訪したり、構内に記念碑を建てたりしている。

その後、「平頂山事件」の記念館を訪れた。１９３２年９月に、撫順炭鉱の破壊行為を行ったグループが逃げ込み、それを匿ったとの嫌疑から、炭鉱に隣接する平頂山村落民を「集合写真を撮ってあげる」と偽って丘の上に誘導して、カメラに似せて黒いカバーを掛けた軽機関銃で村民を虐殺した記念館である。多数の発掘した人体や身に付けていた衣類などを、現状のまま屋根で覆って展示している。殺害された人数は諸説があり、中国側では発掘をもとに約３０００人と言っている。

続いて瀋陽市内にある「９・１８事変博物館」を見学した。１９３１年９月１８日に、関東軍がこの地の柳条湖で列車を爆破して、それを張学良派の陰謀として満州事変を引き起こしたことを記録に残すための、１９９９年に建設された大規模な博物館であった。江沢民主席が大書したスローガン「勿忘９・１８」が壁面を飾り、入館すれば『我々は国辱として未来永劫忘れない事を誓う』と大きく書かれていて、驚きを禁じ得なかった。大きな館内の展示も、日本軍の残虐ぶりを、多数の写真、当時の新聞、関連する証拠品を並べて展示していた。日本人には不愉快ではあるが、人間を殺すことを職業とした軍隊というものの狂気振りを嫌というほど見せつけられた。毎年９月１８日は、これに関するデモなども行われ、日本領事館からは、外出しないようにとの勧告も行なっている。時として、いまも中国で反日デモが発生する原因も理解できた。

このような記念碑は、辻正信参謀の命令で、シンガポールの華僑 5 千人（日本側の推定であり、現地側は4－５万人と推定）を殺害したことを追悼する背の高い「血債の塔」がシンガポールの海岸の景勝地にあることや、真珠湾に撃沈されたアリゾナ号が艦と運命を共にした多くの将兵とともに記念として展示されていることを考えると例外ではなく、逆に、日本の広島や長崎の記念碑は日本人的な例外的な意思表示ではないだろうか。日中の要人の会談では、必ず「両国は一衣帯水の隣国で、２０００年に亘り深い関係を持ち云々」といかにも素晴らしい関係があったような挨拶で始まりる。しかし、現実には恒久的な反日記念碑の存在に対応していかねばならぬ問題であることを忘れてはならないと思う。日本も明治生まれの先輩方はスケールも大きく立派な方々ばかりであった。中国も建国当時の人々の偉大さに比べて、時代と共に指導者の人柄が変わることを痛感しました。

「参考」井出孫六：中国残留邦人 - 置き去られて六十余年（岩波新書）

追記：中国の最近の住宅は、上海の漁村が一大開発エリアに変えられた浦東地区の見渡す限りの高層住宅に代表されるように、どの都市でも高層住宅が整然と建築されて行くのに割目させられ、国民に適切な住宅を提供することを重要な責務と考える社会主義の良さを印象付けられる。北朝鮮の首都ピョンヤンでも大通り沿いに整然と建てられた高層アパート群が最も印象に残る光景で、中国との類似性を感じる。英国の Financial Times によれば、太陽電池の設置量では、２００６年時点でドイツが世界の５５％を占め、２位の日本は１

５％に過ぎず、次いで米国、スペインと続くが、２００７年の太陽電池の生産高では中国が世界第一であり、これに日本、ドイツと続きます。中国の新築の高層住宅の屋上には建築時から太陽電池のパネルが取り付けられている。

また、７３１部隊の旧跡を訪ねる道筋では、先ず、いかにも快適に見える大規模な新しい高層住宅群が続き、それを過ぎると、米国のシリコンバレーのように、広い緑の中に、一向に工場らしくない多様な感じの良い建物が続く。生活と通勤に便利な所に従業員用の住宅を造る社会主義に感銘を受けた。何事においても一人でも反対があれば何もしない日本が世界から取り残されていくことも残念だ。最近の中国の労働集約型の工場は、カンボジア、ベトナムなどの一層開発の遅れている国々へ移動していて、本国では技術力の高い産業へと移行しているとの記事やニュースを見るにつけ、日本の産業が未だに中国や韓国で生産されるものと一心に競争していて、先進国のみ可能な分野への移行が進まないのを危惧するのだ。

＜いわそこうぞう、ＢＮＮテレコム支援協議会（ＮＧＯ）理事＞

731 部隊罪証陳列館前景（撮影：大類）

友好の原点を歩く旅に参加して

石橋 実

平成１７年７月７日の夕刊読売で方正の日本人公墓の記事を読み、中国政府のとった人道的な行為に心をうたれました。そして、少年の頃「満洲国に関東軍」「大陸浪人」「特急亜細亜号」「満蒙開拓団」「大陸の花嫁」など通り一ぺんの知識として頭に入れ、戦後は「舞鶴港の引揚船」「残留孤児調査」「残留婦人」などを、新聞記事やテレビニュースで頭に入れていたにすぎなかった私の頭を、旧満洲国でどんなことがあったのかに向けさせました。

その最初の行動として「方正友好交流の会」に入会させてもらい、会報や会発行の公墓や残留孤児などについての図書を読みました。そして満蒙開拓団の悲劇を知り、是非方正の公墓にお参りしたいと思うようになりました。

今回「友好の原点を歩く旅」の案内をいただき、早速参加を申し込みました。友人の鵜澤弘さんに旅の話をしたところ、同行してくれることになり心強くなりました。また、同行者の中に私が読んだ夕刊読売の記事を書かれたという方がおられたことに何か縁のようなものを感じました。

方正県への約２００キロの高速道路の左右は、地平線まで広がるトウモロコシ畑が方正の近くまで続き、あらためて中国の広さを実感しました。

方正県政府への表敬訪問を終えて車で革命烈士陵に参拝し、しばらく走って「中日友好園林」に到着。園内に入り「中日友好園林簡介」や「和平友好」などの記念碑を、「写真で見たこれが実物か」と確かめながら見ました。

公墓の敷地内に入り、写真で何回も見ている「方正地区日本人公墓」の前に立ち、「ああ、やっときたのだ」と感無量になりました。同行の僧侶でいらっしゃる野田尚道さんによる供養のための読経があり、参加者全員が一人ずつ焼香しましたが、私は自分で持っていた線香を上げさせていただきました。「麻山地区日本人公墓」にも上げさせていただきましたが、どちらも火災予防ということで何分もたたぬうちに消さねばならなかったのが心残りでした。お香や線香が燃え終わるまでそのまま上げておける設備があればいいと思いました。

墓参を終え２台の車に分乗して出発。私の乗った１号車はしばらく走って停車、２号車を大分長く待っていました。２号車はその間、「伊漢通開拓団跡」を見学してきたとのことで、１号車は時間がないということで２号車とともに船着場に向かってしまいました。写真で見た開拓団跡の古い家を見たいと思っていたので、残念でした。

船着場では松花江の広さを実感し、対岸を眺めながら敗戦後難民となってさまよった開拓団の人々のことを書いた本の文章を思い浮かべました。

７３１部隊罪証陳列館、９．１８事変博物館、張作霖師府博物館、撫順戦犯管理所、平頂山惨案遺祉記念博物館等の参観では、あらためて日本軍のやった悪業、戦争の悲惨さを強く感じさせられました。

今回の旅に参加して、本当によかったと思いました。団長さんはじめ運営してくださった方々、同行の皆さんありがとうございました。

<いしばしみのる、本会会員>

確認できた侵略の事実　　鵜澤　弘

戦後65年を迎えた今日、戦争を知らない世代が多くなり、また記憶も風化しつつあります。しかし、今回の「友好の原点を歩く旅」に参加させて頂き、日本帝国主義の生々しい侵略の事実を確認することができました。方正県を表敬訪問したあと、日本人公墓をお参りしました。残留婦人の皆さんの働きかけにより1963年未だ国交回復のない時期にもかかわらず、方正県人民政府により「日本人入植者も、中国人と同じ軍国主義の犠牲者だ」として、遺骨を集めて埋葬し墓石を建てて頂いたとのことです。中国側が敵方だった日本人のために建てた墓はここにしかありません。今回、新潟県村上市からご参加の曹洞宗住職野田尚道さんに読経して頂きました。そのあと７３１部隊罪証陳列館、９・１８事変博物館、平頂山惨案遺址祈念館を参観しました。撫順戦犯管理所は、1936年に日本が建てた監獄で、中国人を監禁していたものでしたが、1950年撫順戦犯管理所として、日本人等の戦犯１,３００人を収容し、 戦争犯罪を反省し、人間性を取り戻す教育が行われ、やがて中国の友人となり、1964年までに全員釈放され、帰国したとのことです。

明治維新からの対外侵略計画

日本帝国主義の中国への侵略は、1931年９月１８日の関東軍による、柳条湖の鉄道爆破により始められた満州事変前に言及しなければなりません。日本と中国は、２，０００年の交流の歴史がありますが、まず明治維新から対外侵略計画が始まったといえます。1894年の日清戦争により中国東北部への軍事行動を始めています。そして、1904年から1905年にかけての日露戦争の勝利により南部地区を勢力範囲としました。それを土台にして、満州事変に及んだと言えます。

満州国建国と農業移民計画の意図

さらに、1932年に満州国の建国を宣言して、中国への侵略・統治をして来ました。満州事変以降、日本政府は満州への農業移民計画を出して、日本の農村の再建と併せて、反満抗日勢力に対する治安対策に主眼を置いて決定したと言われます。最初、東北・信越・北陸地方より４２３名が入植しています。やがて満蒙開拓青少年義勇軍として５万８,000名、成人移民１６万７,０００名にもなりました。

しかし、1945年終戦間際になり、１８歳より４５歳までの男性は現地応召され、開拓団は婦女子と年輩男性だけになってしまいました。

民間人の現地土着を政府決定

1945年８月８日、ソ連が参戦を決定した折り、すでに政府機関や関東軍は日本本土に向けて出航していました。日本大本営は「満州全土放棄も可」として、民間人は「現地土着」「国籍変更も可」と決定して、帰国を認めませんでした。

このような事情も知らされず、開拓団家族は現地を離れ南下しましたが、ソ連軍の銃撃・略奪・強姦・虐殺さらに飢え・傷病・集団自決等の悲劇が続いたと言います。瑞穂開拓団の場合、総員１,０５６名のうち,集団自決４９５名、無事に哈爾濱まで 到着した人は僅かに７１名だけでした。 残りは行方不明とのことです。満州における軍の犠牲者も多く、終戦までに約６万人、終戦も知らされずソ連軍と交戦で約１８万人に及ぶと言います。また、ソ連シベリア強制収容所に連行された６０万人のうち約６万２,０００人が, 零下６０度の極寒のなかで、飢えと傷病で命を失ったそうです。シベリア抑留から解放されて帰国出来たのは1949年９月の５年ぶりでした。

家族ふたりの戦死・東京空襲

わたしは、終戦当時８歳で国民学校初等科３年生でした。学校からの帰道で６人位で歩いていましが、突然米軍の飛行機から機銃掃射に遭遇しました。驚いて、田圃の稲の中に飛び込んで隠れました。全員無事でした。弾丸は１５メートル位離れておりました。３月１０日の東京空襲のときは、夜空が赤く輝き翌日、燃え残りの紙類が沢山飛んで来ました。都心から７０キロか８０キロ離れた片田舎のことです。

家族では、叔父（当時28歳妻子あり）が中国で1943年で戦死、もう一人の叔父（当時24歳独身）も、1944年済州島沖で戦死しています。日本中が戦争には負けないと信じており、事実は 知らされておりませんでした。地図を見ると、日本本土のほか朝鮮半島・樺太の半分・台湾が赤く塗られておりました。満州は別の色だった思います。

中学校の歴史教科書と中国

さて、現在の中学校の社会科歴史教科書は、中国についてどのように述べているのでしょうか。 気になりましたので、友人の教員から拝借して見てみました。編集・発行者は、東京書籍で、現在千葉県の多くの学校で使われており、代表的なものです。まず、気がついた事は内容は別として、大きいA４版サイズでどの頁を開いても、写真やカットが豊富で３分の２位を占めており、文章は３分の１に過ぎません。

では、早速内容にはいります。全体で２２６頁のうち【第５章開国と近代日本の歩み】（46頁分）に〈ヨーロッパのアジア侵略〉としてアヘン戦争、〈近代的な国際関係〉日清修好条規について説明しています。〈日清・日露戦争と近代産業〉日清戦争・加速する中国侵略・三国干渉について２頁にわたって説明しています。つづいて日露戦争について、２頁にわたり次のように述べています。

日本の戦力は限界に達し、ロシアでも革命運動が起こるなど、両国とも戦争の継続が困難になりました。その結果、アメリカの仲介により、ポーツマス条約が結ばれ、ロシアは（1）韓国における日本の優越権を認め（2）旅順・大連の租借権、長春以南の鉄道利権を日本に譲り渡し（3）北緯５０度以南の樺太の割譲と（4）沿海州・カムチャッカ沿岸の日本の漁業権を認めました。（２頁）〈韓国と中国〉満鉄の設立、つづいて中華民国の建国について説明しています。（２頁）

【第６章二度の世界大戦と日本】（34頁分）〈アジアの民族運動〉中国の反帝国主義運動では、1915年、日本は中国に山東省のドイツ権益の継承、旅順・大連の租借期間の延長等を要求しその大部分を認めさせました。しかし、これは中国の主権を侵すものでした。その後、パリの講和会議において、山東省のドイツ権益を日本が引き継ぐことが、認められ、中国の反日感情は爆発しました。（１頁）〈世界恐慌と日本の中国侵略〉では、満州事変について（1頁）、次のように述べています。現地の軍部（関東軍）は1931年９月１８日、奉天郊外の柳条湖で満鉄の線路を爆発し、それを機に軍事行動を起こしました。満州の主要部を占領した関東軍は、1932年３月清朝最後の皇帝溥儀を元首とする満州国を建国させ、実質的に支配しました。〈日中全面戦争〉については（１頁）、日中戦争の勃発・泥沼化する戦争として、次のように述べています1937年７月７日、北京郊外の盧溝橋で起こった日中両国軍の武力衝突により、日中戦争が始まりました。戦火は華北から華中に拡大し、日本軍は同年末に首都南京を占領しました。その過程で、女性や子どもをふくむ中国人を大量に殺害しました。中国では国民党と共産党の内戦が続いていましたが、協力して日本に対抗しようとする共産党の呼びかけにより、1937年９月に提携が実現し、抗日民族統一戦線が結成されました。

〈第二次世界大戦とアジア〉.戦争の犠牲について 日本が侵略した東アジアや東南アジアでは、戦場で死んだり、労働にかりだされたりして女性や子どもをふくめて一般の人々にも、多くの犠牲を出しました。一方、日本に連れてこられて、意志に反して働かされた朝鮮人や中国人もおり、その労働条件は過酷で、賃金も低くきわめて厳しい生活をしいいるものでした、と述べています。

【第７章現代の日本と世界】（18頁分）〈二つの世界とアジア〉植民地の解放とアジアのなかで、日本の敗戦後、国民政府と共産党の内戦により、共産党が勝利して、1949年に中華人民共和国が成立しました。一方、国民政府は台湾にのがれました。〈国際社会と日本〉関係の途絶えていた中国とは1972年に日中共同声明を発表して国交を正常化しました。さらに1978年には、日中平和友好条約を結び、その後中国の経済発展が進むにつれて、関係を強化していき、交流を深めています、と述べています。

以上、中国との関係について、教科書にどう取り上げられているか、調べてみました。

その結果、細菌兵器や化学兵器の使用を禁止したジュネーブ議定書（1925年）に反して関東軍防疫給水部と称した満州７３１部隊については、まったく述べられていません。

また、ハワイへの移民ついて若干説明されていますが、満蒙開拓団あるいは青少年義友軍についてもまったく説明がありません。終戦後、満州開拓団特に婦女子あるいは年輩者が、無政府状態の中に放置されたこと、また６０万人もの旧日本軍がシベリアの強制収容所に連行されて、５年間も酷寒の中で強制労働させられ、多くの犠牲者を出した事実も取り上げられてはいません。

なお、昭和（1926年）以降の現代史については、高校入試にもあまり出題されていないという状況もあります。

市民劇場「声なき氷像」を見る

本年８月１０日、柏市に於いて市民劇場による公演「声なき氷像」を見る機会を得ました。1945年８月からの満州にいた日本人開拓団の話でした。ソ連軍と現地人の攻撃で敗走し、阿鼻叫喚のなか、 命からがら逃げて来た人々、飢えと寒さ、望郷の思いも空しく次々と倒れていく。丸太のようにコチコチに凍った遺体は野原に埋められたと言います。「声なき氷像」とは、この遺体を意味するそうです。「せめて、この子だけは生き延びてほしい」と願い、幼子を中国人に預けて去る人もいます。

主人公の６歳の少女・満子もその一人です。母親はソ連軍の慰安婦として徴用されますが、自ら命を断ってしまう。軍隊に現地応召された父親は、やっと避難民収容所にたどり着くが、餓死寸前のため満子を中国人に売らざるを得なかった。満子は中国人の家から逃げ出して、再び難民収容所で父親を探しますが、見つからない。やがて、満子はある日本人に救われて祖国の土を踏む。それから満子は成人して、米国人と結婚する。６０年を過ぎたある日、父親らしい情報を得て沖縄に渡る。生きていれば父親は９５歳である。

この物語は、原作者で自らの満州での体験により脚本・演出の飯牟礼一臣さんの作品です。この舞台には、小学生から８８歳の高齢者も加わっており、４０名余りのアマチュア劇団です。

現地を訪れた者にとって、開拓団の家族の悲惨な運命が、戦争によって無秩序になった満州であった事実として、身につまされました。なお、この演劇のなかで、難民収容所でハーモニカを吹いて励ます老人役の大迫勝弘さん（88歳）は、元新京（長春）の開拓総局に勤務していたとのことです。

７３１部隊元少年隊の話

本年８月１５日の朝日新聞に、７３１部隊の当時少年隊員であった千葉県匝瑳市の篠塚良雄さん（81歳）のインタビュー記事がありました。1939年、当時通っていた本納実業学校（茂原市）で説明会があり「入隊後、希望すれば哈爾濱の大学に入れる。隊員の多くは千葉県出身者だ」と聞いて、友人と県庁で行われた少年隊入隊試験を受けて、満州にわたりました。隊員は３０人位で、県内の芝山・多古・茂原の出身が多かった。篠塚さんは、軍医の助手として活動したという。石井軍医は秘密保持のため親戚や自身の地区出身者で固めていました。部隊は終戦間際に解散となりましたが、篠塚さんは逃げ遅れて撫順戦犯管理所に収容され、郷里に帰ったのは、1956年だった、言います。その後、県庁に勤務して1984年退職して以来、７３１部隊について証言活動をしております。関係者とわかっていても、なかなか語らない人がいるなかで、勇気のいることです。

わたしは、「友好の原点を歩く５日間の旅」に参加させて頂いただけですが、今後あらゆる機会に、方正日本人公墓を中心にして、７３１部隊・撫順戦犯管理所等について、報告活動をしていきたいと考えます。

＜うざわひろし、本会会員＞

「友好の原点を歩く旅」

―検証と謝罪と誓いと―

藤井 正義

２００８年７月９日から７月１３日までの５日間、「社団法人日中科学技術文化センター」と「方正友好交流の会」の共催で「友好の原点を歩く旅」と銘打つ訪中団が結成され、中国東北地方（旧満州）の各地を訪問した。関連する文章は多くの参加者から本号に寄稿されているが、私もその一員として若干の言葉を添えさせていただく。

訪中の目的はハルピン市方正県にある「方正地区日本人公墓」をはじめ幾つかの公墓に墓参し、日中両国の戦争犠牲者の霊を鎮めるとともに、７３１部隊罪証陳列館、撫順戦犯管理所、平頂山惨案遺址記念館、9・１８事変博物館など各種戦争記念館を訪ねて歴史認識を新たにし、日中友好交流促進の一助とするためである。

大類善啓事務局長を団長とする一行は、社団からは木村直美理事の参加を得、「方正友好交流の会」、並びに、その他の各方面から日中友好に深い関心もつ方々の参加を頂いて、総勢１６名に達した。

一行は7月９日朝、成田を発ち、大連経由で夕方ハルピンに着き、同市のホテルで旅装を解いた。

－戦禍を被う悠久の大地－

翌１０日朝、バスで最初の訪問地である方正に向かう。市街地を離れてまず目を奪ったのは、ほぼ一直線に伸びる高速道路の両側に果てしなく広がる緑一色の玉蜀黍畑である。大人の背丈を遙かに凌ぐほどに生育した太い茎の根元に目をやれば、肥沃な黒土が露出している。

あの敗戦の混乱の中で、関東軍に置き去りにされ、路頭に迷った開拓民は数知れず、１８０キロ離れた方正県から徒歩でハルピンまで逃避行を試みた。だが、それは容易なことではなく、大部分は厳寒の方正で越冬を余儀なくされ、数千人がその最期をこの地で迎えた。平和な今日、目の前に豊かに展開する玉蜀黍畑からその悲劇を思い起こすことは難しい。だが、飢えた軍国主義日本が、食料の供給と対ソ防衛布陣という一挙両得的侵略戦争遂行のために開拓民を利用したことを思うと強い怒りを覚える。

－感謝と友好と－

一行は方正に到着後、ただちに県人民政府を表敬訪問した。人民政府常任委員の郭玉志氏、外事弁公室主任の王緯新氏ほか数人の幹部から熱烈な歓迎のことばを受ける。

これに応えて大類団長からは、方正はまさに「日中友好の原点」であり、方正県と交流することにより国際的友愛の精神を培いたいと返礼のことばが述べられた。日本人公墓の維持管理のため方正県側の高配に対し深甚な謝意が表され、故石井貫一氏夫人及び日中科学技術文化センターから預かった献金と、会員福久かずえさんから託された千羽鶴が贈られた。

まず、中国の烈士が眠る「革命烈士記念碑」に詣でてから、「方正地区日本人公墓」などのある「日中友好園林」に向かう。

「友好園林」は松林のなかにあり、清楚に掃き清められていた。団長から墓前に献花がなされ、参加者が交々焼香をする。新潟県村上市から来られた野田尚道住職のあげる読経の声が朗々と林間に木霊し、最後に全員が手を合わせ犠牲者の冥福を祈った。

凌辱されるより自決を選んだ５００人の婦女子を祀る「麻山地区日本人公墓」、残留孤児を引き取り育てた、「中国養父母公墓」、この寒冷地に稲作技術を広めた「藤原長作先生の墓」と墓参したあと、開拓民遺品陳列館を参観し、「友好祈念」の石碑をバックにして記念撮影をする。

市街に帰る途中にある伊漢通開拓団跡は炎天下に当時のままの佇まいを残していた。家々の住人は変わっても、分厚い草葺きの屋根も、荒い土壁も、屋敷を取り巻く無骨な木柵も、往時を偲ばせる。

方正県最終の訪問先は「船着き場」だ。花崗岩の墓石はハルピンから松花江をはるばる船便で運ばれ、その「船着き場」に陸揚げされた。おそらくジャッキなどを使って苦労をともなう作業であったと思う。

翌１１日から１３日までは、旧日本軍の犯した罪証を検証し、中国側の寛大な対応に謝す旅であった。

－検証と謝罪－

ハルピン市郊外の「７３１部隊罪証陳列館」は、石井部隊による生体実験の行われた場所だ。　ペスト菌、コレラ菌、チフス菌など細菌研究所があった広大な敷地には、証拠隠滅のため敗戦とともに破壊された当時の建物が再現されている。建物の内部には、「マルタ」と呼ばれ、細菌実験や冷凍実験、加熱実験など生体実験の材料に供された人たちの蝋人形が実物そっくりに作り込まれている。ある者は椅子にかけさせられて注射を強いられ、ある者は密閉した部屋に押し込められて加熱され、又、ある者はドライアイスのガラス箱に入れられて冷却された。その苦痛に歪んだ憎しみの顔はいかにもリアルに表現され、目を背けたくなる。黙祷。

－反省と謝恩－

瀋陽市から車で一時間の撫順市にある戦犯管理所は、旧日本軍の侵した罪証に対して、中国政府の人道主義が示された場所だ。休日にも拘わらず、女性の候桂花館長と数人の幹部が出迎えてくれた。館長はこの建造物の歴史を語った。

１９５０年に、愛新覚羅溥儀を含む日本の戦犯９００名余がソ連から引き渡され、この施設に収容された。目的は、軍国主義に凝り固まった旧日本軍戦犯の再教育である。同時にそれは周恩来に代表される中国政府の人道主義発露の機会でもあった。日本人戦犯達を処刑せず、人格を尊重し、厚遇を与え、第二の故郷として住まわせ、犯した罪を認識させることにより、人間改造を行った上で、１９５６年６月から１９６４年３月にかけて順次全員を解放し、帰国させた（五州伝播出版社版「日本戦犯再生の地」など中国側資料によ

る)。

事実、旧被害者国である中国側の施した、かかる想定外の処遇は、日本人戦犯達を感動させ、親中派を生み出し、後年の日中国交回復に資するところ大であったと考える。「撫順の奇跡」といわれる所以である。

ー惨劇と不戦の誓いと、互恵へー

平頂山への途中、道路わきから憮順露天掘り炭鉱を望見した。岩脈が露出した途轍もなく大きな摺鉢状の岩山の中腹を、鉱石運搬用のレールが地底に向かって螺旋状に降りている。もう石炭は取れないが、他の鉱石はまだあるといわれる。

「平頂山惨案遺址記念館」は平頂山への道路を登り切った場所にある。

麓の山村には５００世帯、３０００人の中国が住んでいた。村人の大部分がこの山麓で旧日本軍によって虐殺された。その様子が写真や絵画で展示され、館内には８００体の白骨体が掘り出されたままの姿で折り重なっていた。その光景は、１９３７年４月、ナチの無差別爆撃で犠牲になったスペイン・バスク地方の都市「ゲルニカ」を描いたピカソの絵を想起させる。

旅の最終日、東北戦争（満州事変）勃発の地、柳条溝の近くに建つ、「９・１８事変博物館」を参観した。旧満州における旧日本軍による侵略と中国側の抵抗戦線の模様が幾多の展示物で示されている。

かつて軍国主義日本は中国を侵略した。これは紛れもない事実である。今回われわれは旧満州で戦火の残した傷跡を巡り、この事実を検証した。

われわれの立場は、これら中国で犯した数々の罪状を虚心坦懐に顧みて反省し、陳謝し、不戦を誓い、日中友好交流をますます維持発展させ、ひいては東アジアの平和と安寧の秩序に資することである。このまさに「友好の原点を歩く旅」に参加できたことの意義は大きい。

けれども、このような高邁な精神に対して、「９・１８事変博物館」の出口に掲げられた江沢民氏の筆になる「勿忘“９．１８”」という銘は、中国側の歴史認識の頑なさを示し、政治経済文化の各面で互恵関係を目指している日中友好の交流に逆行する虞なしとしない。

＜ふじいまさよし、(社) 日中科学技術文化センター参与、本会事務局＞

旧満州を訪ねて

小関 光二

平成20年7月、方正友好交流の会からのお誘いを受け、4泊5日の日程で、旧満州の旅に女房と参加した。私の家族には、直接、旧満州と係わりはありませんでしたが、今日の日本と日本を取り巻く社会の状況を考えると、どうしても、明治維新から終戦までの出来事を歴史的に整理し、今後日本の進むべき方向やあるべき姿を自分なりに考えてみたいと思っておりました。旧満州で起こったことは、今日でもまだ生々しい過去のことだとして、歴史研究対象としてあまり扱われないように思う。早く、社会学や歴史学で学者先生方が堂々と研究し発表してもらいたいと思っている。このことが、国民に議論が広がり、世界平和に貢献できる日本の姿を見出す基礎になるのではないでしょうか。

この旅行で、戦前の日本が旧満州で行ってきた残滓を自らの目で確かめることができました。書物やうわさではある程度のことは知っておりましたが、やはり現場を直視して、その印象はそれは強烈な一語に尽きます。主に訪れたところは、「日本人公墓」、「松花江船着場」、「中国侵略日本軍第７３１部隊罪証陳列館」、「伊藤博文暗殺の地・ハルビン駅プラットホーム」、「中国撫順戦犯管理所」、「平頂山惨案遺址記念館」、「張作霖師府博物館」、「九・一八事変（満州事変）歴史博物館」である。

ハルビン市郊外、黒龍江省方正県にある日本人公墓は、当時の国策に従って開拓農民として渡満したとはいえ、ソ連の参戦と終戦時の混乱で、多くの婦女子が逃げ惑いこの地で亡くなられ、中国政府によって建てられた公墓である。約５０００人の遺骨が納められているという。寒さ、食料難、病気の極限の中、亡くなっていかれた方々の心痛を思うと涙が止まりません。文化大革命時にも守り抜いた地元政府に感謝するとともに、墓前に頭をたれて先輩たちの過去の過ちをお詫びいたしました。松花江は対岸がかすむほど川幅広く、当時開拓民は渡し舟で北部地域に分散して行ったが、終戦時にはどうしてこの川を渡ってこられたのかその苦労が偲ばれた。

７３１部隊罪証陳列館はハルビン市内平房地区にあり、当時は、日本軍の細菌戦研究施設で、中国人が捕らえられ少なくとも3000人の被験者が生体実験を受け犠牲となったところである。現場を見て回りましたが、言語に絶するものである。部隊は終戦日前に、残っていた被験者を殺害し、資料を隠滅し、器材設備を破壊し、建物を爆破して、汽車で日本に逃亡帰国したとのことで、このことは、敗戦決定を事前に知っていた証拠で、国民に対する背信行為であるとともに、中国の方々の心に深い傷を残したものである。部隊長の石井四郎は生体実験資料を連合軍に渡して、東京軍事裁判を免れたといわれている。

旧日本軍による同様な悲惨な事件が撫順平頂山村で、1932年9月16日に起きた。抗日ゲリラをかくまったとして、約3000人の住民が殺害され埋められたものである。これを発掘した状態で記念館に移設し約幅５ｍ長さ８０ｍにわたって８００体の遺骨が展示公開されている。私は８０ｍを歩きながら無言で謝り、合掌しました。

この他撫順市には、中国撫順戦犯管理所がある。終戦後、旧日本軍の戦犯やその協力者が収容され、人間としての再教育を受けたところである。周恩来総理の「罪を憎んで、人を憎まず」の精神で戦犯を教育し日本に返したところで、その人道的処遇に対し感謝する

とともに、感服した次第である。帰国した方々は連絡会を作り日中友好に今でも尽力しているとのことである。

昭和3年6月4日朝5時25分ごろ、旧日本軍の謀略により張作霖爆殺事件が引き起こされた。瀋陽市内にある彼の邸宅が現在張作霖師府博物館として保存されている。彼は事件後、この邸宅内の第5婦人の館に担ぎこまれ、同日中に死亡したが、張学良への権限委譲が済む21日まで徹底的に死亡事実が伏せられたため、日本に付け入るすきを与えなかった。

しかし、その3年後の昭和6年9月18日に、旧日本軍は、満州を軍事制圧する満州事変のきっかけをつくった柳条湖事件を起こした。九・一八歴史博物館はこの満州事変の屈辱を忘れないために立てられた歴史博物館である。その規模は膨大で、如何に中国が、満州事変を国の屈辱であったかと思っているかが感じとれた。展示の最後には、結論として「中国は何故侵略されたか、それは弱かったからである。侵略を受けないためには強い国にならなければならない。」という趣旨のことが書かれていたのが印象的であった。

この旅からはいろいろなことを学びました。戦後レジームからの脱却を主張する政治家もおれば、これを国民が賛同する傾向もある。隣国中国東北部を旅しただけでも脱却は容易なものではありません。それは言葉や時間だけでは解決できるものとは思われません。国民同士が真に理解し合い、信頼しあうことが必要である。そのためには、精神的鎖国状態を解きほぐし、過去の思い出したくないものも歴史として取り上げて評価し、これを将来の糧として、世界から認められる新しい日本を築くことだと思う。これなくしては、日本がなすべき方向である国際平和のための国際貢献も、しようにもうまくいかないと考える。帰国後、この旅を多くの知人友達にお話しましたが、いい旅をしてきたねと評価してくださった方はたったの2人でした。なかなか厳しい現実です。日本のトンネル（精神的鎖国）はまだまだ続きそうです。人間として人間性を重んじ、そして率直であれば道は開かれていると考えているが。

<こぜきこうじ、NPO法人日中科学技術交流協会会員 環境カウンセラー>

平和を願って

小関 征子

初めて二人の海外旅行が今回の訪中でした。私は何時か北京へ行きたいと思っていたので、参加させてもらいました。大連飛行場での第一歩の感想は、夫が接している中国人の方達とは全く異質なものでした。しかし、旅行が始まって方々見学するうち、私の心に変化が起き、歴史的に正しく捉えての謝罪の気持ちが第一となりました。また街で会う男の子や大勢の人々に親しみと優しさを感じました。彼の地も今は秋、寒くなったでしょうとあの広い農地を思い出しています。

かって北京には、昭和13年から終戦の年まで、現地の若い女性むけの「北京生活学校」がありました。婦人之友社、自由学園、全国友の会の創立者羽仁もと子によってつくられ、交流は今でも続いています。平和を願う全国友の会は、よい家庭からよい社会をつくりたいと願い続けておりますので、一会員の私にとって、今回の旅行は有意義かつ、沢山の学びをいただきました。

<こぜきせいこ、全国友の会会員>

方正地区日本人公墓——友好の原点を歩く旅で考える

西 忠雄

7月の方正県は北国の夏空の下に、農閑期に入った田んぼが青々とした稲穂を伸ばし広がっている。松花江の南岸に広がるこの地域は、丘陵地帯に囲まれるように平地が広がり、彼方には低い山並みが連なっている。北国のさわやかな夏の空気に包まれた広がりは、かつて想像を絶する悲惨なドラマが繰り広げられ、人びとの数だけあったさまざまなエピソードの存在すら思わせないような静けさを保っている。

北国特有の夏の白い太陽の下に、シーンと静まり返っている典型的な北方農村のたたずまいの中で、この地で繰り広げられた歴史的事実と秘められている厳しい思いを考えるとき、そのあまりの重さに、さわやかな空気と白い太陽に包まれているだけに言葉を失わざるを得ない。

郊外の田畑がと切れ丘陵地帯に懸かる辺りに、彼方に砲台山を眺めて松林に囲まれたさわやかな「中日友好園林」がある。「方正地区日本人公墓」「麻山地区日本人公墓」「中国養父母公墓」が並び、稲作技術者藤原長作の記念碑といくつかの日中友好と平和を願う記念碑がある。公墓の周りは日本各地からの団体、開拓団関係者による記念植樹が植わっている。

日中国交回復以前の「特殊な時代」、散在する遺骨を埋葬したいと思った一人の残留婦人の願いに、唯一の日本人公墓として建立を認めた周恩来総理の思想と高度な政治判断、「日本の庶民の墓であり、彼らに罪はない」として文革の時代も守り続けてきた現地の人びとの心情、それに応え中国人養父母の公墓を設け無限の感謝を表し交流を続けている開拓団関係者の思い。ここで繰り広げられている日中間の歴史的事実と人びとの思いは、現在の日本にとって大変な重みを持つ課題として記憶し続けなければならないと思う。

方正県の夏の太陽の下で、「日本は過去の歴史を総括しきれていない」ということを改めて考えざるを得ない。方正地区で繰り広げられた悲惨な歴史を担わされたのは、国家の意思に振り回された「庶民」である。悲惨な日中間の歴史の中で作られたそれぞれの感情を修復し、二度と繰り返さないことを誓い行動しているのも庶民である。日本政府、日本そのものがこれらの事実に厳粛に対応し、いまだ続く棄民政策を謝罪し応えたかは、肯定する言葉がかならずしも見つかるわけではない。

満蒙開拓団・満蒙開拓青少年義勇軍と「満州」侵略の歴史は、徹底的に解明され記憶していかなければならないが、それを生み出した日本の政治社会構造・風土を明確に認識していくことがより一層必要なことだと思う。戦前の軍国主義日本は、敗戦と東京裁判、平和憲法制定で生まれ変わったとは言い切れないところがある。もちろん絶対多数の日本人は、敗戦の事実と軍国主義社会の過ちを真剣に受け止め、平和憲法の下で大変な努力を続け今日があることは確かなことであるが、戦前の軍国主義社会を生み出した社会につながる政治風土が完全に清算されたとは思えないのである。

アジアの国々から時折突きつけられる厳しい反日批判と反日行動は、相手国の「愛国教育」の結果であるとはいえない面があることを厳しく認識しなければならない。加害者と被害者の関係は解消されたわけではないということを常に認識する必要があるだろう。

「方正地区日本人公墓」を生み出した状況を作り出したかつての時代を、いまだ評価する政治指向を持った輩を総理に就任させる政治社会風土が日本にはあり続けるということを考える必要があるのではないか。

「歴史を鑑として未来に向かう」というフレーズは、中国側が対日関係で指摘する言葉であるが、日本人は必ずしも冷静に受け止めていないところに問題があり続けると考えている。

2007 年 4 月訪日した温家宝総理は国会で、「歴史を鑑とすることを強調するのは、恨みを抱え続けるためではなく、歴史の教訓を銘記してより良い未来を切り開いていくためだ」と語った。福田康夫総理は、「長い歴史の中でこのように不幸な時代があっても、これをしっかりと直視して子孫に伝えていくことが我々の責務であり、戦後日本は平和国家の道を歩み国際社会に協力してきたことを誇りに思うが、そうした誇りは、自らの過ちに対する反省と被害者の気持ちを慮る謙虚さを伴ったものでなくてはならない。過去をきちんと見据え反省すべき点は反省する勇気と英知があって、初めて将来に誤りなきを期すことが可能になる」(2007 年 12 月北京大学)と中国の若者達に語った。

ふたつの演説は日中双方にテレビ中継され深い印象を与えたが、日中双方の国民のナショナリズムの底流にはこれとはそぐわない流れがあり、政治的摩擦が表面化しやすい状況が続いている事を見ておく必要がある。

福田総理は日中両国関係に関して「日中の歴史を俯瞰する時、長い、実りの多い豊かな交流があったことを忘れてはならない」と指摘し、両国間の政治的摩擦の心理的根源について「きわめて短期間に大きな発展を遂げた中国、巨大な存在として出現した隣人に対して、日本側ではどのようにお付き合いすべきか心の準備ができていない面がある。中国側でも、日本の国際社会でより大きな政治的役割を求めていることに、複雑な感情があるように見受けられる」と指摘したが、日本と中国の社会の中には克服しなければならない課題があることを、今一度考える必要があると感じている。

方正県の「中日友好園林」に示されている日中友好と不再戦・永久平和の決意、さらに周恩来総理が示した国際主義の精神を確認し、犠牲となった日中それぞれの庶民を慰霊することも大切なことであるが、同時に、いま起きている日本の現実を点検していくことがもっとも重要ではないかと考えるのである。

<にしただお、元日本国際貿易促進協会「国際貿易」編集長、日中経済ジャーナリスト>

私と方正

橋本 清一

「橋本さん、方正へ行きたいやけんどおぉ、無理かなぁ」と、初めて「方正」という地名を聞いたのは、30年近く前の金沢でした。「方正へ行きたい人がたくさんおるんやけどおぉ」と訪ねて行った当時の石川県日中友好協会（正統）の事務所で、事務局長から是非とも行きたいと色々お話を伺いました。私の日中旅行社名古屋営業所勤務時代の頃でした。当時、北陸に事務所は無く名古屋営業所が北陸 3 県を担当していました。早速事務所へ帰り、「方正」のことを調べましたが、当時は未開放地区が多く「方正」も開放されていないため訪問することはできませんでした。「残念ですが今は未開放だから行けませんが、きっとそのうちいける様になりますよ」となぐさめの気持ちを込めながら、回答したことを昨日のように覚えています。事務局の北崎カヨさんという優しいおばさんも、傍らでこのやり取りを聞いていました。彼女は、中国研究所研修学校の第一期生で、第十期生の私の大先輩でした。彼女からも何とかして欲しいとよく依頼されましたが、色々手を尽しても当時は不可能でした。「方正」を「ほうまさ」と呼んで「宝清」と区別していたことも、その時に知りました。

1982年に名古屋営業所から東京本社に転勤となり、「方正」は暫く私の周りから消え去ってしまいました。再び「方正」と巡り合うことになりましたのは、調布市の医師で元佳木斯医科大学出身の池田精孝先生の仕事をさせて頂いてからでした。先生のご家族がいらっしゃった大古洞開拓団跡を尋ねる旅には、必ず方正の日本人公墓参拝が組まれていました。以来、毎年大古洞開拓団・小古洞開拓団跡・柏崎開拓団跡・大八浪開拓団跡・通河県などの訪問に、必ず「方正」日本人公墓がセットされていました。この十年来、池田先生とご一緒させて頂き、「方正日本人公墓」を毎年参拝するようになりました。

方正を訪れるたびに、当時の悲惨な難民の苦労を思いやり、やるせない思いに駆られますが、日本国の非道な対応に比べ、残留婦人松田ちえさんの同胞の無残な姿を見るに見かねてお願いした純粋な気持ちへの、周総理の果断で的確な指示に改めて感謝の気持ちが強く沸いてきます。

国策によって旧満州国へ開拓という名の下の土地略奪、権力掌握、つまり侵略に加担させられ、召集は無い・関東軍という最強の軍隊が防衛する楽土との触れ込みで、いざとなったら根こそぎ召集されるは、最強部隊はさっさと逃げ出し、守る者は自分たち年寄りと婦女子のみで、無残な生き地獄を見せられる。この責任を誰に問えばよいのか、方正日本人公墓の上空には望郷の念にふくらみ、恨みを一杯抱えた霊魂がたくさん舞っている様な気がします。

戦争は悲惨だというけれど、未だに地球から戦火の消えた験しは有りません。

日中両国の将来の為にも、過去の触れたくない事実を直視し、より多くの方々に知って頂き、風化させる事無く次世代に伝える事こそ大変重要なことであるとおもいます。

中国東北地区だけでは有りませんが、方正以外にも沢山の日本人埋葬地や、軍事機密上殺害された中国人の所謂、万人抗も沢山ありますので、そのシンボル的意味合いとして、「方正日本人公墓」を更にしっかりとした物にすべきかと思います。国民的総意で日中不再戦の日を設け、両国首脳の揮毫による石碑を記念として建立したら如何でしょうか。

日本国の対外予算は大いに削られ、とても「方正」には回せないでしょうが、過去のことを思い起こせば、国策としてきたことの結末ですら始末しないでは、この世は通らないのではありませんか。生きて帰った人々には、わずかではあるが保障した、他の南洋の人たち、本土で戦災に遭った人たちも皆同じだと言う人もあるかもしれないが、国策で行かされた満州は別物だと思う。ましてや、彼の地で命を無念にも落とされた方々の鎮魂は、国の事業として行うべきだと思いませんか。

であれば、「方正日本人公墓」を「日中平和祈念公園」とし日本人公墓（周辺で路上に現れているご遺骨を収集し公墓に埋葬）と中国側の烈士陵園を同じ公園内で併設したら如何でしょうか。敷地面積は今の十倍ぐらいにして、費用は日本国側が８割日本側民間２割で負担し、中国への修学旅行はこの「日中平和公園」を必ず訪れることと明文化する。

日本と中国は一衣帯水の隣国と言われますが、実際は更に多岐にわたる深い関係が有り、ＤＮＡも極めて近い本当の親類縁者の関係に有ると思います。両国が手を携えて（綺麗過ぎる表現で、実際は騙したり騙されたりの関係もあることでしょう）東アジアで如何に生き残るかという、切実な課題に取り組み始めた今、やはり中国と共生する覚悟が必要かと思います。その両国の友好のシンボルとして活用されるなら、「日本人公墓」にお休みになっている人々、「養父母の墓」に眠る残留邦人の養父母たちも、草葉の陰でお慶びになることでしょう。

<はしもとせいいち、日中友好宗教者懇話会理事、改革開放体制以前から、中国専門の旅行社に長年勤務し交流活動に携わる。今回は添乗員として参加>

日中友好の旅に思う

野田 尚道

中国東北部を尋ねる旅を重ねることになったのは、日中国交三十周年の２００２年７月、地元に住む元満蒙開拓団青少年義勇軍の一員であった長田末作氏の殉教者慰霊法要に同行したことが最初のきっかけである。

その際の慰霊地は、終戦間際のソ連軍参戦により一家六名全員が死亡（戦死、始末死、病死）した親類有縁の地、蜜山県黒台とソ満国境虎林県にある現地人の多くの犠牲のもと五年がかりで関東軍が築城し、民間人を含む約千六百人が戦死したとされ、未だほとんどが未発掘状態の巨大墳墓の如き陸の軍艦「虎頭要塞」、そして、今年２００８年７月に「日中友好の原点を歩く旅」でも訪れた方正県にある、逃避行を続けた開拓民が日本への帰国を果たせず、集団自決、零下四十度の冬を越せず収容所で病死、凍死した遺骨５千体が埋葬される「方正地区日本人公墓」であった。

第二次大戦後、五十数年を経た今なお、非業の最期を遂げた叔父一家を思う親族の悲しみと、国策によって「王道楽土」を夢見て渡満した開拓民の無念さに思いを致す時、読経も儘ならず、只只涙が滂沱として流れるのみであった。「手を合わせ祈る心に響きしは忘れてならじと亡き者の声」

今年八十三歳の長田末作団長が訪中の際に行う地元人民政府への表敬訪問では必ず過去の開拓民として入植した自身の謝罪から始める誠意ある挨拶が、戦後生まれの中国の要人達にも感銘を与え、旅の先々で良好関係を築くことが出来、その成果が、三組の国際結婚へと発展した。将来、その子供達が日中友好への絆となってもらいたいということが更なる願いとなっている。

長田氏の熱意と遺族の思いに突き動かされた五回に亘る慰霊訪中の縁が今回の旅参加へと繋がった。

真の日中友好関係を築くためには歴史的事実と向かい合う必要があり、この旅も７３１部隊罪証陳列館、撫順戦犯管理所旧址陳列館、撫順平頂山惨案紀念館等を巡る日中間の不幸な過去を認識させられる強烈な印象が残ると同時に、一抹の不安を抱くものとなった。

仏教聖典に「怨みは怨みによって鎮まらず、怨みを忘れて初めて鎮まる」という一文がある。方正地区日本人公墓の建立に纏わる秘話や、撫順戦犯管理所での日本人戦犯への中国側の対応は、当時の周恩来という大人君子の存在と中国人民の度量の大きさへの感謝を忘れず、広く日本国民へ伝えていかなければならないことである。

最後に一抹の不安とは、歴史認識の相違や国益追及から来る国家間の摩擦の深まりと相俟って、高まる人民の国策に対する不満の鉾先を躱すための反日教育の材料に、盛んに建設が進む歴史の保存館が利用されていきはしないだろうかという懸念である。

不幸な歴史は繰り返してほしくないことであり、国を変える力を持つ国民（人民）が直接理解し、連携し合える民間交流を今後も精力的に幅広く行っていくことが重要な鍵となるものと考えているのである。

今回も旅で縁を結ばせていただいた皆様方に感謝申し上げます。　　合掌

＜のだしょうどう、新潟県村上市　東岸寺住職＞

方正を訪ねて

矢島 由利

私にとって中国は遠かったが、かつて日本が“満洲”という国を造ったということに最近非常に興味を持った。５月に父と日中科学技術文化センター主催の、大連と瀋陽を訪れるツアーに参加した後、もう一つ方正へ行くツアーがあるという話を聞き、続けて旅をするのは贅沢だと思ったが滅多にない機会なので行くことにした。方正の地名はそのとき初めて知った。ツアー前にセンターの講演会で井出孫六さんのお話を伺うことができた。40年前にハルピン駅で日本語を聞いたというエピソードや所謂“残留孤児”が帰国後、日本政府を相手に裁判を起こした話は非常に印象深かった。

ツアー初日は大連の市内見学の後、ハルピンへ移動。２日目、方正の日本人公墓、養父母の墓、革命烈士記念碑、伊漢通の開拓団跡へ。目に眩しい田んぼの緑を見ながら、63年前の冬を想像しようとした。翌日は731部隊罪証陳列館、ハルピン駅の伊藤博文を安重根が殺害した地点。瀋陽に移って、４日目は撫順戦犯管理所、平頂山祈念館を見学した。まさに日本の“罪証見学”の旅だ。オリンピック前で賑わいを見せるハルピンの街の華やかさとは対照的だった。ことばもできず、一人では到底廻ることのできない場所を短い期間でまわることができた。旅行を企画していただいた日中科学技術文化センターと方正友好交流の会には心から感謝している。

方正に公墓を建てることができたのは、松田ちゑさんの働きの上に、「周恩来の寛大な処置」があったからということだ。松田さんの尽力に敬服する一方、また、たった一人の奇特な女性と周恩来のおかげだったのか、と思ってしまう。軍人たちは長春から東京まで５～６時間の飛行で軽々と往復していたのに、敗戦後開拓団の人々を見捨てた。

日本人にとって周恩来は“神様”のような存在だろう。日本人がおびただしい数の中国の人々を殺した戦争の後、撫順戦犯管理所に見られるような寛容な政策をとるという判断を下すことは長期的に見て正しいこととはいえ、非常に難しいことであったに違いない。非人間的な残虐行為を行った者たちへ白いご飯を与えて悔悟へ導くという政策。あまりにも有難いことである。

けれども、日本人はいつまでもそのような恩恵を強調してばかりいてよいのだろうか。（靖国問題ではすでにそれすら無視しているが。）日本人が率先して過去に何をしてきたのかを明らかにし、被害者が納得するような謝罪をしなければ、信頼関係は築けない。すでに過去を検証し、中国の被害者を原告とした裁判を起こしているが、被害の大きさと日本国内での動きを考えればまだ十分ではないだろう。

10月末に朝日新聞の「窓」という小さなコラムに「平頂山事件」とあった。読んでみる

と平頂山事件で奇跡的に生き残った 3 人について書かれていた。判決は国家無答責を理由に請求棄却で残念だったが、弁護団や市民と知り合うことができて日本人に対して心が氷解したから幸せだ、と原告の中国人女性が書いたそうである。記者はそれを読み、「歴史に根ざす民族感情の対立も乗り越えられるかもしれないと思った」とのことだ。確かにその原告の思いは有難い。しかし、そんな原告の優しさに頼ってよいのか。感傷的な思いは胸にしまい、最高裁でも覆らなかった請求棄却という判決に責任を感じなければならないと思った。

＜やじまゆり、大学院の職員＞

＊下記左が、矢島由利さんが原稿でふれた記事。
右の記事は朝日新聞・瀋陽支局長の古谷浩一さんが書かれた記事。

08 年 12 月 13 日（土）付夕刊

■「平頂山事件」証人語る

1932年、現在の中国遼寧省撫順市で多数の住民が旧日本軍によって殺害された「平頂山事件」。その生存者の1人、楊玉芬さん(83)が、日本の弁護団の訪問を受け、事件について改めて語った。

その夜、村人たちは集められ、いきなり機銃掃射を受けたという。7歳だった楊さんは父親らといっしょに現場から逃げたが、母親らは亡くなった。「思い出すと怖いし、話しても仕方ないから、もう忘れたことも多いよ」

日本で96年に始まった損害賠償訴訟は06年、原告側の敗訴が確定。しかし、弁護団はその後も日本政府の公式謝罪などを求めて活動を続ける。

「日本の弁護士たちには本当に感謝している。日本人にもいい人がいるんだとよく分かった」（古谷浩一）

08 年 10 月 29 日（水）付夕刊

窓 論説委員室から　平頂山事件

「平頂山事件」の訴訟弁護団が、中国人原告との出会いから、裁判の過程、その後の動きまでを一冊の本「平頂山事件とは何だったのか」（高文研・発行）にまとめた。

本当に日本人が真剣に弁護してくれるのだろうか。出廷のため、日本に行ったら、拘束されたり、生命を奪われたりしないか。そんな原告の不信の中で、裁判は始まったという。

平頂山事件とは、満州事変が起きた翌年の1932年、遼寧省の炭鉱都市、撫順の近郊で、旧日本軍が村民を虐殺した事件だ。

当時子供で、親らの体にかばわれるなどして生き残った3人が日本政府に計6千万円の損害賠償を求めて96年に訴訟を起こしたが、10年間にわたる裁判の末、06年に原告側の敗訴が確定した。

東京地裁は事実関係をほぼ原告の主張通りに認めた。しかし、当時は国の損害賠償の根拠となる法律はなく、国は責任を負わないという「国家無答責」を理由に、請求を棄却した。高裁でも最高裁でも覆らなかった。

だが、原告の女性、方素栄さんは敗訴の報告のため、中国を訪ねた弁護士たちにこう語った。「私は日本人を恨んでいたけれど、弁護団と日本の市民と知り合って、私の心も氷解した。とても幸せです」

そんな記述を読んで、歴史に根ざす民族感情の対立も乗り越えられるかも知れないと思った。〈五十川倫義〉

前事不忘　後事之師（前事不忘 后事之师）

徳毛 貴文

前事不忘 后事之师（qián shì bú wàng　hòu shì zhī shī）。

「過去のことを忘れなければ、将来の手本になる」「前の事を忘れず、後の戒めとする」といった意味だ。

２００８年７月９日から１３日までの「友好の原点を歩く旅」に参加し、方正、撫順、瀋陽などを巡った。各地の戦跡に、この「前事不忘 后事之师」が大書されていた。

「前事」を忘れるどころか、知る機会が乏しいのが今の時代だ。旅先で「見たこと」を正しく理解できているかどうかも疑問だが、思いつくまま、まとまりなく、すこしスケッチしてみたい。

大連・中山広場の「大連賓館」（7月9日）

大連

今回、最初に訪ねたのが、大連・中山広場の大連賓館（大连宾馆）。１９１４年建築で、もとは満鉄直営の「ヤマトホテル」だった。

玄関を入ると正面に、１９２０年にホテル屋上から撮影された中山広場の写真パネルが掲げられている。横浜正金銀行大連支店、大連警察署、朝鮮銀行大連支店など広場を臨む形で、日本統治時代の建物が写っている。これらの建物が、それぞれ中国銀行大連分行、遼寧省対外貿易経済合作庁、中国工商銀行中山広場支行などとして、今も使われていることに驚く。周囲には近代的な高層ビルが並び立ち、この一角だけややアンバランスな雰囲気だ。

日本統治時代の建物であれば、忌み嫌われ、とっくに取り壊されるべきと思うが、今なお利用されていることは意外に思う。

ハルビンのホテルの「天気予報」。ロシア語が併記されている（7月10日）

哈尔滨

大連から飛行機でハルビンへ。翌朝、ホテル近くのハルビン駅（哈尔滨站）周辺を歩いた。午前７時前だというのに、駅前は切符を求める人、出迎える人、白タク運転手、荷物持ち――

と大変な人ごみだ。立錐の余地がない、というのはこういうことを言うのか。タクシーは赤信号だろうが歩道だろうが平気で突っ込んでくる。この騒々しさが中国の魅力でもあるのだが。

高速道路で方正へ。沿道には、見渡す限りのトウモロコシ畑が広がる（7月10日）

方正へはハルビンから高速道路で向かった。「ハルビン市郊外」と説明されることが多いが、その距離１８０キロ。３時間ほどかかる。中国は日本の尺度で考えると間違う。

高速道路の沿道は、なだらかな地平にトウモロコシ畑がどこまでも広がっていた。

照りつける夏の日差しの中、戦火に追われて畑の中を逃げ惑う入植者たちの姿が、ふと見えたような気がしたのだが。

方正・中日友好園林

方正県人民政府の表敬訪問、方正県革命烈士記念碑を見学した後、日本人公墓へ。

日本人公墓のことを知り、日中科学技術文化センターへ大類善啓氏を尋ねたのは３年前だった。その後、３回目の訪中で、ようやくここへ来た。

松林の間をざわわ･･･と流れる風の音しか聞こえない。旅の参加者、曹洞宗の野田尚道住職が読経をし、一人ひとりが手を合わせた。

ただ、実のところ私にとって、公墓そのものは、静かにそこにたたずんでいるだけだった。

それよりも感動したのは、ハルビン到着以来、ずっと私たちに付き添ってくれた「養父母連絡会（日本留华孤児养父母联谊会）」の秘書長、石金楷さんが、方正県人民政府の前で前日に撮った記念写真を添え、公墓のある「中日友好園林」のブックレットとともに我々一人ひとりに届けてくれたことだ。

読経の中、公墓に手を合わせる（7月10日）

２２ページのブックレットは方正地区日本人公墓、麻山地区日本人公墓、中国養父母公墓をはじめ、園林内の施設や開拓団跡地などの写真が収められ、全ページ、カラープリンターでコピーした上で、表紙を付けてきれいに製本したものだった。おそらく決して安い費用ではないだろう。しかも表紙裏には「２００８年第２次増訂制作」とある。

前の日に撮った写真を全員分、プリントまでしてくれ、石さんの心配りを感じた。

私たちが伝えなければならないのは、公墓というものが存在する歴史は、もちろんなのだろうが、石さんのような友人が遠く離れた中国にいるということなのだろう。

中日友好園林の「陳列館」には、開拓民が遺した時計、食器、ラジオ、ミシンなどがあった。銃剣まであるのは、彼らが「北方防衛」まで押し付けられていたためか（7月10日）

方正県人民政府が、中日友好園林には管理人（張林さん）まで置いてきれいに整備していたのに対し、方正県革命烈士記念碑は全く管理している様子がなかった。

私たちは、まず革命烈士に先に手を合わせるべきだろう、と考えたのだが、碑にはヒビが入り、敷地は草が生え放題。由来を示した案内板はガラスが割れ、説明の紙は日に焼けて赤茶け、はがれかかっていた。記念碑の敷地のそばは産業廃棄物の捨て場になっており、異臭が漂ってもいた。

記念碑の裏のいくつかの墓石には花が供えてあったのが救いに思えたが、碑は１９８７年に建てられたばかりである。この差はいったい、何なのだろう。

ハルビン・中央大街で。翌日、北京五輪の聖火が来るとあって、旗などのグッズが大売れ。翌朝のハルビン駅前も、小旗を持った若者であふれていた。聖火はルート非公表の上、厳重警備だったが、彼らは無事に「ナマ盛火」を見ることができただろうか（7月10日）

撫順戦犯管理所

ここはもともと、日本軍が中国人を収監した施設だったと聞く。共産党政権発足後、日本人や旧満州国幹部、国民党関係者などを収容したそうだ。現在は改修中で、本来は見学できない上、訪問した７月１２日は土曜日だったが、候桂花所長は私たちのために特別に時間を取り、内部を案内してくれた。

前日に訪ねたハルビンの「侵華日軍７３１部隊遺址」が、旧日本軍の非道を徹底的に告発する施設で少々気が滅入っていたこともあり、「再生の地」と呼ばれる施設での候所長の計らいはありがたかった。

当時を再現した施設は、理髪室、パン焼き釜、医務室、運動場などが備えられていた。囚人室も一段上がった台の上にあり、居心地も悪くなさそうだ。決して食糧事情がよくかった当時の中国で、戦犯たちは白米を食べることができるなど、人道的な待遇を受けたという。

ただ、塀の上には電気が通っていたであろう鉄線が張り巡らされ、ここがやはり戦犯の収容所だったことをうかがわせた。

受刑者たちへの異例の待遇は、周恩来の指示だったという。だが、ここの職員たちが皆、その指示に全面的に賛成していたわけではなかったろう。

そのことを候所長に尋ねると、彼女は「教官たちは、心情的には許せなかったが、これが自分の今の仕事だと思っていた。毎日毎日、自分の気持ちを整理していた」「個人的感情を隠して教育した結果、戦犯たちは改心していった」と答えた。

確かに、その通りなのだろうが、釈然としない思いも残る。自分の親兄弟を殺した（かもしれない）相手を前に、そんなに簡単に自分の気持ちを殺せるものなのか――。

撫順戦犯管理所で説明する候桂花所長（7月12日）

そこを彼女は、「周恩来の政策だからだ。『撫順の奇蹟』は、中国政府の政策の奇蹟だ」とも話した。

なるほど、許すも許さないもなく、「国の政策」だからか。中国という国のあり方を垣間見たような気がして、少し複雑な気持ちになった。

恐らく周恩来の考えには、中国のシンパを作るための計算や長期的戦略もあったはずだ。単純な「人道主義」では片付けられないかもしれない。

だが、もしそうだとしても、「政治」とは「そういうもの」だろう。

そして、それで「撫順の奇蹟」の持つ意味が薄れるわけでもない。

平頂山惨案遺址記念館

「3000」の数字をあしらった平頂山惨案遺址記念館の入り口のレリーフ(7月12日)

撫順では、１９３２年、日本軍が地元村民３０００人を虐殺し、ガソリンで死体を焼き、山を崩して死体を埋めたというジェノサイドの地、平頂山惨案遺址記念館も訪ねた。

ここではなんと、発掘された遺骨８００体をそのまま「展示」していた。

刀で突き刺された跡が残る頭骨、母親が子供を守るように抱いている遺骨――。黒一色のこれらの遺骨が８０メートルの長さにわたって、掘り出されたままの姿で広がっていた。

だが、と思う。

掘り出された場所にそのまま建てられたという記念館は、エアコンが寒すぎるほどに効き、遺骨群は分厚いガラスで覆われ、照明は抑え気味にセットされていた。どこか、ただの「展示物」を見ているような感覚に襲われた。

不謹慎の謗りを覚悟で言えば、これでは「見せ物」ではないか、とも思う。中国側からは「お前が言うな」と冷ややかに突き放されるかもしれないが。

早朝の瀋陽で。朝もやを突き破るように聳える建設中の高層マンション。中国の現在の勢いを象徴するかのようだ(7月13日)

発掘された遺骨の一部は、１３日に訪ねた瀋陽の「９・１８歴史博物館」にも移されていた。ここの遺骨は「浮き彫り」のように「展示」されていた。

共産党政府への求心力を高める「愛国教育」のためには、もしかしたら「これ以上のものはない」のかもしれない。

＜とくもたかふみ、会社員、４３歳＞

＊2008年10月発行の社団法人日中科学技術文化センター会報より転載

方正日本人公墓への思い

木村直美（理事）

私が初めてハルピン市方正県にある日本人公墓と中国養父母公墓の存在を知ったのは、「ハルピン市方正地区支援交流の会」の会長・故石井貫一氏のお手伝いを始めた平成6、7年のことである。

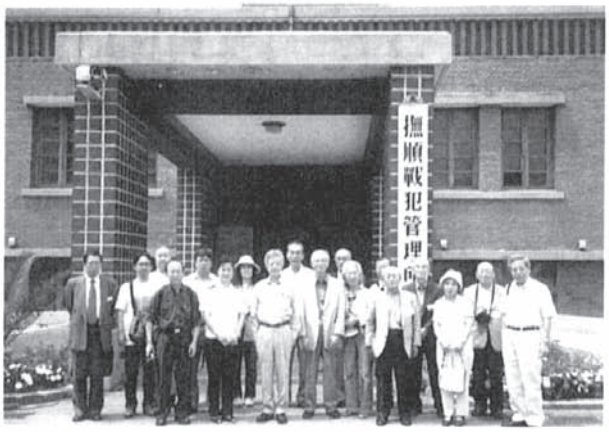
日本に痛めつけられた中国の人々が、当時決して豊かでない中で日本人の孤児を養い、5千人ほどの死者の遺骨を集め、墓を作り今もその整備管理を行っているという。それを聞いて、我々日本人が同じ状況下におかれた時に果たして同様の行動が出来るだろうか、という思いを深くしたことだった。

それから10数年、今回「友好の原点を歩く」訪中団に参加し、旧満洲時代に日本の残した負の遺産ともいうべき史跡を視察した。

この旅で思ったのは、人間は集団になって、ある方向性を与えられると、平和な世界であっては考えられないような残虐な行為も平気で出来るということである。

狂ったような集団の状況下、個人の感情はどのようになってしまったのか。集団のもつ怖さと虐げられた人びとの対応の多様さ、特に撫順戦犯管理所における戦犯に対する寛大な措置、そしてこれらの施設を案内する日本語の堪能な中国人ガイドの心の内はいかばかりかと思う。

このような事実を胸に刻み、方正の日本人公墓に関わっていきたいと思う。



撫順戦犯管理所前で記念写真を撮る

溥傑さんの瓢箪池

大類善啓（理事・事務局長）

この6月に開いた第4回「方正友好交流の会」の総会で、珍しく若い女性がいたので気になっていたら、彼女が愛親覚羅溥傑とひろ夫人のお孫さんであることがわかった。

後日、福永典子さんに会って話を聞けば、典子さんは28歳。祖父の溥傑さんが亡くなった時は14歳。とても可愛がってもらったという。

典子さんは今、中国と向き合ってみようという時期に来ていて、中国語も学び始めた。そんな時でもあり、知人の大学教授の誘いで方正の総会に出席されたのだった。

7月には撫順の戦犯管理所を訪問することを彼女に告げると、溥傑さんが所内に瓢箪型の池を設計されたという。それが残っているなら写真を撮ってきてお見せしようという話になった。

撫順戦犯管理所は、「鬼」といわれた戦犯たちが自らの加害責任を痛感、人間性を回復し、「撫順の奇蹟」と言われた場所だ。

改装中だったが、侯桂花所長は我々の意を汲んでくれ、土曜日にも関わらず4時間に亘って所内を隈なく案内してくれた。瓢箪池もそのまま残っていた。

侯桂花女史は、溥傑さんのお孫さんの来訪を歓迎するので、その旨彼女に伝えてくれと言われた。いずれ典子さんは撫順戦犯管理所を訪問することだろう。「撫順の奇蹟」が、新たな世代に伝えられていくのは嬉しい。

溥傑さんが設計した瓢箪池

「友好の原点を歩く旅」　＜備忘録的旅行記＞

藤井 正義

出張目的：ハルピン市方正県所在の「日本人公墓」と「中国人養父母の墓」他に墓参し、県要人との交流を行い、更には、撫順戦犯管理所など各種戦争記念館を訪ねて歴史認識を新たにすることにより日中友好交流に資する。
出張期間：２００８年７月９日から７月１３日まで、５日間
訪中団体名称　：「友好の原点を歩く旅」
主催：社団法人日中科学技術文化センター、方正友好交流の会

― 成田発大連へ ―

７月９日(水)

全日空９０３便は１７名の訪中団を乗せて定刻１０時１０分、梅雨の中休みの空に向かって成田空港を飛び立った。大連との時差は一時間、飛行時間は3時間。１２時３０分、大連国際空港に無事着陸した。一行は国内線への乗り継ぎ時間を利用して、旧大和ホテルをはじめ日本時代の有名な建造物を視察した。

結団式なる機会がなかったので、大連で喫茶店に入った折、各自自己紹介をする。

参加者（敬称略）：団長 大類善啓、秘書長 藤井正義、顧問 竹中一雄：元国民経済研究協会会長、阿久津国秀：撫順生まれ、５歳の時から方正に住む。トーハン勤務。岩嵜弘三：通信技術で東南アジア各国を巡回指導した経験あり。石橋実：中国旅行７回。鵜沢弘、木村直美理事。小関光二：日中科学技術交流センターと協力して、中国の環境改善のため訪中多数回。小関征子：同氏夫人。徳毛貴文：会社員、目下中国語を勉強中。西 忠雄：元、日本国際貿易促進協会理事、北京駐在、方正は始めてだ。野田尚道：曹洞宗東岸寺住職　新潟県村上市、方正は５度目。馬場信韶：１９３５生まれ、共産党船橋市議１１期目。矢島由利：父は社団の理事、元東京理科大学教授。飯沼信彦：ＮＰＯ愚公医山堂の専務理事。橋本清一：添乗員、日中友好宗教者懇話会理事。十数年前から**佳木斯**医大先生と交流あり。古くから日中交流に携わる。

席上、高橋健男著「満州―開拓民悲史」（３０００円）が紹介される。

― 黒竜江省の省都、哈爾濱へ ―

折からの濃霧で中国南部から来る空の便は大幅に遅延し、空港内が大混乱したためハルピン行き中国南方航空CZ3961便は、定刻になってもチェックインが始まらない状態だった。待つこと一時間、急に出発のアナウンスがあり、一行は慌ててゲートに走った。かくしてハルピン

国際空港に着陸したのは、すっかり夜の帳がおりてからだった。荷物引渡所で待っていたが、どうしたわけか大類事務局長のラッゲージが到着しない。空港事務所でトレースして貰う。結局、荷物は次の便で来ることがわかり、ホテルに届けて貰うことにした。

一行はバスに乗り込む。呼さんというガイドが歓迎の挨拶をして、ミネラルヲーターを一本ずつ配り、ダウンタウンに向かう薄暗いバスの中で１万円を６２０中国元に両替して貰う。ホテルに行く前に市内のレストランに入る。青島ビールで乾杯、アルコール度３６度の白酒を飲むと急に旅の疲れが出て酔った。喧噪とした市街地にある「ホテル昆倫酒店」に着いてから、シャワーを浴び、パジャマに着替えてすぐベッドに入る。夜通し、車の警笛が鳴り響いていたらしいが、それには無頓着で熟睡できた。朝になって聞いたことだが、大類さんのスーツケースは夜中に部屋に届いた。

― 多様性の都市、哈爾濱 ―

７月１０日（木）

珍しい品揃えのバイキングで朝食をすませ、ホテルの玄関前に出ると、道路は車と人で喧噪を極め、正面には貸切りバスも停車出来ないほどだ。仕方なく路上の群衆を追い払うようにして右端に詰め、バスは停車した。全員急ぎ乗車する。すぐ発車したが渋滞に巻き込まれて身動きができない。ハルピン駅の横を通り、ようやく混雑が緩和した大通りに出た。ガイドは昨夜に続いて呼さんである。呼さんは、古代中国の北方遊牧民、匈奴の末裔といわれる。

ハルピンは、黒竜江省の省都である。都市部の人口は４２０万人、郊外傘下の諸県を含めると９５０万人。面積は縦２００ｋｍ、横３００ｋｍで松花江の南岸に広がる。ロシヤとの国境に近いため、歴史的にロシヤの影響が強く、市街の目抜き通りにはロシヤ風の瀟洒な建造物が建ち並ぶ。

退屈しのぎにガイドの説明を聴く。

マンションは７階までエレベーターがないのが普通である。耐震性は悪く、震度６の地震が来れば倒壊するといわれる。幸いハルピンには地震がない。また、台風もない。雪は少なく、積もってもせいぜい３０ｃｍ。湿気も少なく、さらさら雪である。冬の室内の温度は２０℃。

ハルピンでは、土地代はＩ平方メートル当たり６万円ほどで上海の３分の１である。中国では土地は国有だから、所有権のかわりに７０年間の賃借権である。

外国人にはロシヤ人が多いが、大体が商売で来ている。ロシヤ人はジャガイモが好きである。ジャガイモの消費量はロシヤが世界一。ハルピンはビールの消費量が世界で第三位、一位はミュンヘン。

― 方正へ、高速道路の両側は緑一色 ―

バスはようやく市街地を抜け出て、一路、方正県へ向かう。高速道路の両側は見渡す限り緑

一色の玉蜀黍畑だ。ハルピン市街から１８０ｋｍ隔てた方正県まで、ほぼ一直線に走る高速道路を三時間ほどかけて走る。

遙か彼方に方正の街が浮かぶ。道路の両側の景色が一変し、玉蜀黍畑にかわって稲田が広がり、日本の田舎の夏を思い起こさせる。あの敗戦の混乱のとき、のどかな田園風景のなかを何千人もの開拓民が長蛇の列をつくって逃げまどった。見通しがよいから、すぐにソ連兵や現地人に見つかってしまったのではないか。

そんな想いに浸っていると、バスは高速道路から砂塵に煙る方正の市街に入った。市街の至る所でインフラ整備のための道路工事が行われている。県庁への道路も工事中のため、大型バスは通行禁止である。県の職員が迎えに来て、一行は二台のマイクロバスに分乗した。

県庁舎は竣工後間もない鉄筋コンクリート造りの五階建てだ。エレベーターはない。

―　方正県人民政府を表敬訪問　―

四階の会議室では人民政府常任委員組織部長の郭玉志氏と人民政府外事僑務弁公室主任の王偉新氏ら幹部がわれわれを出迎えた。王緯新主任が司会をするなか、郭玉志常任委員が歓迎の挨拶を行い、訪問団の団長大類善啓氏が答礼の挨拶をした後、福久かずえ氏に託された千羽鶴を贈り、陳列館に展示するよう依頼する。故石井貫一先生の未亡人の石井愛輝氏、並びに、方正友好交流の会から預かった公墓維持管理協力金を手渡す。

大類団長の挨拶：

団を代表して一言ご挨拶を申し上げる。今年は日中平和友好条約を締結して３０年になる。このような節目の年に、社団法人日中科学技術文化センターと「方正友好交流の会」の共催で、訪中団が結成され、方正県を訪問し、県政府の方々お話することは意義深い。この会は、以前あった「方正地区支援交流の会」の後を引き継ぎ、三年前に発足したが、私達は、公墓の存在とその意義を日本の若い人にも知ってもらいたいと思って活動してきた。公墓の存在は、日本の、いわゆる嫌中的な人々の考え方を正すためにも意味がある。今年１月、日本の宮本雄二大使が「日本人公墓」と「中国養父母公墓」を参拝した。いずれ日本の総理が公墓を訪ね、感謝のことばを述べるようになる日を待ちたい。我々はそのための努力をしたい。経済の中心が上海、政治の中心が北京であるとするならば、方正は、まさに「日中友好の原点」であるといえる。私は方正県と交流することにより、国際的友愛の精神を培いたいと思う。改めて、方正県の皆さんに感謝したい。

県庁の玄関口で全員の記念撮影をしてから、再び二台のマイクロバスに分乗して出発。道順から、まず主に国府軍との戦いで犠牲となった共産党側の戦士を祀る「革命烈士記念碑」に詣で、次にわれわれの主目的である「日中友好園林」所在の「方正地区日本人公墓」、「麻山地区日本人公墓」、（麻山地区でソ連軍に追われ、凌辱されるよりは自決を選んだ５００人の婦女子

を祀る墓)、残留孤児たちを引き取り育てた「中国養父母公墓」、この寒冷地での米作技術を広め、更には中国全土にまで水稲栽培を広めた水稲王の「藤原長作先生の墓」に参拝し、開拓民たちの遺品を展示する「陳列館」を参観した。その後、「平和友好」の大きな石碑の前で集合写真を撮ってから、マイクロバスに分乗して伊漢通開拓団跡を視察した。何軒かの草葺きの家が当時のままの佇まいで屋敷を囲む木柵の中に残っていたが、柵の中には当時とは関係のない現地の農民が暮らしていた。最後に、戦後、公墓建立の時、墓石をハルピンから松花江経由で方正県に運搬して陸揚げしたといわれる船着場に赴き、松花江の水面を渡ってくる涼風で、墓参の後の疲れを癒やした。

― 方正を後にして、再び哈爾濱へ―

まだ緑の丘陵地帯の上に浮かぶ夏の陽は高く、白い光を放っていた。ガイドは再び説明する。方正の米はジャポニカといって美味しい。日本に年間８０万トンも輸出している。大豆も多く採れる。油や豆腐用の大粒の大豆に対して、方正の大豆は納豆用の小粒な豆だ。日本の納豆の方が美味しい。中国とロシヤとの国境は長さ４０００ｋｍの黒竜江（ロシヤ名、ウスリー江）の真ん中である。黒竜江にはキャビヤのもとであるチョウザメが棲息する。この大河はやがてアムール川に流入する。黒竜江の水はその名の通り黒色だが、松花江は黄色だ。両者は合流した後、何十キロもの間、黒色と黄色の二筋の流れとなったままだ。河を流れる水の密度が異なるから容易に混ざらない。

黒竜江省の人口は３，７００万人。紅葉は主に白樺で、９月がよい。地形は、５０％が低い山、湖水１０％、草原１０％、農業地３０％。中国には５６民族あり、９３％は漢民族、黒竜江省には４６民族がいる。

とりとめのないガイドの説明が終わり、ハルピン市街に戻ったのは夕刻だった。バスを降り中央大街へ。スターリン公園に近い。レストランでゆっくりとロシヤ料理を楽しみながら白酒を飲んだ。ホテルは昨日と同じだ。

― ７３１部隊罪証陳列館 ―

７月１１日（金）

予定は、午前、ハルピン市郊外にある７３１部隊罪証陳列館を視察、午後、ハルピン駅１５時３８発の高速鉄道で瀋陽へ向かう。瀋陽には１９時３１分着予定である。

朝８時にバスでホテルを出た。ハルピンには３０以上も大学がある。有名なのはハルピン工業大学で１９２０年の創立である。

ガイドの説明は、今日の本番である７３１部隊罪証陳列館に移る。ハルピン市内からバスで一時間の所にあるこのサイトは、石井四郎軍医中将が責任者であった石井部隊によるペスト菌、コレラ菌、チフス菌等、生体実験による細菌研究所である。捕らえられた中国人が、「マルタ」

と称する生体実験材料として専用鉄道の貨車で送られた。その数おおよそ３０００人。そこでは細菌実験だけでなく、冷凍実験、加熱実験など超過酷な自然環境が人体に及ぼす実験などが行われた。

凍傷実験は、シベリヤ侵略のときの、凍傷被害の程度を調べるためだといわれる。旧日本軍はそこまで無謀な侵略を計画していたのかと唖然とする。

主な建物は終戦時、東部の一部を残して破壊されたが、戦後復旧され、現在は、過去の姿が再現されている。専用鉄道の線路は昔のままを保たれているという。撮影は建物の外部からのみに限られる。正面本部棟玄関を真ん中にして、黄色い二階建ての建物がシンメトリックに左右にのびている。

待つほどに本部の建物から専任のガイドが現れ、われわれを建物の中に導いた。広大な敷地には、正面の本部と廊下続きの奥に「マルタ」の収容場所が二棟（五号棟と六号棟）、その周りを幾つかの建物が四角に取り巻いている。本部棟の中は薄暗い。いろいろな生体実験の模様が蝋人形でリアルに再現されている。人体だけでなく鼬（いたち）や鼠による実験も行われた。

戦後、米国は石井四郎と取引をした。東京裁判で石井を免罪にする代わりに、石井から生体実験についてのあらゆる情報を入手したのだ。戦後、この施設を訪ね、懺悔した日本人の名前が張り出されている。石橋直方、（来訪当時６６歳）。胡桃澤正邦、田村良雄（篠塚良雄に改名）８７歳（来訪当時）。大連憲兵隊の三尾豊は「マルタ」を７３１部隊に送る役目だった。これらの模様を書いた本に、森村誠一の「悪魔の飽食」がある。

― ハルピン駅から高速鉄道「和諧号Ｎ２６号」―

市内に戻りレストランで昼食後、ハルピン駅に移動する。電光掲示板を見ると「和諧号Ｎ２６号」は午後３時３８分、定刻に発車する。ホームに伊藤博文暗殺の場所があるので、その確認のためカメラを構える。ガイドが、犯人、安重根（あんじゅうこん）（韓国の民族運動家）と伊藤博文とが位置していた二つの四角いタイルを指さした。十メートルもない至近距離である。伊藤博文は享年６９歳。

終着駅は北京である。列車はほぼ定刻にハルピン駅を後にした。最初の停車駅であり、われわれの目的地でもある瀋陽までは４時間かかる。空の下は見渡す限り緑の玉蜀黍畑である。昨日炎天下をバスで方正へ向かったときの、うねる様な真緑の丘陵とは幾分趣が異なっていたのは空を覆った雲のせいだろう。

鉄道マニア達は、和諧号のエンジンが何処製か話題にのせた。コンダクターに訊くと、この列車のエンジンはＣＲＨ３でドイツのシーメンス（徳国西門）であることが判明した。

― 車内の珍事 ―

窓外の景色に飽きて目を車内に転ずる。浅黒い顔の美人を囲んで男たちがはしゃいでいる。

今まで眠っていた隣席の大類さんが急に目を開け、背伸びして美人に目を向けると、女は片目を瞑って微笑んだ。大類さんも得意になって手を振った。俺はもてるねと言わんばかりの面持ちだった。野暮だから反論しないで黙って笑うと、「僕はもてるでしょう！」と今度は声を出して言った。彼女の視線は私に向けられていましたよ！と反論したかったが、よく見ると彼女は周りの男達にも満遍なく笑顔を送っていた。美女と美男が周りの仲間の手拍子にあわせて踊り出した。ダッタンの踊りだろうか？乗客も手拍子で応援する。退屈凌ぎの一場面であった。

和諧号は静かに夕闇の瀋陽北駅に到着した。

瀋陽北駅は灯かりが煌煌とともっていた。大きな屋根の下に幅広のプラットホームが長々と伸び、ヨーロッパの駅を彷彿とさせる。ホームに人影は少ない。ホームから駅舎まではエレベーターもエスカレーターもなく、てんでにラゲージを持って階段を上り下がりした。駅舎の広間にはさすがに大勢の男女でごった返していた。その中を、遅れまいと銘々が重いラゲージを出迎えのバスまで運んだ。ホテルは四つ星の「古都新世界」である。

― 工業都市、古都、瀋陽 ―

７月１２日土曜日

瀋陽は中国遼寧省の省都で人口は約７００万人。同省の大連や丹東、吉林省の長春、黒竜江省のハルビンなどに向けた東北地方の鉄道や高速道路網の要衝である。鉄鉱石や石炭などの資源が豊富で、機械工業などの重工業を中心に発展してきた。農業では、トウモロコシ、水稲などの生産が盛んだ。清朝の三代目のときに、北京に遷都するまでは国都とされ、盛京とも呼ばれたが、辛亥革命（１９１１年）を経て瀋陽と変わった。その後は日本軍占領時代には奉天とも呼ばれた。太祖ヌルハチが造った故宮やその墓である東陵は街の観光名所となっている。瀋陽は、新京（現在の吉林省長春）などと並んで、日本が東北地方を支配するための拠点だった。日本の関東庁、日本関東軍司令部、日本駐奉天総領事館が置かれていた。

冬場、１月の平均気温がマイナス１３度と厳しく、最低気温がマイナス３０度近くまで下がる日も多い。瀋陽出身の有名人には、中国を代表する女優の鞏俐（コン・リー）がいる。

瀋陽には新川という大きな川が流れ、風水からみて、川の北側は「陽」で南は「陰」である。瀋陽市は勿論、川の北側にある。ヌルハチの墓も撫順への途中、川の北側にあるが高速道路からは見えない。瀋陽から一時間も走ると川の向こうに撫順の街が現れた。街路は砂埃が立っていた。人口２００万人。

―撫順戦犯管理所 ―

土曜日の休日にも拘わらず朝の９時から、女性の候桂花館長と数人の幹部が出迎えてくれた。当館はたまたま改造工事中だったが、特別に観覧を許された。

館長はこの建造物の歴史を語った。

この建物は１９３６年旧満州時代に撫順電話局として建設された。かつて日本軍が収容所にしたという話もある。戦後、戦犯管理所となり、１９８２年、愛新覚羅溥儀を含む９００名余りの戦犯がソ連から引き渡され、ここに収容された。旧満州国戦犯は、処刑者４６名以外は１９５９年までに釈放された。

日本人戦犯たちには第二の故郷として住まわせ、人間改造が行われた。人格は尊重され、当時としては比較的よい生活が保障された。戦犯たちは帰国後、中国帰還者連絡会を組織し、日本軍国主義に反対し、日中国交回復に貢献した。１９８８年、中帰連は謝罪碑を建立した。

１９８６年開所後、視察を希望するたくさんの人々を接待したと館長は胸を張った。中帰連の多くの人が、“撫順の奇跡を継ぐ会”をつくった。館長の話は続く。

撫順戦犯管理所では日本人戦犯を一人も殺さなかった。だが、平頂山（後出）で日本軍は３０００人の中国人を虐殺した。中帰連作成の「赦しの花」なる小冊子に平頂山の話が載っている。中国のその時の政策をこの本を通じて若者に伝えたいとの主旨だ。歴史を学ぶことは平和を学ぶことである。恨みを覚えることではないと。

愛新覚羅溥傑の孫娘の方が、今年６月開催された「方正友好交流の会」の総会に来ていた。彼女は祖父の設計した瓢箪池があると言っていた。大類さんがその池がまだあれば見たいと館長に申しでて見せてもらった。

周恩来首相は、日本人戦犯たちには粟のご飯は口に合わないから、白米を食べさせるように、と命令した。看守の中国人達は粟のご飯で我慢したが不平を言わなかったという。

撫順の奇跡はなぜ起こったか？

１．中国の対日政治姿勢。

２．中国人が被害者である自分たちの個人感情を抑え、日本人戦犯に対して真心をもって接した。

何故、中国政府は手厚く処遇したのか？

答え：「恨みを寛容で返す」周恩来の考え方による。これは「日中友好の原点」である。全部殺すことは簡単だったが、日本人の家族を悲しませる。やはり、反省させるやり方が正しいと。

記念碑の前でわれわれは手を合わせ、日本人戦犯に対する中国側の好意的対応に深く感謝の意を表した。

平頂山への途中、道路わきから撫順露天掘り炭鉱を望見した。岩脈が露出した途轍もなく大きな摺鉢状の岩山の中腹を鉱石運搬用のレールが地底に向かって螺旋状に降りている。もう石炭は取れないが、他の鉱石はとれる。

— 平頂山惨案遺址記念館 —

。

1932 年 9 月 16 日，旧日本軍がおこなった平頂山虐殺現場には現在記念館が建っている。そ

の時，日本軍は平頂山村のほぼ全員をこの現場で殺した後，残虐行為の露見を避けるため西側に隣接した山を崩してして死体を埋めた。

平頂山村には500世帯3000人ほどが住んでいた。大部分は炭鉱労働者とその家族である農民だった。事件が起こったのは柳条湖事件（９・１８事変）一周年の頃、すなわち、1932年9月16日のことである。柳条湖事件の１周年に合わせて撫順地方を日本軍の手から奪い返す目的で，民主抗日自衛隊が，８月・９月に入ってから日本軍に対して，全面的な攻撃をおこなっていた。

９月中旬に入って抗日義勇軍の主力軍が撫順地方の日本軍に対して攻撃をおこなうとの情報を日本軍は受けた。日本軍は，この炭鉱の周りの村の人たちに，抗日義勇軍の行動を知っている人は前もって日本軍に報告するようにと通告した。９月15日の夜，抗日義勇軍の主力軍が南から侵攻した。途中で，平頂山村を経由して，今の露天堀のところに位置している日本人経営の炭鉱所を襲撃した。炭鉱所所長を始め日本人５人を殺し、炭鉱所の設備を壊し、大きな損害を与えた。

翌日の朝，抗日義勇軍は撤退した。攻撃を受けた日本軍は，報復するため、また、抗日運動を弾圧するために，撫順地方の日本守備隊隊長，憲兵隊隊長を始めとしてすぐに緊急秘密会議を開き、「平頂山村の人々は前もって抗日義勇軍が行動することを知っていながら，日本軍に報告しなかった。 村の人々は抗日義勇軍と通じているのだ。周りの村に対して見せしめるために、この会議で平頂山村の人を虐殺する計画が立てられた。会議の後、撫順地方の日本守備隊，憲兵隊，警察などが出動して朝から平頂山村を包囲した。

日本軍は先ず平頂山村の人たちに「全員の記念写真をとってあげますから，村の人たちは全部ここに集ってください」と言って人々を集めた。村人たちは，日本軍が虐殺するとは全然思っていなかったから家族一緒に現場に集まった。その時、周りで日本軍兵隊が機関銃を配置していたが，機関銃の上を黒布で被っていた。村人たちの大半は撮影機を見たことがなかったので，これが撮影機ではないかと思った。村人を全部ここへ集めた後，日本の兵隊が先ず村の家に火をつけ始めると村人たちが騒ぎだした。一人の日本軍指導者の命令一下、黒布がめくられ、現れた機関銃が火を噴いた。村人たちは大部分この虐殺現場で倒れたが、まだたくさんの人が生き残っていた。大人は家族や子どもを体の下でかばっていた。日本軍の兵隊は，生き残っている人を発見すると，銃剣や拳銃や軍刀をもって再び虐殺現場に戻り，死体を一つひとつ検査した。そして，死んでいる人も生き残っている人も、女、子どもかまわず，銃剣で突き刺したり，軍刀で切ったりして残忍な虐殺を行った。

その夜，日本の兵隊が帰った後，奇跡的に生き残った人たちが経験したことを記録に残した。日本兵隊は，村の人々を全部殺した後，世界各国の非難をさけるために，翌日の朝、死体を積み上げた後，ガソリンをかけて燃やした。そのあと、ダイナマイトで前の山を崩して死体を深く埋めた。

この記念館は，解放後、平頂山村殉難同胞遺骨記念館にし，若者たちを教育するために、1969

年の終わり、虐殺現場から遺骨を発掘して建てた。1972年のことである。平頂山村の子どもたちが食べながら持ってきた月餅などがたくさん発掘された。

瀋陽市内に戻り、張作霖師府博物館を参観した。張作霖は東北地方（東北三省、すなわち、黒竜江省、吉林省、奉天省）の匪賊のボス。日本軍の策略により傀儡化され、最後は爆殺された。息子の張学良は蒋介石の部下だったが、父親が日本軍に殺されても文句を言わせてもらえなかった。蒋介石は張学良を「抵抗するな」といって抑えていた。

— ９、１８事変博物館 —

７月１３日（日）

東北戦争勃発の地、柳条溝、９・１８事変博物館を参観。満州事変勃発のきっかけとなった柳条湖事件（１９３１年）の現場近くには、旧日本軍の中国侵略の歴史を伝える「九・一八歴史博物館」が建てられている。旧日本軍による殺戮と中国抵抗戦線の模様につき長い時間をかけて説明を受ける。中国を侵略し、中国の方々に多大の迷惑をかけたことは事実であり、深く謝罪しなければならない。同博物館を去るとき出口の外にある大きな石壁に、江沢民氏の揮毫で「勿忘　“九・一八”」と銘打っていたのには驚愕した。やむを得ないかもしれないが、背筋に冷たいものを感じた。

１３時３０分、瀋陽発全日空９２６便にて帰国。成田着１７時３５分。

感想：

時間の割には欲張った日程であったが、「日中友好の原点」を探求し、友好交流を促進するために、密度の濃い意義ある旅であった。特に、方正県では、県人民政府代表の力強い歓迎の言葉を受け、当方の大類団長から、平素の日本人公墓維持管理に対する謝辞が述べられ、彼我の理解と友好の絆は一層深まったと考える。

撫順戦犯管理所における当時の周恩来総理に代表される中国側から受けた手厚い処遇は、いかなる理由があろうとも忘れることのできない事実である。

また、７３１部隊罪証陳列館、平頂山惨案遺址記念館、９．１８事変博物館などにみる数々の旧日本軍の罪状行為は同胞として見聞するに堪えない。深く謝罪しなければならない。それに引き換え、９・１８事変博物館の出口に掲げられた江沢民氏の「勿忘“９．１８”」（忘れるなかれ９．１８）という銘は中国側の歴史認識の頑なさを示し、肝に銘ずべきであるが、戦後６０年を経た今、両国の将来を見通したとき、雪解けムードの日中友好交流に逆行する怖れなしとしない。

＜ふじいまさよし、本会事務局＞

日本の「友好の原点を歩く」訪中団、ハルビン市及び方正県と友好交流

石 金楷

2008年7月9日、日本の「方正友好交流の会」事務局長・大類善啓氏を団長とする「友好の原点を歩く」訪中団一行１７名は、ハルビンに到着。ハルビン市日本残留孤児養父母連合会の熱烈な歓迎を受けて、空港の入り口前で記念写真を撮った。訪中団一行は午前中に日本を発って大連に到着し、その後乗り継いでハルビンに着いた。連合会秘書長の私と残留婦人二世の牛世光は、連合会代表として空港に出向き日本の友人たちを迎えた。

7月10日午前8時、訪中団は友好交流のために方正県へ。方正県の高速道路の出口まで方正県外事弁主任の王偉新、李宝元などの方々が出迎えた。時はすでに正午、訪中団は旅の疲れも見せず、県政府へ表敬訪問に行き、県政府正門前で記念撮影を行った。続いて一行は、方正県烈士霊園を参拝し、大類善啓氏は訪中団を代表して革命烈士記念碑に花輪を献上した。訪中団全員は真剣に烈士霊園についての説明を聞き、碑文の前で写真を撮ったり、記録したりした。

＜碑文＞　抗日戦争、解放戦争、社会主義建設時期にあたって、祖国の独立、民族の解放、人民の幸福、国家を強大にするために、烈士たちは方正地区で次々と突進し、勇敢な闘争と崇高な精神が日月の光を奪い、偉大な功績が山川とともに残り、威風堂々とした心意気が千秋まで輝きを失わず、高く大きな徳行が万世まで伝えられる。我が方正人民は烈士の遺志を継承し、水を汲んで源流を偲び、革命精神を磨き、壮麗な山河を奮起建設し、碑誌を建てたことは、億万年も忘れないでおこう。

革命烈士永遠に不朽なれ　　方正県人民政府一九八七年八月一日

烈士霊園を出て日本の友人たちは、車で方正県の中日友好園林に着き、日本人霊園及び中国養父母霊園を参拝し、悲愴かつ鄭重な表情で花輪と花束を献上。深く黙祷し、哀悼の意を表した。同行の日本の僧侶は合掌して、長時間読経し、亡霊の安息、養父母功徳の永存、中日の永久友好、世界の永遠平和を祈念し続け、園林の中に存在する日本人公墓と養父母公墓に関して下記のように説明を受けた。

方正地区の日本人公墓は、1963年に周恩来総理の許可の下で建設され、中に５千体の日本開拓民の遺体が埋葬されている。麻山地区の日本人公墓は、1984年10月鶏西市からここへ移葬された。墓には500余りの麻山地区開拓団の女性と子供たちの遺骨が葬られている。中国養父母公墓は、1995年8月、1974年に方正県から日本へ定住した日本残留孤児遠藤勇氏の寄付により建てられ、養父母公墓入口の両側に“養育之恩、永世不忘”と大きく刻まれている。

中日友好園林を出た時にはすでに午後１時になっていたが、食事を後回しにして、吉興村に行った。吉興村はかつて紅部村と呼ばれたことがあったが、この名前にされたのは何故か？　当時この村は日本開拓団の東北本部所在地だった。日本語発音のアクセントで中国語に翻訳すると、本部が紅部になり、村の名前も紅部村になった。吉興村には所帯数９４１、村民数３２０６人あり、メイン道路は細黄砂が敷かれ、両側に赤煉瓦の平屋が並ん

で、わずかながら粗末な土作りの藁ぶき屋根が見える。各家は大小さまざまな、長さの違う枝と板で遮断されている。藁ぶき屋根の中に当時日本開拓団員が住んだものがまだ残っていると聞いたが、６０年の歳月による風化、及びその後の住民による修繕で、藁ぶき屋根の原貌も大きく変わって、かすかにまだ当時の日本式藁ぶきの跡が見える。村民たちは訪問者を見て、あちこちから集まって来た。日本の友人たちは村民たちと記念写真を撮り始めた。

吉興村から出てから急いで食事をして、訪中団一行は伊漢通埠頭を訪ねた。当時の日本開拓民たちの多くは、船で松花江に沿って方正に辿り着いた。日本の敗戦後に、わずかな日本人はここから船でハルビン市へ逃げ出したが、その後すぐ松花江をソ連赤軍に封鎖され、逃げられない人たちは方正県の砲台山の中に隠れた。一行は滔々と流れている川を眺めながら、両岸に停泊している小船が目にとまり、昔を偲んで、感無量の様子だった。

午後４時、訪中団はハルビンへの帰途に着いた。途中で東京から来られた阿久津国秀さんは感想を語った。阿久津さんは幼少年時代を方正県で過ごされたが、数十年が過ぎ、方正県で起こった変化があまり大きくて、自分の故居はどうしても見つけることができなかった。ただここで中国人が建ててくれた日本人公墓を見られ、特殊な中日友好意義を持つ中日友好園林を見られ、非常に感動し、「今回の旅に参加した甲斐があった。日本に帰ったら、見聞したことを友人たちに紹介し、もっと多くの日本人に方正のこと、中日友好園林のことを知ってもらいたい」と語った。

７月１１日午前、訪中団一行はハルビン７３１細菌部隊の遺跡を訪ね、日本語解説員の説明を聞きながら、各展示室を１個ずつ見て回り、真剣に解説を聞いた。細かく記録を取っている方も何人かいた。訪中団の方々にはここで、合計３０００余りの人間が残忍な生体解剖と各種試験の対象として殺害されたことを知らされた時に、多くの方は悔恨の涙を流した。一部の遭難者の名前が刻まれている長い廊下に辿り着いた時、時間が止まったように、皆の足が重くなり、腰を曲げて、深々と遭難者に祈りを捧げた。外に出て、遺跡の広場に来て、近くにある、当時動力班が残したコンクリート残壁と煙突の残骸が青い空と白い雲の背景に映されて、目を刺すように痛々しく、当時のすべてをもの語っているように見えた。

７３１遺跡を出て、暫く人々は深い思索の中に浸かっていた。私は大類善啓氏に何回も感想を聞きたいと思ったが、彼の深刻な目付きと、先ほど買ったばかりの２冊の７３１部隊の暴行を暴露する書籍をしっかりと抱えられた姿を見て、彼の心は今苦痛に包まれていることが分かり、彼は必ず中日両国人民が永久友好を保ち、歴史の悲劇が決して繰り返されないようにと考えていると思った。

当日午後、日本の友人たちは瀋陽へ行くため、別れる時が迫ってきた。筆者は連合会の代表として、中日友好の促進のために努力している訪中団のすべての方々に感謝の意を表し、次の旅のご無事を祈った。そして、連合会から全員に、中日友好園林の記念冊子及び記念写真を差し上げた。

編集部注：

＜せききんかい氏は、ハルピン市日本残留孤児養父母連絡会秘書長。なお、ハルピン市養父母連絡会からは、当会に今までの活動に対して感謝状が贈られてきた＞

＊下記原稿は日中友好99人委員会から依頼された。同委員会は、日中友好と国交回復に尽力された周恩来の精神を次代に伝えるため、1998年12月東京で設立された。

日中友好99人委員会

周恩来に見る国際主義的精神

大類善啓（方正友好交流の会　事務局長）

都心の大きい書店に行けば、嫌中感情や反中感情を煽るような書名の本が、溢れるように平積みされている。中国では江沢民指導による「愛国教育」の影響もあり、「9・18を忘れるな」、といった9・18歴史博物館の展示構成に見られるように、反日感情を醸成する雰囲気がまだ残っている。そういう状況を見て思い起こすのは、瑞瑞しい国際主義的な友愛精神が躍動していた1940年代から50年代にかけての、中国共産党指導部の思想と行動であり、とりわけ周恩来の役割である。

もちろん周恩来にしても、鄧小平が周の文革時代の行動を弁護して、「心にもないことを言った」面がなかったわけではない。しかし、あの困難な中で、どれだけ多くの人たちの命を周恩来が救ったことか。その例をまた身近なところで知ることができた。

ハルビン市郊外の方正県に、開拓民たちを祀った日本人公墓がある。残留婦人の松田ちゑさんの思いから生まれ、周恩来総理の許可で1963年に建立されたが、松田さんは文革中にスパイ容疑で3年間獄中に閉じ込められた。最終的に容疑が晴れて無事釈放されたが、その裏にはやはり、周恩来総理が関っていた。それが明らかになったのは2006年、35年も経ってからのことである。今、東京に住む松田ちゑさんの長男である崔鳳義さんが、久しぶりに方正県に帰ったところ、退職した元・公安職員がその真相を明らかにしてくれた。

松田さんに対する判決は死刑だった。松田さんへの容疑は、日本人公墓建立に主導的な役割を果たしたことも大きかった。しかし判決は、松田さんが日本人故、国際刑事判決に関わるため中央の決定を待たなければならず、最終的にその書類は周恩来総理のもとに回された。

記憶力が抜群に良かった周恩来は、松田ちゑさんが、日本人公墓建立を願った婦人であることを、しっかりと覚えていたのである。周恩来は、松田さんに被せた罪名は何の根拠もないことを見てとり、直ちに「無罪、即時釈放」するよう指示した。その指示書は県政府に送付された。てっきり死刑を容認した書類だと思って開封した公安職員は、「無罪、即時釈放」の書面に驚いた。これは間違いではないかと、もう一度省政府に尋ねたところ、間違いはない。周総理の指示であることが再度確認され、1971年11月釈放されたのだった。

この7月、撫順戦犯管理所を初めて訪れた。収容された日本軍人たち969人は、陸軍の師団長クラスや「満州国」の高級官僚、二等兵たちだった。職員よりも食事などの待遇を良くし、バスケットボールや将棋をし、映画を見たり芝居などをして過ごした「獄中生活」は、鬼とも言われた傲岸不遜の日本軍人たちをして、初めて自己の罪業を反省する契機になった。

肉親を彼らに殺された看守や職員たちは、なぜそんなに彼らを優遇するのか、と中央に疑問を突きつけた。それに対して当時の中国共産党指導部は、「戦犯といえども人間である。人間である以上、その人格を尊重しなければいけない」との方針を伝えた。そして強制労働もなく、入浴も理髪も定期的に行われた。周恩来は、20年後を見ればわかるだろう、と語ったという。彼ら旧軍人は、6年後、起訴免除・即日釈放という決定を受けた。帰国後、その多くは日中友好運動に積極的に携わった。狭隘なナショナリズムがはびこる日中の動きを思うにつけ、新中国建国前後の中国指導者の精神と行動を改めてかみしめたい。

『満州開拓団・義勇隊関係史』編纂状況

高　橋　健　男

今、満州開拓団個々の詳細を知ろうとするときに第一に参照するのは、1966年に全国拓友協議会が編纂した『満洲開拓史』（1980年に復刊）であろう。満蒙同胞援護会編『満蒙終戦史』（河出書房新社、1962）が別の角度から開拓団や在満一般邦人の避難・引揚げを補完してくれる。基礎資料を参照したい向きには『満州移民関係資料集成』（不二出版、全40巻）、『海外引揚関係資料集成』（ゆまに書房、全33巻）、『満洲開拓叢書』（満洲移住協会、全10巻）、『満洲叢書』（図書刊行会、全7巻）などがある。

一方、概略にとどまらず開拓団個々の全貌を知るためには各送出県で何らかの形でまとめられた『○○県満州開拓史』や、各開拓団ならびに義勇隊開拓団が個別に編纂した『団史』に頼らざるを得ない。そこには団員個々の手記も多く掲載されている。さらには各個人がまとめた『手記』類が過去をよみがえらせてくれる。

「方正友好交流の会」が「敗戦時、各地のさまざまな開拓団から方正へ逃れた人たちの状況を、可能なところまで整理する」ためには、別稿のように偶然入手できる資料や思わぬ情報に接することもあるが、『満洲開拓史』とともに各県で編纂された書籍を参照して、方正に立ち寄った、通過した、滞在した可能性のある開拓団を洗い出すことができれば、『満洲開拓史』の記述をはるかに越える詳細な事実を掌握することができる。

こうは考えるものの47都道府県でどのような形でどのようなものがまとめられてきたかを知ることは容易ではない。それをつぶさに見ることはさらに困難である。

私は満州開拓団・満蒙開拓青少年義勇軍に関する調査研究を進める過程で、以下に掲げるほとんどの書物に接することができた（ただし、存在を知り得たが未発見のものもある）。これらは研究同志に役立つものであるし、「方正友好交流の会」の活動推進にも役立つものであると考えここに提供する。

以下、各県ごとに参照できる書籍を掲げるが、未発見の県は秋田、岩手、宮城、福島、栃木、千葉、神奈川、滋賀、兵庫、山口、香川、徳島、福岡、佐賀、大分、長崎の16県に上る。その意味ではまだまだ不完全な一覧である。あるいは新潟県のように、終戦後に関する記録はあるが開拓団入植から引揚までのものがない県もあり、それを加えれば未発見（あるいは未編纂）の県は更に多くなる。また、掲載書の中には当該県開拓団・義勇隊の全体を取り扱ってないものも含まれる。

記号について説明すると、◎印は該当県送出の開拓団全体を扱ったもの、あるいはそれに類するもの、○は終戦処理の関係のことが主であるが開拓民引揚者・各開拓団についても触れているもの、△は引揚者の戦後開拓入植を取り扱ったもので各開拓団の様子にも触れているものを示す。

全　国　◎満州開拓史復刊委員会編、『満州開拓史』、全国拓友協議会、1980
◎池田佑編、『大東亜戦史　満州編』（上・下）、富士書苑、1969
◎創価学会婦人平和委員会編、『あの星の下に1　引揚げ編』（平和への願いをこめて1)、第三文明社、1981
△戦後開拓史編纂委員会編、『戦後開拓史』（本編、資料編、完結編)、全国開拓農業協同組合連合会、1967－77
北海道　△北海道戦後開拓史編纂委員会編、『北海道戦後開拓史』（本編、資料編)、北海道庁、1973
青　森　△青森県農林部農地調整課編、『青森県戦後開拓史』、青森県、1976
山　形　◎山形県、『山形県史　本篇四　拓植編』、1971：297－836
◎満洲開拓親子地蔵尊奉賛会編、『私達の満洲開拓の歩み　満洲開拓親子地蔵尊』、同会、1982
◎創価学会青年部反戦出版委員会編、『凍てつく大地の彼方から－引揚げ、抑留体験の記録－』（戦争を知らない世代へII12　山形編)、第三文明社、1983
茨　城　◎内原訓練所史跡保存会事務局、『満洲開拓と青少年義勇軍』、同会、1998
◎創価学会青年部反戦出版委員会編、『開拓の美名の下で－満蒙開拓青少年義勇軍の記録－』(戦争を知らない世代へII17　茨城編)、第三文明社、1984
○茨城県民生部世話課編、『茨城県終戦処理史』、茨城県、1972
群　馬　◎森枝　収編、『群馬県海外引揚誌』、群馬県引揚者連合会、1966
埼　玉　◎埼玉県引揚者連合会編、『埼玉県引揚者の手記－“昭和史の鮮烈な断面”－』、同会、1974
◎埼玉県編、『曠野の夕陽－埼玉県満蒙開拓青少年義勇軍の悲劇－』（新編埼玉県史別冊)、1984
東　京　◎開拓民援護世話課編、「東京都送出単独開拓団資料」（第1集～第4集)、東京都、1958
山　梨　◎小林春雄、『山梨満州開拓小史』、クラッセ、2006
◎満蒙同胞救護会山梨県支部編、『黄土に捧げる』（未発見）
静　岡　◎静岡県民生部援護課編、『静岡県送出満州開拓民の概要』、静岡県、1955
◎静岡県拓魂碑建立委員会編、『拓魂』、同委員会、1975
◎『満州の土に生きて』編集委員会編、『満州の土に生きて』、同刊行会、2007
◎創価学会青年部反戦出版委員会編、『おくにのためにおくられて－子供達の見た聖戦②－』(戦争を知らない世代へII24　静岡編)、第三文明社、1985
長　野　◎長野県開拓自興会、『長野県満州開拓史』（総編、各団編、名簿編)、同会、同刊行会、1984
◎創価学会婦人平和委員会編、『永遠の大地もとめて－満蒙開拓（長野）編－』（平和への願いをこめて16)、第三文明社、1985
△長野県開拓二十年史編集委員会編、『開拓二十年史』、同委員会、1966
新　潟　○新潟県民生部援護課編、『新潟県終戦処理の記録』、新潟県、1972
△新潟県編、『戦後開拓のあゆみ』、新潟県、1970
富　山　◎富山県満蒙開拓史編集委員会編、『富山県満蒙開拓史』、富山県満蒙開拓自興会、1995
◎北日本新聞社編、『夕日の墓標－富山県満蒙開拓団の記録－』、北日本新聞社、1980

○富山県厚生部社会福祉課編、『富山県終戦処理史』、富山県、1975

石　川　◎藤田繁編、『石川県満蒙開拓史』、石川県満蒙開拓者奉賛会、1982

◎藤田繁編、『草の碑－満蒙開拓団　棄てられた民の記録－』、能登印刷、1989

◎創価学会青年部反戦出版委員会編、『死線からの逃避行－シベリア・中国大陸引揚げ記録－』（戦争を知らない世代へⅡ1　石川編）、第三文明社、1981

福　井　◎福井県満洲開拓引揚者連合会編、『福井県満洲開拓史』、同連合会、1981

愛　知　◎『大陸に賭けた青春－愛知県送出義勇軍小史－』、全国拓友協議会愛知支部、1976

△愛知県開拓史研究会編、『愛知県開拓史　戦後開拓資料編』、愛知県、1981

岐　阜　◎岐阜県開拓自興会編、『岐阜県満洲開拓史』、同会、1977

三　重　◎三重県満洲開拓史編集委員会編、『三重県満洲開拓史』、同委員会、1996

京　都　◎二松啓紀、『裂かれた大地－京都満洲開拓民・記録なき歴史－』、京都新聞出版センター、2005

◎創価学会青年部反戦出版委員会編、『涙にうるむ舞鶴港』（戦争を知らない世代へ 54　京都編）、第三文明社、1979

大　阪　◎「満州開拓大阪の歴史」編纂委員会編、『満州開拓大阪の歴史』、大阪自興会、1995

◎15年戦争研究会調査・編集、『大阪府の満州移民』、大阪府平和祈念資料室、1989

奈　良　◎奈良県拓友会編、『奈良県満洲開拓史』、徳田源治、1996

和歌山　◎北川　哲、『追憶の満洲－和歌山県送出義勇隊史－』、満州会、1968

◎創価学会青年部反戦出版委員会編、『戦場に軋む若者の心－満蒙開拓青少年義勇軍の記録－』（戦争を知らない世代へ52　和歌山編）、第三文明社、1985

鳥　取　△戦後開拓史編纂委員会編、『鳥取県戦後開拓史』、鳥取県開拓生産農業協同組合連合会、1970

岡　山　◎小谷鉄雄編、『満州開拓回顧誌』、小谷鉄雄、1991

◎山陽新聞社編、『祖国』、山陽新聞社、1990

△岡山県戦後開拓史編纂委員会編、『岡山県戦後開拓史』、岡山県開拓協会、1978

島　根　◎島根県満州開拓史編纂委員会、『島根県満州開拓史』、同委員会、1991

◎島根県拓友会連合会編、『島根県送出満蒙開拓青少年義勇軍の概況とその終焉』（未発見）

◎創価学会青年部反戦出版委員会編、『慟哭の大地をあとにして－抑留、義勇軍、大陸からの引揚げ記録－』（戦争を知らない世代へⅡ15　島根編）、第三文明社、1984

広　島　◎広島県民の中国東北地区開拓史編纂委員会編、『広島県満洲開拓史』（上・下）、同委員会、1989

△広島県戦後開拓史編纂委員会編、『広島県戦後開拓史』、広島県開拓農業協同組合、1986

高　知　◎後藤蔵人、『満州－修羅の群れ　満蒙開拓団難民の記録』、太平出版社、1973

愛　媛　◎三根生幸他、『赤い夕陽－愛媛の元満州開拓団記録－』、愛媛新聞社、1973

熊　本　◎佐藤紳二編著、『曠野の栄光と挫折－熊本県満蒙開拓団の全記録－』、熊本日日新聞社、1980

◎熊本大学文学部社会学研究室、『満州開拓団はいま』（1～3）、同研究室、1987、89、91

宮　崎　◎△創価学会青年部反戦出版委員会編、『大地に爪する想い－戦中戦後の開拓の記録－』（戦争を知らない世代へⅡ5　宮崎編）、第三文明社、1982

鹿児島　◎南日本新聞社編、『与論島移住史－ユンヌの砂－』、南方新社、2005

△南日本新聞社編、『鹿児島県戦後開拓史－荒野に生きた先人たち－』、南方新社、1999

沖　縄　◎沖縄女性史を考える会、『沖縄県の「満州開拓民」の研究　その入植まで』、同会、1993

＜情報交換等のお願い＞

1　各県『開拓史』編纂情報をお寄せください。

前述のように 16 県については当該県で何らかの形の『開拓史』の存在有無が不詳である。一覧に掲げた各県での編纂状況を見ると、その編纂主体が当該県、県開拓自興会、地方新聞社、あるいは有志団体・個人によるものとまちまちである。

いずれの形でもよいが、一覧以外の『開拓史』編纂情報をお持ちの方はその情報をお寄せ願いたい。

2　各県送出開拓団で方正・伊漢通を経由、一時滞在、あるいはその地で越冬した開拓団に関する情報をお持ちの方はその情報をお寄せ願いたい。

なお、『満洲開拓史』が掲げる 20 数団、30 数団の過半数は、その内容がほぼ判明している。『満洲開拓史』が掲げていない開拓団に関する情報があったらぜひお寄せ願いたい。

3　別稿で「開拓団実態調査表」について触れた。『満洲開拓史』に掲載された方正に集結した開拓団の「開拓団実態調査表」をお持ちの方がおられたら、コピーを一部譲っていただきたい。「開拓団実態調査表」により当該開拓団の人員数、方正滞在・越冬人数などが判明するものと思われる。

以上、満州開拓団関係書籍に関する情報を提供し、更なる情報提供をお願い申し上げます。情報提供先は高橋健男（TEL/FAX0258－66－4790）までお願いいたします。

満州開拓団・満蒙開拓青少年義勇軍研究者としては、今後もいくつかの視点からのまとめを試み、後世に歴史事実を伝えていきたいと考えている。その間、方正に集結した開拓団等に関して何らかの資料・情報を得た場合には、本会誌にて報告し会員諸氏に提供していきたいと考えている。

＜たかはしたけお、中学校長を定年退職後、満蒙開拓という国策と、それに加わった人たちの軌跡を精力的に追及している。本会会員＞

方正県等からの「中国帰国者」子どもたちへの日本語支援

—中国帰国子女教育のはじまり—

山田 陽子

はじめに

長野県下伊那郡に泰阜村（やすおかむら）という、人口わずか1960人ほど（2008年８月現在）の過疎村がある。この泰阜村は「満洲移民の村」（小林、1977）として知られている。

1972年の日中国交正常化以降、泰阜村に帰ってきた中国残留孤児・残留婦人等の多数は、中国黒龍江省ハルビン市方正県からの帰国である。村は1930年代後半に旧満州へ開拓団として全村人口のおよそ３分の１近くの村民（約1,200人）を送出していた。

終戦直前の1945年８月、ソ連の侵攻により開拓団員の逃避行が始まった。その途中、飢えや病気、襲撃などに見舞われ、めざす方正の町へようやくたどり着いたとき（９月３日）には多数の仲間を失っていた。悲惨極まりない逃避行から収容所での生活を経て、かろうじて生き延びた人たちは、方正県の農家に入り、何十年もの長い間、中国に残留せざるを得なかった。

日中国交正常化を契機として中国残留孤児・残留婦人等に帰国の道が開かれ、泰阜村には、方正県等から子どもを伴い家族連れで帰国する人たちが本格化した。このような中国帰国者が村に帰って、最も困ったのが「ことば」の問題であり、真っ先に心配したのが子どもの教育のことであった。そこで、村は急遽、帰国者の家族、とりわけ子どもたちに日本語教育を施す必要に迫られたのである。

１．中国帰国子女

わが国においては戦後長い間、異文化をもつ人たちへの日本語教育に関して、その施策が大々的に論じられることはなかったが、外国人の定住化が進行したことにより、群馬県大泉町や岐阜県美濃加茂市などの集住都市をはじめ様々な外国人コミュニティを抱える地域で、たとえば外国人集住都市会議などを中心に議論されている。

1972年の日中国交正常化以降、急増した中国帰国者も異文化をもつ人たちである。呼び寄せ家族を含むと日本に10万人は居住しているといわれる。今日においては、急増期は過ぎたものの中国帰国者の定着地の都市で、あるいは地域レベルでの受け入れ策の一貫として、国や県の研修センターをはじめ、NPO、地域ボランティアによ

る日本語支援がおこなわれている。義務教育就学年齢の子どもたちには、学校教育の中で日本語支援が行なわれてきた。

中国帰国者が連れてきた子どもは、一般に「中国帰国子女」と呼ばれる。中国帰国子女という呼称は、「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後の自立の支援に関する法律」第2条第1項に規定する「中国残留邦人等」のうち、「日本に帰国した者（帰国の時期は問わない）の児童生徒」★1）を指す。

こうした中国帰国子女に対する日本語教育については、子女を受け入れた学校が報告書や提言としてまとめて保存し、いわゆる公的な場で議論されることがあまりなかった（山田、2008c）。しかしながら、中国帰国者の存在そのものが一般の国民に認識すらされていない1972年に、中国帰国子女とその家族への日本語教育が地域社会で既に始まっていたのである。

2．村の日本語支援

泰阜村は、最初の帰国子女受け入れから半年後の1973年に中国帰国子女のための特別学級を開設した。中国語を話す教師を配置し、小・中学校が連携して日本語教育を行なうことになった。本稿では、国に先駆けて中国帰国子女教育を行なった村の施策を項目別に紹介したい。

（1）普通学級併用方式と特別学級教師の配置

特別学級では、日本語を中核として子女の学習ニーズに合わせた教育が実践されたが、それは、子女の学力を勘案しながら普通学級（原学級・母学級）に入級させ、特別学級と併用することで学習効果が高まるように工夫されていたのである。

普通学級で一般児童生徒とともに学ぶことにより、子女の経験は豊かさを増し、社会性やコミュニケーション能力が身につくという効果が期待できる。さらに、特別学級のような少人数学級では得られない人間関係の広がりや学習意欲の向上にもつながる。

その他の特色としては、日本語と中国語の両言語が堪能な教師を専任として特別学級に配置したことである。この教師は、旧満洲において教職経験があったため、子女に対する知識や理解が深かった。それで、子女が信頼して心情や悩みを素直に吐露するようになり、安心して学校生活を送ることができた。

（2）引揚者による言語サポート

先に中国から引き揚げてきた日中両言語に堪能な村民を通訳として委嘱し、中国帰国者が医療機関で受診する場合や福祉事務所が家庭訪問により助言、指導および援助する場合に同行して通訳を行うことで意志の疎通をはかることができるようになった。このサポートによって、帰国者が病状や悩みを詳しく伝えることができるとともに、村民と平等の情報が得られ、定住生活の大きな手助けとなった。引揚者は、同じ戦後体験を有する先輩として、中国帰国者の日本語指導と生活指導に尽力

した。

（３）社会学級の開設

学校教育を受ける子どもたちは少しずつ日本語が話せるようになったが、親の方は全く日本語能力の向上がはかられず、家庭では家族全員が中国語の生活を送っていた。そのため、子どもだけではなく、親も含めた家族全員の指導が必要であることに学校教師は気づいた。せっかく学校で覚えた日本語を、家族間で全く使用せずにいては、学習効果が上がらない。そのため家族ぐるみの教育を目的に社会学級が中学校に開設され、週２日２時間単位で「生活のための日本語」を中心に指導がおこなわれるようになった。

社会学級では、帰国子女の家族のために、特別学級担当教師が自宅から丼、茶碗、皿、急須、湯飲み茶碗、椀など食器一式を持ち込み、食器棚に並べ、それを教材にして生活日本語を一つずつ丁寧に繰り返し指導した。現物を見せながら何度も練習することによって、子女家族の日本語への理解が早まる効果が現れた。

動詞と動作が、あるいは名詞と食器の名前が一体となって頭に入り、日本語習得の促進に効果的であった。これを機に、実物教材の使用が帰国子女の家族には効力を発揮することが認められ、日本語指導に活用されるようになった。

社会学級における家族全員の日本語教育により、家庭での親子間に生じるコミュニケーションギャップという問題も防ぐことができ、子女家族は日本での暮らしに自信がもてるようになった。

（４）一般児童生徒への教育と人的リソ―スとしての子女

中国帰国子女教育には、帰国子女への教育という面と同時に、一般児童生徒に対して子女への理解を育むという両面性がある。

教師は一般児童生徒に中国帰国子女の歴史的背景を詳細に教えた。すると一般児童生徒は、帰国子女が生まれる背景となった日中の歴史を知ることで、帰国子女の生育環境への理解が徐々に深まるとともに母語・母文化尊重の大切さにも気づいた。

中国語と中国文化を背景にした子女と一般児童生徒がともに学び、ともに高めあう、それが学習意欲の向上につながっていく。学校は、帰国子女を受け入れたことで、他の子どもたちの気持ちに配慮し、子女と一般児童生徒の両者をサポートすることに努力した。

中国帰国子女が日本社会に適応し変容していくだけではなく、一般児童生徒も影響を受け、少なからず変容する。ここに一般児童生徒、すなわち異文化をもつ人を受け入れた「日本人側」の理解の重要性が示される。

中国帰国子女は、次第に自己の生い立ちに自信をもって中国での生活を語り、中国語や中国文化を一般児童生徒に教えるようになるなど、学校のシステムに慣れるに従い、人的リソースとしてなくてはならない存在になっていく。すなわち一般児

童生徒が、帰国子女に学ぶ機会が増えていったのである。子女のもつ個性や特質を教師が引き出したことで、将来の日中の架け橋となる人間の育成にもつながった。子女の母語・母文化を認めたことで、一般児童生徒が国際感覚を身につけ、これにより子女も自信をもつことができた。

このようにして帰国子女を受け入れたことにより、子女と一般児童生徒との相互啓発が顕著に認められたのである。「教室の国際化」により、児童生徒が自然と互いの文化を学び、取り入れることができた。一方、子女はただ支援されているだけではなく、中国での生活を披露し、一般児童生徒に中国への理解を促進する役割を積極的に果たしている。これにより一般児童生徒は日中両言語や文化に関心を持つようになり、自ずと帰国子女への理解も深まるという相乗効果を生み出した。日本語だけであった教室に中国語という異なる言語が流入したことにより、「教室の国際化」のみならず、多様な言語と文化がもたらす「教室の豊饒化」も生まれたのである（山田、2008ｃ）。

ここで学んだ中国帰国子女が外国人への支援の担い手として成長を遂げるなら、日本語教育の人的リソースとしても大きく貢献するであろう。たとえば、「生活者としての外国人」のための日本語教育事業の対象活動である「日本語能力を有する外国人を対象とした日本語指導者養成」（文化庁）などが、まさにそれである。

最後に―終わりなき交流を目指して―

民族的又は種族的、宗教的及び言語的少数者に属する者の権利に関する宣言第 2 条（マイノリティ権利宣言、1992 年 12 月 18 日、第 47 回国連総会採択）によれば、民族的又は種族的、宗教的及び言語的少数者に属する者は、私的に及び公に、自由にかついかなる形態の差別もなしに、自己の文化を享有し、自己の宗教を信仰しかつ実践し、及び自己の言語を使用する権利を有することが確認されている。学校教師が中国帰国子女の文化を排除せず、また中国語の保持の大切さを認めたことで相互理解や信頼感がより深まっていった。それほど母文化や母語使用の権利は定住のための重要なファクターである。今日では、浜松市の「外国人児童学習サポート教室」のように、日本語とポルトガル語のバイリンガル教育によって基本教科（国語、算数、理科、社会）を中心とした学習支援が行なわれるなど自治体が母語保持教育に理解を示すところも出てきた（河原・野山（2007）23)。

泰阜村の中学校では、中国から一時的に帰国した人たち（一時帰国者）と教師・生徒の交流会を開いた。生徒も教師も全員が中国語で自己紹介をおこなうと、一時帰国者から大きな拍手がおき、心が通じ合った気がしたと村の生徒は感想を述べている（泰阜南中学校、1993、176)。

村では、普通学級での中国帰国子女と一般児童生徒、社会学級での中国帰国子女家族と村民との交流を中心として、日本語教育をめぐる多様な施策が案出され実行に移された。いわば、日本語教育を「ことば」だけの教育として実践したのではな

く、生活領域に拡大し、さらに生活する人間同士の「交流教育」★2）へと発展させた。日本語教育が、生活者としての中国帰国子女とその家族にとり、生活範囲の拡大に直結することがきわめて重要となる。その方向に向かって積極的に支援していくのが、日本社会において私たちに最も期待される役割のひとつではないだろうか。

泰阜村と中国黒龍江省ハルビン市方正県との交流関係は、歴史を忘れないためにも重要である。方正県には泰阜村出身者が271名も祭られている「日本人公墓」がある。1997年9月、泰阜村は多数の分村民が世話になった方正県と友好提携の覚書を交わした。学校レベルの国際交流も、泰阜中学校と方正県第三中学校との生徒研修・交歓事業という形で行われている。このような交流を一過性のものとしてではなく、「終わりなき交流」に発展させていくことが中国帰国子女教育を先駆け、生活者としての人間同士の交流教育へと発展させた村の次なる目標となろう。

表：中国帰国子女教育の始まり

1972年	泰阜村に中国帰国者家族が帰る
1973年	小学校に特別学級開設される
1974年	中学校に特別学級開設される
1975年	社会学級が開設される（中国帰国子女の家族全員を対象とする）
1976年	引揚者社会学級打ち合わせ会が開かれる（指導内容の報告と反省会）

写真：方正日本人公墓

写真1：入り口

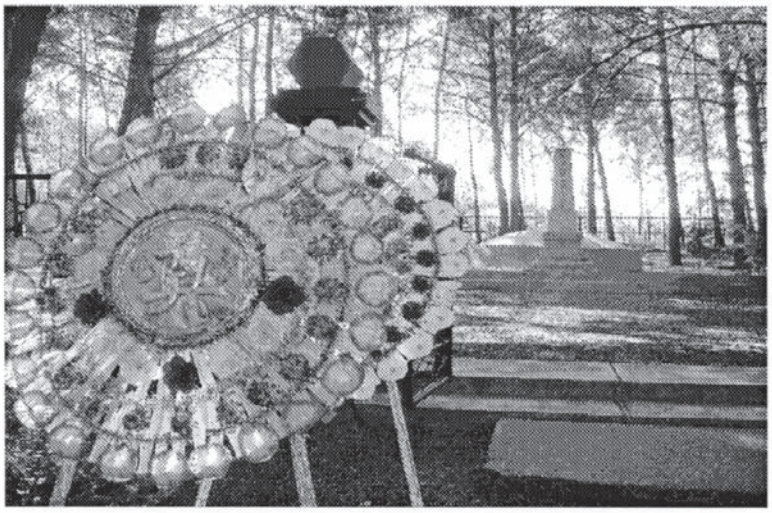


写真２：方正日本人公墓

写真３：方正日本人公墓記念館内

（写真３枚は、いずれも「方正日本人公墓」を訪れた 2007 年９月に山田陽子撮影）

注

１．小学生を「中国帰国児童」、中学生・高校生を「帰国生徒」とも呼ぶ。「中国帰国子女」の「子女」は、「子ども」の意味で使用し、決して差別的なことばの使用法ではない。男女両方を指す。本稿では、「中国帰国子女」を使用するが、略して「帰国子女」および「子女」とも記述する。外国に暮らしていた日本人海外駐在員の子どもは「海外帰国子女」と一般に呼ばれ、中国帰国子女とは区別される。

２．「交流教育」という障がい児教育の分野で使われる概念がある。障がいのある児童生徒に対して、障がいのない人たちとの様々な社会体験をとおして、豊かな人間形成をはかる教育活動をいう。本稿で述べる「交流教育」は、「広範な社会における人間関係をとらえ、生活者としての人間と人間の交わりを重視し、相互に深く洞察し、ともに学びあう教育活動としての日本語教育」を意味する。

参考文献

河原俊昭・野山広編著（2007）『外国人住民への言語サービス』明石書店

小林弘二（1977）『満州移民の村　信州泰阜村の昭和史』筑摩書房

編集委員会編（2007）『満洲泰阜分村―七〇年の歴史と記憶』不二出版

泰阜南中学校（1993）『閉校記念誌泰阜南中学校四十六年の歴史』同中学校

山田陽子（2008a）「分断される『中国帰国者』と連帯性の希薄化―地域住民への聞き取り調査を通して―」名古屋多文化共生研究会『多文化共生研究年報』105-122、第５号

山田陽子（2008b）「村ぐるみの日本語教育―1970-80 年代の中国帰国子女への地域支援として―」日本語教育学会編『2008 年春季大会予稿集』202-203、日本語教育学会

山田陽子（2008c）「中国帰国子女と家族への日本語教育―1970 年代に開始した村―」名古屋市立大学大学院『人間文化研究』141-153、NO. 9

山田陽子（2007a）「『中国帰国者』の定着自立援護―生活支援と子女教育」編集委員会編『満洲泰阜分村―七〇年の歴史と記憶』697-736、不二出版

山田陽子（2007b）『身元引受人をめぐる「中国帰国者」の日本社会への適応』名古屋市立大学大学院人間文化研究科修士学位論文（未公刊）

山田陽子（2007c）「『中国帰国者』二世の適応に関する一考察―二世女性の語りから―」村井忠政編著『トランスナショナル・アイデンティティと多文化共生―グローバル時代の日系人』68-91、明石書店

山田陽子（2007d）「『中国帰国者』と身元引受人制度―中国残留孤児の日本への帰国をめぐって―」名古屋市立大学大学院『人間文化研究』99-111、NO. 8

山田陽子（2006a）「中国帰国者の日本語習得と雇用―国家賠償請求訴訟における帰国者の陳述および身元引受人の語りから―」名古屋市立大学大学院『人間文化研究』83-100、NO. 5

山田陽子（2006b）「『生き残りの兵士となった』身元引受人の語り―戦争体験と「中国帰国者」への奉仕活動を中心に―」第４回日本オーラル・ヒストリー学会、年次大会発表資料

＜やまだようこ、短大特別講師・生涯学習講座講師・名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士後期課程＞

方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

――「方正友好交流の会」へのお誘い――

中国ハルピン市郊外の方正県に、日本人公墓が建立されているのをご存知でしょうか。1945年の敗戦のさなか、祖国を目指して逃げ惑った旧満洲の開拓団の人々は、難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々がこの方正の地で息絶えました。それから数年、累々たる白骨の山を見た残留婦人が骨を拾い集めました。そして力を貸した中国人たちが集めた遺骨はおよそ五千体ともいわれています。

その人たちを祀るお墓が「方正地区日本人公墓」です。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれ、公墓が建立されたのです。多くの日本人開拓団員等が犠牲となった旧満洲で建立されている公墓はこの方正にあるものだけです。(黒龍江省麻山地区でソ連軍の挟撃に遭い、四百数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も１９８４年に建立され、この方正の地にあります)

この公墓の存在は、残念ながら一部の関係者にしか知られていませんでした。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を多くの人々に知ってもらおう、そして維持管理の面でも日本が協力して活動していこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は１９９３年に設立され、２００５年６月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

＊年会費　：　個人会員　一口　1,０００円　　団体・法人会員　一口　１０,０００円

(口数は最低一口、上限はありません)

方正友好交流の会　事務局（大類善啓）

101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６　（社）日中科学技術文化センター内

電話　03―3295―0411　FAX 03―3295－0400　　E-mail：ohrui@jcst.or.jp

郵便振替口座番号　00130―5―426643　　加入者名　方正友好交流の会

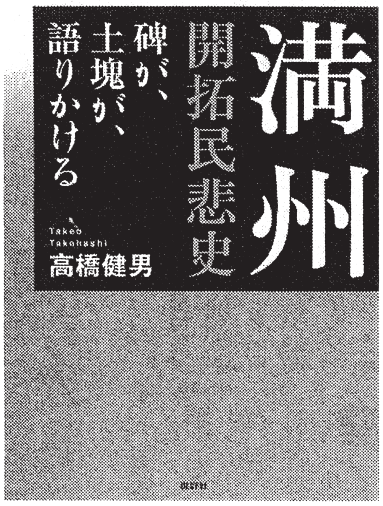
HP アドレス　：　h ttp:/www.houmasa.com/

読　書

にいがたの一冊

満州―開拓民悲史

高橋　健男著



聞き取り、現地訪問で臨場感

前作の大著『赤い夕陽の満州にて―「昭和」への旅』（二〇〇六年）を総論とすれば、今度の新作はいわば各論である。国策によって旧満州に入植した開拓団二十七万人が敗戦時、ソ連軍の侵攻などで惨劇、餓死、凍死、避難逃亡に追い詰められた歴史については、これまでもおびただしい数の証言や記録が公刊されてきた。しかし本書が読者をとらえて放さないのは、国内と中国で個々の関係者を訪ねて取材した、その生き生きとした臨場感だ。

ある老夫婦は語りつくせぬ体験を伝えながら、いつか夕刻になると酒を勧めながら語り続け、しまいには「泊まっていけや」となった。その一方である老人は、取材の申し出を固辞し続けた。ある老婦人は生前ついに身内にも詳しい過去を語ることなく世を去り、あの侵略の悲劇を知らない若い孫娘は、生前祖母の口からじかに開拓団の話を聞きたかったと悔やむ。この話は老人たちが仮に饒舌（じょうぜつ）に過去を語るよりも、さらに彼らの心に残った傷の深さを感じさせる。

報告のリアリティーをさらに高めているのがおびただしい現場写真だ。数だけではない。例えば最近その存在がようやく紹介されるようになった中国で唯一、建立を許された黒龍江省方正県の日本人公墓は、これまでほとんどの写真が墓碑銘を主とするものだったが、本書はその裏にある中国固有の土まんじゅうを象（かたど）った納骨のための構築物にもレンズを向けている。

開拓団の遭難史でもその惨劇性が際立つ「佐渡開拓団跡事件」はもともとここに入植した佐渡開拓団が避難した後、さらに遅れて東のロシアとの国境近くから到着した各開拓団が遭遇した悲劇だが、その一つに新潟県送出第七次の清和開拓団もいた。著者は昨年夏、新潟の訪問団としてこの地を訪れ、十人の同行者とともに慰霊祭を営んだ。事件の詳細と慰霊訪問の報告も新潟の関係者には貴重な記録となっている。

著者は二年前まで中学校校長として教育界の第一線で活躍してこられた方である。この間、上京の折などに国会図書館で資料を探し続ける一方、中国で現地調査、聞き取りを五回という超人パワーで前著とこの本をまとめられた。あの戦争が終わった時、まだ母親のおなかにもいなかった著者の力作に接して、「918」（中国で言う満州事変）の年に生まれた私は新しい力を贈られた思いだ。

奥村　正雄（方正友好協会顧問）

■批評社（三一五〇円）

書籍案内

方正友好交流の会が編集した本と会員の関係著書をご紹介します。

＊　『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』

定価 1500 円

この本には、日本人公墓の建立の苅軌跡や由来を王鳳山と奥村が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み全身全霊で稲作指導に捧げ「日中友好水稲王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り、帰国後日中友好運動に携わり、麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類が執筆、また方正友好交流の会を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進行した記録などが収録されている。（当会が編集、事務局に残部あります）

＊　『天を恨み　地を呪いました　－中国方正の日本人公墓を守った人々－』

奥村正雄　編著　定価 700 円

この本に書かれた文章は、上記の『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」―ハルビン市方正県物語』にも収録されていますが、日本人公墓建立の契機を作った残留婦人・松田ちゑさんの息子さんの貴重な体験記も入っています。この本に関しては、直接、奥村に申し込んでください。電話　043－272－9995　FAX　043－272－0214

＊　『二つの祖国　ある中国残留孤児の証言』　**北澤博史　著**

定価 1500 円（税別）

製作・発行　夢工房

著者の北澤さんは 1935 年長野県赤穂村で生まれ、1940 年両親に連れられ満洲へ。敗戦とともに孤児となる。この本は北澤さんの自伝的な作品で、方正県での当時の様胡や難民となった苛酷な体験を絵と文で描写されています。収録された絵がなんともいえず当時の雰囲気を醸し出しています。事務局に申し込んでください。

＊　『赤い夕陽の満州にて　「昭和」への旅』　**高橋健男　著**

定価 3400 円（税別）

著者は 1946 年、新潟県見附市生まれ。長年中学の教員として過ごし、校長を経て定年退職。近年アジアに目を向け、歴史や文化を研究。本書は「昭和は終わっていない」という問題意識の下、満蒙開拓という国策とそれに加わった人たちの軌跡を追求した大著です。本書をご希望の方は直接、刊行先の新風社販売部に申し込んでください。電話 03-3746-4648 FAX 03-5414-3494 です。

ありがとうございました

会報６号発行後、カンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。（敬称略、受け付けた順に記載しました。０８年１２月１０日現在）

山本義輝　瀧亀久男　黒岩満喜　福久かずえ　穂苅甲子男　宮田一郎　篠田欽治　原田清治　玉山昌顕　山内良子　牧野八郎　永原今朝男　望月迪洋　清水薫　矢島敬二　田中久子　樗沢仁　鈴木敏夫、山口和子　武田正志　山下くに　延浄寺網代正孝　師岡武男　北澤博史　石原健一　阿久津国秀　石橋実　風間成孔　小林忠作　杉田春恵　久保祐雄　馬場弘子　高橋かよ子　栗原貞子　山田陽子　中国帰国者支援交流センター　竹中一雄、小畑正子　中村静枝　野田良雄　高良真木　小倉光雄　川口憲、青柳幸司　芹沢昇雄　石原政子　村杉正洋　高橋健男　森川忍　河戸道子　永瀬明子　萩原武太郎　鳩貝清太郎　遠藤勇　神田幸子　（社）日中協会・白西紳一郎　高野茂　福井以津子　矢野光雄　名取敬和　石田和久　小関光二　ロイヤル真珠㈱・加藤幸治　鈴木幸子　平井宥慶　羽賀美代子　新谷陽子　吉田敬子　吉岡稔　馬場永子　鵜沢弘　高木誠一郎　宮下春男　長谷部照夫　阪田健夫　木下貴雄　水野眞行　江見迪子　江見祥典　田宮昌子　石井愛輝

＜編集後記＞

羽田澄子監督の記録映画『嗚呼　満蒙開拓団』が完成した。来年09年の６月13日（土）から７月末まで、岩波ホール（千代田区神保町）で一般公開されることが決まった。ぜひ、多くの人たちに見てもらい、国策で入り込んだ開拓民たちが、いかに悲惨な状況に追いやられたか、日本という国家が、多くの遺棄された人たちにいかに無情であったか、を知ってほしい。自衛隊のトップに位置する男が、先の戦争を「アジアを解放する戦争だった」というような歴史認識しか持てないという実情、その発言者が戦後世代ということにも驚くが、同時にそれを支持するような状況があることに、いったい戦後教育とは何だったのかと思う。ともかく、そのような「空気」を醸成する状況をいかに打破していくか。戦争体験、旧満州での体験を伝えることの重要性を思う。

当会の前身を支えた石井貫一先生の７回忌が先日行われた。その時出席された遺族の方々、当会参与の牧野八郎、木村直美さんらのお香料全額を、夫人の石井愛輝さんから当会に寄付いただいた。石井先生が、方正の公墓、残留された人々に焦点を当てた映画ができたということを知れば、どれだけ喜ばれただろう。当会の活動が少しでも貢献できたことに、よくやっていると思われたか、それともまだまだこれからだと更に叱咤されたか。石井先生の情熱に応えていきたいと思う。（啓）

《表紙写真撮影・大類善啓》

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第７号）　2008年12月20日発行
発行：方正友好交流の会　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６　日本分譲住宅会館　４Ｆ
(社)日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会
HPアドレス　http:/www.houmasa.com/